

ばかりならん、宜推察すべしとてなみだを撲顛く〜とこぼしけり、勘平老婆が假哭をみて益心中に怒るといへども、且憤をしのび、都て事を曉らぬ光景をなし、病中末期のことも細にたづねとひて、しばらく説話におよびけるが、重て問うていへらく、傑兒が事一席に説りがたしとのたまふは、最奇怪なる言なり、いかなる來歴ありてかくはいひ給ふぞ、老婆忽面色を變じて云く、彼狗淫婦が事は説るも又けからはし、汝が旅行の跡にて近村の後生と姦通を做し、姦夫とともに何方へやらん逃奔し、今においてその去向を知らず、汝が手前も面目なき事どもなり、勘平これを聞きて故意いかりて云く、那狗淫婦いかなれば斯天地に神なき事をなして某をばづかしめけるや、たとひ彼等天を翔け、地を憐るとも必ず探出し、二の肝膽を引出して啖ふべしといきどほりければ、老婆は勘平が勇氣さかんなるを見て、腑腹心寒て心中大に怕るといへども、原來大膽の女なれば、暗にをさめ、只そしらぬ體にてぞ居たる、勘平漸々怒を收め、淫婦が事は且次に議すべし、龜略しがたきは泰山の事なりとて、指を屈め日を算へて云く、泰山する六月二十九日に死し給ひしならば、明日はすなはち斷七日にして四十九日に當れり、今夜は是宿忌なり某他國にありて泰山の忌日もしらす、齋戒だにせざれば、せめて今夜墓前に通夜し、香を燃り華を供へて薄意を表し申すべし、墳塋はいづれなりや、老婆が云く、背後の山上にはうむりしなり、勘平云く、某は當地に居住する事わづかなれば、地理にうとく、願はくは丈母某をみちびき墓地にいたらしめ給へ、老婆は彼に心機を見やぶられまじとすれば、其言に應じ、つひに勘平を引立て立山としたる折しも、鐘聲風にしたがひて耳にとゞろき、急雨しきりに降來りぬ、老婆が云く、今ひびく鐘ははや二更なり、殊に雨もふりぬれば、明日のことすべし、勘平云く、人の靈を祭るはもつとも宿忌をおもしとす、い

かにぞ今夜を過すべき、萬乞引路し給はるべしと、すこしも休まじき光景なれば、老婆は只得、頭に破れたる箆笠をいたゞき、手に一把の火把を揮照してすゝみ出る、勘平も一般箆笠を戴き、蓑衣を披け腰刀を帯び、跟にしたがひて走出たり、斯て急ぎ山に上り四五重の山城を過て、一株の大柳樹ある所にいたり、彼柳の下を見るに、あたらしき一坏土ありて一箇の窰塔婆を立て、上には經文および姓名法諱を寫けぬ、是乃與一兵衛が墳墓なり、勘平其儘地上に跪き、合掌して拜をなし、口裡に阿彌陀佛の寶號數十遍を唱へ、念じ罷るとみえしが、たちまち身を起し、はやく一脚をとばせて、老婆を墓の前に陽倒し左の手をもちりて彼が頭髮をつかみ、右の手には明晃々たる腰刀を抜き、尖を仰の上におしあて一聲吼りて云く、爾が悪事人告ぐるにより我つぶさにこれを知れり、さりながら汝が口より招承するを聞かざれば事分明ならず、悪事の首尾實落に供招せば一命は饒くべし、若半點にても詐らば、立地に渾身の皮を剥ぎ、細々切て臊子となさん、速に供招せよと責む、其勢たるや恰似、

皂 雕 追 紫 燕、 猛 虎 啖 羊 羔。

老婆は膽氣烈火のごとき勇士に抓まれ頸くだくるごとく、如何抵賴ことあたふべき、つひに悪事の始終のごとく供招におよびけり、勘平これを好々と聞をはりて已に腰刀を調轉して刺殺さんとなす岩、雨聲ますます猛く、電 暉々と光り、雷 崇々とひびきて、山も崩るばかりなり、勘平權且雷のすぐるをまつべしとおもひ、手を動さず雷聲やみて手をくださんとすれば、又轟き、とゞろけば手をとぐむ、如此することあまたたびにおよび、漸々雷聲とほざかり、已に又刺殺さんとしたる所に、老婆勘平が手を攔住め、くるしげなる聲して云やう、我は汝がためには現是丈母ならずや、汝我を殺すは道においてたがふ所あらん、

殊に我汝がために殺されしと聞かば、角兵衛一命をすて、官府に出で、汝が高執事を打たんとはかる密事を首告てかならず儻を報ゆべきぞ、若又我一命をたすけなば、汝が密謀を隠便になすべし、勘平これを聞きておもへらく、我怒にせまりて遠きおもんばかりなかりし、萬一彼角兵衛を打もらしなばもつとも大事なり、片岩老婆が一命を饒し、智をもつて彼等をあざむき、兩人をならべおきて殺すにしかじなど、只願肚裏躊躇していまだ決せざる折しも、後面の亂草のうち籟々响、一隻の野豬跳出し、前爪後脚泥水を踢起し、樹根岩稜を管す一字兒跳り来る、勘平これを見て急に手をはなち、身を閃て一邊に避る、老婆は此便機に乗じて逃去るべしと、わづかに一脚をふみ出す時、忽背後に鳥銃一聲撲的ひびき、説時遅那時快、ひとつの流丸老婆が後心上にあたり、叫聲阿不送、昏黒了死にけり、亦快光景なり、然に後面の林子の裏より、一個の獨戸手中に鳥銃を捉て出來り、心中野豬を打着とおもひ、黒暗裡一頭には火龍を揮り、一面には摸來摸去一摸して、勘平が腰邊に摸着、此時勘平閃と身を轉しかば兩箇鼻の尖を撞着、たがひに面を覗合たり、彼獨戸勘平を見て被一寒、急に身を回して逃去んとす、勘平忙々猿臂を伸て揪住、たちまち地上に踴倒しぬ、此獨戸は乃、是狸兒角兵衛なり、角兵衛はおもひかけず勘平に撞見し、恰斷線偶戲のごとく、手足揮軟として、すこしも拵扎ことあたはず、勘平大に罵りて云く、汝奸賊おもひしるべし明なる所には王法あり、暗きところには神靈あり、大罪を犯て豈能罰をまぬかれんや、汝が打放たる流丸、野豬に中らずして、反て夜乃老婆にあたりたるは、正是皇天われに手を假たまひ、同士打をなさしめて爾等を罰し給ふなり、今此仇を報ゆるぞとて、刀を擧るとみえしが、頭は忽前におち、體は後に撲地倒れたり、可憐這奴夫化して南柯の一夢となる、已にして勘平老婆が頭を刎ぬべしと、屍を引おこ

しけるに、懐に物あり、摸見るに、布幣にあまたの金子をいれたり、暗中摸算來に、恰五十兩あり、勘平想道、此金子は正是隱兒が典身金なるべし、今おもひかけず我手に入は、乃是、天の賜ふ恵なりとて、頂々戴々、依舊布幣に收め、懐にぞおし入れける、這是老婆勘平が膽氣はげしきを見て心中大に恐れ、此夜颯々、個空、此所を逃去り、角兵衛とともに他國に逃奔すべしと思量し、彼身價金一百兩わかちとりたる殘を暗に懐にして、此處に來れるなり、皆是皇天彼等を罰し給ふがゆゑに、奸計都て如此齟齬なり、古人説得好、道是、

湛湛青天、不可欺、未嘗舉一惡、已先知、善惡到头終有報、只爭來早與來遲。

斯て勘平老婆が頭を刎おとし、兩人の屍を把て洞裏に擱在、二の首を墓前に供へ、拜を行ひて云く、泰山の靈魂速に天界に生じ給へ、我今姦夫淫婦を殺し、仇をむくい候なりと笑了て少刻時をもち、拜をなして居たるに、恠哉墳の下より一陳の冷氣生じてあたりを盤旋とみえしが、勘平おぼえず毛髮たちて竦然たり、こはあやしやと眼をひらき頭をあふぎて見れば、一の陰火朦々朧々と焚え黒暗中に人影現れけるが、見るがうち忽然として化うせぬ、勘平これを見ておもへらく、今の人影は正是與一兵衛の形容なり、さだめて冤をはぶき、憤をのぞき、快く佛果を得ことを告んとおもはれつらんが、泰山の陰氣、わが陽氣に壓れて言をかはずことあたはず、空く化うせ給ふものならんと、奇異のおもひをなし、つひに驚にくだらんとしたるが黒洞々として東西をわかつたず、殊に火把打滅したれば一步もす、むことあたはず、大に煩惱てぞ居たりける、説分兩頭、扱彼野豬は一直に地路をのぞみて跳去りけるが、此とき遠々地むかひより、

一個の旅客手裡小灯籠を提てす、み来る、那旅人頭に箆笠を戴き、身に雨衣を披け、身邊に兩口の腰刀を跨びたり。只燈火を打滅さんを怕て、雨衣の前襟を把て大雨を遮掩來りしが野猪の來るを見て、身を急に避んとするに、路窄避通るべき所もなければ、奈何することなく、只得灯籠を松樹の枝頭にかけておき、急に應じて一邊にありける封識杭を引抜て手に拿ち、岩石に倚て相待ちけるに、野猪は已に近々と來り、旅人をめがけ、狂吼て跳蕩る、旅人は急に身を閃し、野猪の背後に躍出る、野猪は又鼻をならし、牙を咬み大に猛勢をなして跳か、りければ、旅人は尙右に閃き左に避け、雙手に那杭を舉起、灯籠の光に乗じて、畜生脚を觀透し、劈下來只一打と撲けるが、野猪も又眼明にして、たちまち身を躍らせ杭を跳越えけるゆる、旅人の力杭にあまりて、傍の松樹に打著、灯籠ひるがへりて地上に墮て、忽暗々として眞黑夜となり、更に東西を辨せず、於是旅人大に慌て、今は只身を天運にまかすべしと、野猪の吼るを心の的となし、前後左右に身をはたらかせ、只顧踏打にうちけるが、此旅人原來手快勇夫なれば、遂に野猪を打倒し、尙勢に就て連打に五七うちければ、野猪は大に苦み、已に息絶て死にけり、旅人野猪の死罷るをうか、ひ、暗の中灯籠を摸索めて、身邊にたくはへたる火刀火石を取出し、火を發出して灯籠に點しき、且此野猪をみるに、全身の毛は金の針を裁たるにひとしく、小牛のごとき大小ありて、世に稀有の老野猪にぞありける、眼口耳鼻より鮮血涌ながれて死にけり、尙好々見れば銃傷あまたありて、全身に斑をなせるがごとし、又被封識杭をみるに六尺ばかりの長短あり、都て方にけづりて正面に文字あり、石堂右馬丞義基采地と寫たり、別に又許多の文字あり其文に道、

近道西岡の山上に、新一隻の野猪あり、人命を傷害せるにより、見今當郷の里正并に獵戸人等に命じ、賞錢七十貫を出して、打捕へしむ、未獲、如半夜過往の旅人あらば、夥を結び、隊を成て過るべし、單身の客人半夜に山を過ることを不許、恐は性命を傷害あらん、各宜知悉、

斯旅人これを讀罷り、自語に説道、原來此野猪往來の旅人を傷るにより、當地の領主、石堂侯獨人等に命じ、賞錢を出して捕へしむるとなれば、われ今これを殺したるは不圖して一害を除きたるなり、我は只無益の殺生をしたりとこそおもひつれと、つぶやきけり、若此旅人がごとく了得にあらんば、誰か能如此稀有の野猪を容易殺し得べき、詩あり證とす、

西阜野猪尤可怖、景陽猛虎復何恟、
請看烈漢能攬殺、不滅梁山伯武松。

扱此旅人は是誰ぞなれば、乃是鹽治侯の家士、姓名を干崎彌五郎と叫做的なり、彌五郎野猪と闘ひ、渾身みな泥濘に沈れ、頗氣力を費しければ一步もはやく麓に下り、客店をもとめて一宿せばやと、急ぎ路徑を走り山の背後に繞り出けるに、只見遠々地山嶽の叢中、剗地搖動て、忽然として亦一隻の大野猪をあらはし出す、彌五郎おもへらく、我未宿志を遂げざれば我這身子はわづかに蚤子の一口嚙をも容すべからず、いはんや氣力をつかひ四肢ともに軟疲れ、能再野猪に敵しがたし、若生命を傷はばいづれの命を以てか故主の冤をむくゆべき、唯宜避去べしと、關心を休め暗に窺みるに、那野猪はたちまち立起て人の如く奔走す、干崎こはあやしやと看一看、是乃野猪にはあらずして一個の漢子箆笠を戴き、蓑衣を披たるにて、原來蓑衣の毛茨たるが雨にぬれとほり之に灯籠の火の光うつりて、野猪のごとくに見えたるなり、彌五郎方纔放心近々とす、み来る岩彼蓑衣を披たる漢子一聲叫て、容官大膽ながら討火といふ、彌五郎托地跳

退數歩乃喝て云く、我聽得たり、這條路には強人の出沒せるおほしと、爾が模様就是那賢買を做的にまぎれなし、討火といふはかならず我を試みて買路錢を索めんとらん、我不與く、爾速に路をひらくべしと、説罷りて刀の柄を奪り、他若拵扎とせば正好手をくださんと控へたり、此漢子身を躬め陪簡小心て云く、小人は原來本處に居住の者なるが、白の猛雨に火把を打滅し、進退をうしなふゆゑ、火を討め火把に點さんと念じて叫かけまうせしなり、豈反心ならん、かならず性給ふなといふ、彌五郎此漢子が話嬰を聞き暗記あれば睛をさだめ細に面貌を看了便叫道、嚶呀足下は、莫不速禁勘平麼、勘平云く、這等説的是千崎彌五郎耶、彌五郎が云く、賢弟別來康健麼、勘平云く、長兄無恙おはしけるかというて、兩箇喜事かぎりなし、峯に雨過ぎ雲散りて、一輪の明月現出で、皎々と四下を照す、千崎月明に乘じ、勘平が渾身都て鮮血をすゝきたるを見て大に恠み問ていへらく、賢弟の衣裳血に染りたるはいかに、勘平その縁山を説出す、有分數、大星由良煙花寨中に入り、鐵石の心を柱て、遊戯を務め、山岳の志を強て浮浪となし、直に仇家をして留心提防おこたらしめ、小恥をして悪まず遂に大功を立てんとす正是、

千古功名光史筆 一生忠義出天真
畢竟勘平彌五郎と甚言語を説出來、且下回到分解を聴け。

(前編卷之五畢)

佛ばさちの功德、神佛の事しるせるふみには、そらごとともまじるめり、此國の古物語も、おほくはまことしき物のみありぬともおぼえず、古事記、神代紀のふみなどはかしこければいはず、からくにのひとのしるせしことどもも、そのふみ、かのふみとあはせ考ふれば、かつたがへるふしもおほかり、なべて世中にありとあるふみ、なかばはうけがたきことぞあまたみえたる、さりとて一向にすてたらんも、またひがことなるべし、しかしながら人の子ををしへ導かんには、みちかく心えやすき文にます物はあらじ、わが友山東のなにかし常にそらごとのふみ作ることに、今の代の人なべてしれる所なり、これなんことにそらごとの構作たる物にして、かのたくみにせし施耐庵てふ翁に見せたりとも、かならずことませずしてにげつべし、されど巻ごとにふかく勸懲の意をこめたれば、是もまた人の子のをしへとやなりぬべき、そも光源氏の物語はたはけたるこゝろをかいたるを、それだに警戒の書とさだめたためり、此書なむつゆさばかりのあたけたることをいはず、三綱五常のまめだちたるすぢをしつれば、うけばかりていましめの書とこそいひつべけれ、されどくすしうひがめる人のみて、かゝるそらごともていましめの書といへるは、強たるそらごとよと識もやせむ、そはなかくそらごとなるべし、しかはあれど、物ごのみは人のこゝろなり、むかしの人の館を見て、老をやしなはんといひけるを、戸樞にそゝがん物ぞといひしたためしもあなれば、とまれかくまれ見む人のこゝろぐにまかせ書いつべくこそ。

石川五老述

山東主人才有餘、涉獵稗史幾著書、海內誰是不知君、洛陽橋南混市居、渾於世情無不通、英豪品搭自無窮、請爲忠臣水滸傳、深顯積惡稱不忠、使人懲惡以勸善、覽者有意歸其風、豈嘗尋常止兒啼、稗益世教在其中、世上雷同剿說法、巧唱經術育穉童、些須何補於啓迪、苦楚還是近虛工、果哉山東主人情、舍彼取此助世教、降志辱氣亦何厭、可稱醒世一書生。

東 兆 熊 題

山東先生、姓^ハ兩^ハ瀬、名^ハ田^ハ藏、字^ハ伯^ハ慶、一、號^ス醒^ス世^ス老^ス人、家^ス于^ス東^ス都^ス洛^ス陽^ス橋^ス南^ス朱^ス提^ス街^ス、世^ス人^ス呼^ス爲^ス京^ス傳^ス子、先生、蚤^ニ抱^ク援^ル淪^ル婆^シ心、托^レ諧^ニ以^テ誘^フ稚^キ蒙^ヲ、舉^ル世^ニ惟^ニ識^レ有^リ京^ノ傳^ノ之^ノ稱、未^レ諧^ニ先^シ生^ノ名^ヲ氏^ヲ、因^テ詳^ニ標^ス于^ス茲^ニ云。

書肆 仙鶴堂主人 拜識

欠

MISSING

再説、鉄九太夫は、前年郷右衛門がためにたくはへの錢財をうしなひしより、世をいとなむべきよすがなくせんすべなきまゝに、一ツの門路をもとめて師直に内應し、彼が間者となり、京都にありてもつばら大星が心腹をさぐり、日々鎌倉に急足をはせて、ひそかにその光景を告げしらせけるが、師直は大星が失行をきつて、なかばは信じなかはうたがひ、とかく安き心はあらざりき、しかるに此ころほひ、京童四句の語を謠て道、

一人貫作事、日生連立功、
刺蜂死蛛網、還令時世隆。

といふ謠なり、一人貫て事をなすといふは、一人をつらぬけばすなはち大の字なり、日生連て功をたつると云は、日生をつらぬれば乃星の字なり、事をなし功をたつる人は大星が身に應ず、第三の句に刺蜂と云は、師直が奸悪蜂の毒鋒よく人をそこなふにたとふ、蛛網に死とは、大星等天羅地網をかりて、つひには仇をむくゆべき前兆をいへり、終の一句は、奸臣ほろびてふたゞび太平無事の日に値んと云ふ意なり、此謠言都て師直が身にあづかるといへども、彼徒はますく權威につのりて、すこしもその意を曉すことあらざりき、却説、時光すぎやすく日月梭のごとくめぐりて、此年すでに北朝の康永元年なり、しかるに師直は大星が品行を放心不下おもひ、家士警坂伴内に命じて、なほ又大星が心腹をさぐらしむ、これによりて伴内にはかに行装をとゝのへ、星夜て京師にのぼり、九太夫と心をあはせて、もつばら裏應外合の計をもちおけり、かくて一日伴内大星をこゝろみんとて九太夫に案内させ、當地の曲中にきたりて且その光景を見るに、眞是別の世界にて、見る目もくらみ心もとくるばかりなり、慾界の仙都昇平の樂園

とは此地のことにこそと、ひたすら稱讃して、心中大に趣をもよほし、九太夫とともに此地第一の有名な妓楼、一季達家の前門にすゝみ来り、目を舉て見るに、門上に一扇の横列をかけ、待來送歸と云四字をゑりつけたり、屋宇精潔、花水蕭疎、迥に塵境にあらず、一間ごとにかくばくの銀燭をてらしてあたかも白日のごとくなり、兩人たゞちに門首にいたりたるに、たちまち鼓吹三絃ひびき、しきりに時曲を唱ふ、その曲兒に道、

花發祇園裏、玉簪羅綺連、いろそろへ
東西極樂國、はうみだの 赫奕令人眩、ひかりかややく

とぞうたひける、すでに兩人門ぐちにいたり九太夫且さきにすゝみて、熟客来りつるに何ゆゑむかへざるやと、聲たかやかに叫はりければ、紅裙の保兒慌々忙々いで来り、誰氏かとおもひつるに、九太夫官人にておはしけるか、頃はたえて光臨をめぐみ給はざりしに、今日しもいかなる風相公を吹きて、我家にはいたらせけるぞと、満面に咲をふくみていふ、九太夫がいへらく、今日は一位の新到的客人を請來せり、兩盃すゝめ申さんとおもふに、看見許多きやくある光景なり、耳房にもあれ別外一個の空處はなきや、保兒が曰く、今晚は彼由良大老官あまたの名妓を包てあそび給ひ、客廳は都て坐滿ぬ、只一個の空樓あり、所せくおぼされんが枉てあそび給ひなんや、九太夫がいへらく、その空樓はさだめて蜘蛛窩こそおほからめ、保兒がいへらく、相公惡誦をいひ給ふな、九太夫が曰く、我年高て只孀子の羅網におちんことを怖るなりと、あざれば、保兒は噫々とうちわらひ、いざこなたへ来りねといひて、兩人をみちびき、つひに樓上にのぼらしめけり、さて大星は此夜此の後廳にありて酒宴をまうけ、有名な妓をつどへ、旨酒蒸殺

をそなへて、大に飲酌をもよほしけるが、爛醉のあまり妓女們にむかひていへらく、曾て我致麻維祖といふ書を見つるに、唐の玄宗帝、楊貴妃とともに、皎月のもとにおきて、錦帕をもつて目を覆み、方丈内にありて相とらへてたはふれとす、これを捉迷藏となづけたるよし見えたり、今此の宴上將に興つきんとすれば、我彼唐帝にならひ、爾們とともに此たはふれをなし、捉へたるの大杯の罰酒をあたへて、ふたゝび興をおこさんと思ふ、なんぢらが心はいかんといへば、みなく口を齊くしてこはよき遊にて侍り、とくはじめ給へといひて、そゞきたちさわぎければ、大星やがて手巾をとりて目を覆み、已に彼捉迷藏をはじめ、翠袖の歌妓、紅裙の保兒、衆妓にうちまじりて群散し、ひたすら掌を拍てはしり興す、大星は浪々踏々として兩の手を伸いだし、四邊を探りてこれをとらへんとす、あたかも盲龜水を踏蹴がごとく、伯牙琴を撥撫に像たり、これによりて大家わらひどよめき、大に興をそへ席上ゆすりみちたる折しも、鉄九太夫樓をくだり、抜歩して此に來り、やをら紙門のしりほそめにひきあけて、ひそかに此光景をうかゞひ居たり、大星は東に按で西に摸りてかしくいたり、紙門をひらきて九太夫をとらへ、やうく一箇とらへたるぞ、小三枚等とくく酒壺をとり來りて、罰酒を篩げと叫はりければ、九太夫おもひがけざるかほつきしていへらく、大星兄小生をとらへてこは何とし給ふぞ、大星は此聲をき、耳なれたる音響なれば、いそぎ手巾をとりすて、見るに、是九太夫なれば、忙々禮をなしてはいはく、請免小人は只替間等のかくろひをるならんと思ひて、失禮におよびたり、豈料や老兄にあらんとは、分手以來おぼえず兩年をすぎぬ、いよゝすくよかにおはしてよろこびにたへず、かゝる所にて老兄にまみゆるは誠にめづらしき出會なり、九太夫が曰く、小生今日偶此妓樓に來り、此廳の熱鬧を見ていと眼中出火、那裡にありてう

かどひつるが、仁兄の遊とはつゆばかりもおもはざりき、ひとへに無禮をゆるし給へといひて、應に座しければ、大星は大によるこび、妓女等にむかひてはいはく、某おもひかけず珍客を得て、心上大におもむきをえたり、さはいへ酒肴都て盡たれば、席をかへて寛に一杯を酌まんと要なり、爾等はさだめてながき宴上に陪して大に倦たるべし、權且歌むべしといひていとまをせければ、妓女等は箇々禮を叙てしりぞきけり、さて大星はみづから九太夫が手をたづさへて、一ツの小軒子にいたり、あらたに酒肴をそなへしめて、ふた、び宴をもよほしけり、九太夫はこれこそよき彼が心腹をさぐる時節なれと、ひそかによるこび、只管箆言巧語をもちろ、窺破蘊底とはかりけるに、大星は只醉に托て破落戸の體をなし、すこしも仇をむくゆべき心機をあらはさず、や、ひさしく杯をめぐらしけるが、大星は蓋を接たるとき、九太夫快兒を把り、碟仔に盛たる章魚を夾て大星にあたふ、大星これをうけて、敬領といひつ、やがて吃はんとす、九太夫手を押住めて曰く、大星兄明日は故主の齋日にて今宵は乃宿忌なるを、齋戒はせずして却て這魚菜を吃給ふ、その意いかん、大星が曰く、老兄は愚痴なる事をいふ人かな、主公輪廻して身を章魚に轉じたるさたをさかす、よくおもひ給へ、老兄とそれがしと今かく白身人となること、起根はみなこれ主公の短見によるならずや、されば冤こそあれ少くも托庇はあらず、なごて齋戒する心あらん、此魚菜くらふともいさ、か妨なしといひて、ころろよく味ひければ、陰謀賊智の九太夫も、只是呆たるばかりなり、かくて大星は泥のごとくに酔ひ、酒力にたへずして九太夫がまへに横さまにたふれてねぶりのしが、や、熱睡大に鼾聲ひびきければ、九太夫猛然としておもへらく、我此におきて此宿鳥をころさば、すなはちこれ草をきりて根をのぞくの大功なり、かならず師直公のおもき恩賜にあづかるべし、寶の山に入

ていかでか手をむなしくすべけんや、當に手をくだすべしとおもひきはめて、かたはらにありつる大星が腰刀を把り、拔はなちて見るに、刀身都て鏽を生じ、眞に箇の白鉄刀也、九太夫おもへらく刀は是身を護るものなるを、已に如此なるは、賊に駄子の證兒なりと肚裏に冷咲ひ、刀を調轉して已に刺殺さんと立かゝる、大星が性命嗚呼危哉、正是、

五更山に墜る月のごとく八鼓油盡る燈に似たり、

しかるに當時、むかうの湘簾のうちに、一個の人躲居て半身をあらはし、ひそかに手を拵て睨眼す、此人はすなはち伴内なり、九太夫その意は猜すといへども、つひに氣おくれしてむなしく手をとめ、刀を鞘にをさめて依舊さしおき、伴内とともにふた、び樓にのほりぬ、後に好事先生のつらねたる詩あり、證とす、

白髮奸心如野狐、不知還笑縮刀愚、
大行無咎顧細瑾、亡君宿忌受一章魚。

再說大星が兒子力彌は、此夜家中より一里半の遠近をへたて、汗雨通流、氣急喘促、此妓樓に跑来りて、廳の光景をうかゞひけるに、父熟睡して此にあれば、只叫醒は聲の人にもれん事をおそれ、たゞちに枕邊にいたり、刀をとりて凍と一こる琿口をひゞかせければ、大星忽頭を擦げ、四邊をうかゞひて曰く、力彌なんち刀をとりてひゞかせたるは、必急事あるゆゑならん、きづかはし、とくく告げよといふ、力彌は文匣をとり出し、貌好大夫人より此密書をたまはりぬ、いそぎ拜讀し給へといひてあたへければ、大星これを接て曰く、我今晚は箇の深計あれば、權且此家に宿すべし、爾はいそぎ立かへりて、夜のうちむ

かひの轎子を扛せ來り、這後園にかくれゐて、我しらす號を待べし、その號は如此くと低言ければ、力彌いち／＼これを傾諾、飛也似にはせかへりぬ、大星は夫人の密書を得てきづかはしくおもひ、文匣をひらき書を取り出して、これをよまばやとおもひけるが、人目をはぐかりて且懷に收め、手を又き首を低て、しばらく黙して居けるが、心中におもへらく、我身不肖なりといへども、顔文を學び武を講じ、常に忠義をわすれざるに、いかなるあしき宿世にや、君をうしなひ怨をたくはへ、今すでに四十餘歳におよび、志を枉てかゝる花柳の間に戯れ、たゞ逸遊荒醉を事とし、つとめて浮浪の人となり、羞をしのび嘲をこらへ、かくいたづらに光陰をおくる、是の應報なるやとおぼえず涙をくだしけるが、恨を感じ懷をいたましむるのあまり、箇の絶句をつくり、かたはらにありつる碁局をふみて身をたかうし、身邊の墨斗を把りて、白紙をもて糊たる天花頂板に寫て道、

今日遇遊君一洞房錦帳前、
明朝離別後、死節有誰憐。

書畢りて筆をすて、讀をはること一遍、ひたすら嗟嘆して後室に入りぬ、放下一頭、却説、九太夫は伴内とともに樓を下りて此に來り、低言ていはく、かしこには人ありて密事を議しがたし、幸此に人なければ説申すなり、起先小生すでに彼人を刺殺し、私闘に托けて事をすまし、師直公の病根をのぞかんとおもひつるに、公は何ゆゑとゞめ給ひけるぞ、伴内が曰く、彼然敷といへども、原來計おほきのなれば、もし陽眠して誑んもはかりがたく、これによりてとゞめ申せしなり、彼主人の齋日に魚菜をくらふ性子にて、いかにか弊をむくゆべき志あらん、とく此よしを鎌倉につけて、隄防の門戸をひらかしむべし、九太

夫が曰く、いかにもしかるべし、かれが性子をこゝろみつるうへは、さまで隄防におよぶまじ、さはいへ早刻力彌が拿きたれる文匣こそ氣づかはしけれ、小人はあとにのこりゐてその尾をさぐるべし、公はさきにかへり給へと云て小駝をよびて、二乗の竹轎をとりよせ、且伴内を轎にのらしめ、一乗の轎子には一塊の石頭をとりてのせければ、伴内はその心をさとらざりぬ、いかなるゆゑぞとへば、九太夫が曰く、これをなづけて金蟬殻を脱るの計といふなり、公は只小人とともに此轎にのりたる模様装做し、轎子をならべてかへり給へといふ、伴内き、てや、その心をさとり、つひに別をつけ轎子に乘り出行きぬ、斯て九太夫はあとにのこり、又前の小軒子にいたりて、何の心もなく四邊をかへりみたるが、偶彼天井の戯書を見つけ、よみをはりて大におどろき、たちまち心中におもへらく、此詩はうたがひもなき大星が宇跡なり、句中に死節の二字あるは、乃是仇をむくゆべき萌をふくむにあらすや、かれたくみに人をあざむけども、酒のために心をみだし、かしらをかくして尾をあらはす、昔日梁山伯の宋江、瀋陽樓におきて爛醉し、壁上に反詩を書てみづからわざはひを悲たるとかきく、此詩大星が自筆なれば、これよき後來の證兒なり、今我眼にかゝりたるは到底師直公の高連なりとつぶやき、やがて壓衣刀をとり出し、まつたくこれをきりぬきてふところをさめ、みづから點頭つゝ、後園の樹木のしげりたるうちにかくれいりぬ、かくてや、時うつりて三更の鼓ひびき、此家の男女みなく房間に入てねぶり、寂々として物の聲しづまりければ、折こそよけれど、大星おくの問より出來りて、かの夫人の密書をひらきよまばやとおもひ、しりへをかへりみ、まへをうかぐひける所に、かしの簷の上へ一個の練籠をかけ、そのうちに數百の螢火をはなちおきたり、大星これを見て大によろこび、車胤がたぐひにはあらざれども、人目をさげんにはよき

灯火なりとおもひて、その下に立寄り、彼封書をひらきて半をよむ折しも、むかうの樓上に人ありて三絃を操ならずし、蕭然曲兒を唱ひて道、

呼々 呼々 娘 語 來、なくこみきけば 更 疑 夫 婿 與 居 臺、つまにあふむの
頻 懷 舊 眉 一 眉 情 畫、うつけしことば 吁 是 杏 嗟 又 已 哉。おかしやんせ

となん、帛を裂くばかり絃を撥て、こゑうるはしうを唱ける、大星は樓に人あるを知り、いそぎまどひて書を袖にかくしけるが、恰好樓上の絃歌も音をやめぬ、時に一個の妓ありて樓上の勾欄に立てり、げに皎皎たる窓のもとに、娥々たる紅粉の粧、ひかりあひたる、いふべうもあらず、織々たる素手をいだして、欄干のもとにひらいて、蕩子行て不歸と、うちひとりごちたるさま、なべてのきはははあらすと見えたり、大星がかたをみやりて、かしこに物し給ふは、山老相公にはあらずやといふ、此妓女は乃 是 傑兒なり、大星樓をのぞみて曰く、爾はいつのほど其所に來りつるぞ、夜更けぬるになどねむらざるや、おかるが曰く、奴家さき程相公に陪して酒をすごし、いとくるしければ、掉了風寒醉を醒さばやおもひ、こゝに來りつるなり、相公 權 ちま給へ、わらはそこへまゐるべしといひつ、三絃の軸をひねりて絃をゆるめ、撥を收めて絃中に挿はさみ、衣裳を整頓ひ、起て手燭を把り、胡梯をくだりて大星が前にきたる、當時おかるが扮粧たるさま、頭には鴛鴦銀釵を挿し、身には緞文單衣を穿ち、腰には銀紅羅帕を束たり、都是輕鮮々たる時世粧、前にくらぶれば別に一派の風騷をましたり、彼生得て沈魚落雁の容、閉月羞花の貌あるのみにあらず、吹彈歌舞などことごとくこれを曉したれば、時の人こそりてかれが容色をしたひ、其名一時にたかゝりけり、却おかる手燭をとりて樓を下り、たゞちに大星がまへにちかづきて曰く、相公い

まほどよみさして袖に入給ひしは、さだめて備書ならん、奴家に露ばかり見せ給ひなんや、大星が曰く、しかなまめきたる書にあらす、故郷に在る朋友のもとよりおこせたる書簡なり、なんぢこれを見て何の益かある、おかるが曰く、さまでなくし給ひそ、相公こゝにききめ給ひしより、かく奴家を包住にしてものし給へども、ひとたびも枕席を接給はず、おもふに相公はわらはが情をうばひて、他の妓女と密にたのしみやし給ふならん、うべしこそわらはにつらかりけれ、その有難い情書一度見てあえたくおもひ侍れば、ともかくにも見せ給へとせむ、大星は故意不慮なるかほして曰く、こはおもひよらざる事をきくものかな、いかでかさることあらん、なんぢかならず心を焦ことなかれ、おかるが曰く、もししからざることをあきらかならば、その書簡を見せてわらはがうたがひをはらさしめ給へ、とくくといひつ、大星が袖のうちにつと手をさし入れて彼書を引出し、手はやくおのれがふところにおし入れ、みづから半抱きてはなさず、大星は密書をうばはれてすこぶるおどろくといへども、さあらぬおもちして、七十三八十四にいひときけれど、とかくかへすまじき光景なれば、只得心中に一ツの計をまうけ、ことばをあらためて曰く、爾さまでうたがふならば今宵たゞちになんぢが身を贖ひて、我妾とすべし、これに上こすまことやある、とくうたがひをはぶきてその書をかへすべし、おかるが曰く、相公の心はもとよりうすきをしりぬ、しかの給ふともいかで眞とせんや、只好三歳の孩子を誑くべきことばなり、大星わらひて曰く、大丈夫の一言は駟馬もおよびがたし、なんぢきかずや、
自 薄 漸 厚 者 久、初 重 後 輕 者 疎、又 常 言 道 弄 假 成 眞
といふこと有り、こゝにのぞみていかでかいつはりをいふべき、若我言にちりもいつはりあらば、正是

如是ならん、

鼈 變 更 爲 洞 庭 月、 石 升 直 作 銀 河 星。

おかる此盟言を聞いて曰く、多謝厚情、わらはは別外に私情あれば、實は相公の妾となることおたはざるなり、大星が曰く、もし私夫あらば、なんちをあたへて團圓完聚、火坑の苦思をのがれしめんに何のさまたげかある、此事よくはからひてん、且その書簡をこなたへもどすべし、おかるが曰く、幾度の給ふとも此書はなほもどすまじ、わらははにたまはれかし、大星が曰く、なんち實にもどすまじか、又もどすべきか、おかるが云、わらはは百度もかへすまじきに、相公これをいかにし給ふや、大星あぐみて、つとよりておかるをとらふ、おかるあながちに放さず、いなもどせ、いなもどすまじといひてたがひにあらそひけるが、大星おかるが観個空て手をひきはなち、書簡をうばひかへさんとしけるを、おかる只双手を伸して胸の上を緊と抱きてはなさず、たちまち柳眉を蹙望星眼を睜開ていへらく、爾獨聰明の人にて他人はみな愚なりとおもふか、なんち我を誑て書簡をもとめんとすとも、いかでかあさむかるべき、さきのごとくいひしは、みな爾をたはぶれて心を焦せたるのみなり、なんち浮浪的風に粧做て、妓樓にあそび、娼家に酔ひ、ひたすら醜行をなすは、都是仇家をあざむく計策にあらずや、いかでか本心の所爲ならんと、すでに心機を見ぬきての、しりければ、大星此言をき、て心中大に慌我、いかでかさることあらん、なんち胡言亂語をいひて、聲をたかうすな、人ありてきかばまこと、おもひ、我をあやしむべきに、只宜聲をひきくすべしといふ、おかる大に冷笑ひて云、爾外人の耳すらなほおそる、ならば、かばかり大膽くはだてはせまじきはすなり、爾們黨をむすび、事を復讐に托して、當時の執政たる高階の相公をうしなはんとはかる

は、正是死にあたるの大罪なり、かならず此書簡は、同心合體の徳がおくりたる密書ならん、我が、る大事をしりつ、すてをかば、後日爾們が連累になり、此身にゆ、しきわざはひをおひぬべし、よし、此密書を證兒として、官府に首告にはしかじといひて、すでに身をひるがへしはしり出んとせしかば、大星ますくおどろき、急々忙々猿脩を伸して、おかるが衣の襟を把り、地上にひきたふしてうごかさず、密書をうばひかへさんとて、おかるが懐に手をさし入れける折に乗じて、大星が懐より錦の帊につ、みたる刺刀、地上に撲地おちてなれば鞘を抜けたり、大星いそがはしくこれをひろひとり、手にもちたるを見て、おかる忽聲をたかやかにして、大星わらはを殺さんとす、やよく人々、とく出あひてよとよぶ、大星此にせまりておもへらく、我小事をかへりみて大事をあやまたんをおそれ、さきほどよりしばし怒をしのぶといへども、此女密事をさとしたるうへは生けておきがたし、寧ろ索ころすにしかじと、心中におもひさだめける所に、おかるふたたび第二聲をよばはりければ、大星これをしのびず、左の手をもつておかるが胸のうへをおさへ、右の手に刺刀を把りて、つひに胸のあたりを一刀さしとほしければ、一聲阿と叫てのけさまに倒れ、鮮血滾流て満身をくねなるに染めたり、大星刀を調轉しとぐめをさ、んとしけるに、おかるその手を遮住めて、相公權且手をうごかさず事を休給へ、わらはがおもひりたる一事あり、委曲に告きこゆべし、聞きてたべよといふ、大星いぶかしとおもひながら、四邊に心をくばり手をとめてぞ居たる、おかるいきのしたに説道、相公は雲州におはして、わらはが身の上をしらせ給ふまじ、わらはは鹽治侯の大夫人につかへたる女なり、故主世におはせし刻命によりて、早野勘平が妻となりぬ、しかるに丈夫勘平師直が奸計に陥り、五郎正宗、浪平行安、二鞘の劍をもとむ、そのゆゑによりて主公破肚をなし給ふ、到

の細作となりて、胡亂有的没的よくも告報けるな、我々幾十餘人、或は爺娘にはなれあるひは妻子にわかれ、百折千磨をうくる事、只是主公の仇をむくはんがためなり、今晚は是亡君の宿忌にて、恩主齋戒の夜なるに、魚菜を把りて我にあたふ、これを吃肚中は、あたかも熱鐵汁をそぐかとおぼえて、這身子の十四の骨を、萬段にくだくかとはかりくるしかりしぞ、這斷千賊萬賊と罵つ、くびすちをとりて地上にうちふせ、臉上皮を擦傷ばかり、擦來擦去してくるしめけるが、又說道、我さきほど戲書したるは、解となしてなんちを釣べき計策なり、豈酒のために本心をみださんや、爾愚なるゆゑに、果して我計におち、我を探らんと要てかへりて我にさぐる、只吊桶井のうちにおちたるところおもひつらめ、いかでか非却て吊桶のうちにおちたることをしらんや、今宵おかる丈夫にかはりて忠死をなすれども、いまだ一個の仇人を殺されば、黄泉に起き、主君にまゐえて分説あるまじ、彼をして大功をなさしむべしといひて、おかるが釘兒をぬきとり、みづからの頭上に挿し、權爾にかはるといひて、九太夫がもちたる刀をうばひ、九太夫が胸の上を、脰肢脰察的拗ければ、九太夫は只七頭八倒し、手脚亂動て死にけり、大星這光景を見て、こゝろよきかなくといひてうちわらひ、彼詩をかきたる小紙をうばひかへし、手燭の火をもつてやきすて、扱かの釘兒をぬきとり、急に應じて假に銑鏡となし、簷にかけたる彼蝨籠を的に、ねらひをさだめてなげければ、當の一響響て、あやまたず、蝨籠をうちやぶり、數百の蝨火ひとしくばつと飛のぼりて、恰も流星ををはしるに一般、是乃此夜の號なれば、後園の假山のかげにかくれ居たる、大星李達耶、夜邪魔重太郎、千邪鬼彌五郎門、一乗の轎子を擡て出來り、地上にひざまづきて指揮をまつ、大星三人をさしまねきて、鷹の上のぼらしめ、這場の光景を見せけるに、おもひまうけぬ事にてあれば、

みな一齊におどろきけり、大星が曰く、我々九太夫が奸計をくじかんと要て、爾門をよびよせおきつるが、彼果して我歸にかかりてかくの如し、只はからざるはおかるが忠死なり、九太夫が屍には外套をうち披け、嘔醉人の體に装做し、鴨水にしづめて水漿を吃すべし、おかるが屍は轎子にをさめて我家におく去べし、かならずしも人にあやしまれな、夜のあけぬまにはやいそぎね、とくくと命じければ、三人はこゝろえ侍りつとこたへて、指揮のごとくはからひ、轎子にそひて後園の小門よりいでて、飛也似走去けり、時に雞啼々と叫て、すでに五更のころほひなり、大星は獨あにとゞまり、數百金をとりよせておかるが身を贖ひ、人口をおほひけるゆゑに、此地の者どもは、實の從良とおもひて、すこしもあやしむことなかりけり、そのうち大星標兒がために修設好事、その靈魂をあつくまつりけるとぞ、後人標兒が貞節を讃てつらねたる詩あり、説得て好、

(後編卷之一畢)

桃	李	花	顔	翠	柳	腰	相	爭	世	上	買	其	嬌
何	論	宋	代	閨	婆	惜	彼	淫	是	貞	隔	二	環

といひしもうべなりけり、さて後來如何ことかある、且下回到分解を聴け。

忠臣水滸傳後編 卷之二

第八回

重太郎月夜竹森と會す
戸難瀬雪天土兵と闘ふ

説話寺岡平右衛門は、大星にしたがひて、權京都に居けるが、頃日鎌倉へ行べき飛報を命せられ、にはかに行装をと、のへて、彼神行の法をおこなひ、早道の奇術をなして、わづか二日半にして、鎌倉にぞゆきつきける、扱人のうたがはんことをおそれて容を變へ、頭に遮日笠を戴き、一荷の雜貨擔をになひ、手に串鼓をひねりて、北國の郷談をつかひ、客商に假粧て、こゝかしこめぐり、暗に仇家の動靜をかぐひけり、此ころほひ鎌倉は、足利直義公管領し給ふより、麾下の列侯、あまた第宅をかまへて住給ひぬれば、谷七郷の富庶、京都にもゆづらざる光景なり、正に是、

鶴岡 如レ雨 搖錢樹、龜谷 欺レ雲 聚寶盆。

ともいひつべし、却説一ツの大街あり、這是鎌倉第一の要路なれば、ゆき、しばらくもたえず、更に熱關ところなり、平右衛門此邊に繞出けるに、忽笛を吹き鼓をうつ聲しきりにひびきぬ、いかなることあると、なほす、み行て見るに、此に一座の拘欄あり、是乃田樂法師の俳優なり、帷幕片々として風にひるがへり、鼓吹器々として耳にひびく、只是見物の耳目をおどろかすべきかまへなり、外面をあふぎ見れば、四五區の白木の板の招牌をか、げ、いくばくの文字をかきつけたり。

- 第一齣 不禮講乃蠅螂舞
- 第二齣 妖靈法師乃天狗戲
- 第三齣 未來記乃戲讀副無骨有骨
- 第四齣 相模二郎乃初上京
- 第五齣 山法師乃權神輿

かくしるしつけたるは、猿樂田樂の番組なりとぞ、此餘一の謔は本座の阿古、亂拍子は新座の彦夜月、刀玉は道一など、名譽の田樂どもをあつめたれば、諸人これをみると、蟻蟻のごとくつどひ、蜂のごとくあつまる、またかたはらに一所の觀物場あり、蘆簾をもて四方をかこみ、青白間道的帷幕をひきめぐらし、外面にあやしげなる鳥の繪をかきたる、紙ばりの招牌をか、げ出しつ、一個の漢子手帕を把て頭を包了、かたはだぬぎて、左の手におほきなる蛇をつかみ、右の手に摺扇を把り、戸口のかき所に上り居て、ゆき、の人をさしまねきつ、聲たはやかによばはりていへらく、これ此まじるしを見給へ、這是過ぬる建武のころほひ、隱岐二郎廣有殿といへる武夫、内裏におきて射とめたる、怪鳥の雌にて侍り、頭は人のごとく、身は蛇形にして、背のまへ曲り、齒は鋸のごとく、兩の足に長き距ありて利きこと劍のごとし、鬪までのぶるときは長さ一丈六尺あり、一日に蛇數十をくらひ、聲いつまでくと鳴く、世に希有の鳥なり、未聞不見のものまたたぐひあらじ、家づとによき話柄ぞ、招牌につゆばかりもいつはりあらば錢とるまじ、見たらむのちにおこしねと、聲かる、ばかりの、しる、平右衛門此所をすぎて、百歩ばかり行けるに、こゝに又一箇の卦店あり、一個の卜者羅笠を戴き、道服を穿ち、手に相面的眼鏡を把り

て胡床のうへにをり、前に一脚の卓子をすゑて、上に算子のたぐひをならべ、うしろに一根の紙の標兒を挿し、これに四句の語をかきつけつ、

甘羅 發 早子 牙 遲、 彭祖 顔 回 壽 不 齊、
范丹 貧 窮 石 宗 富、 八字 生 來 各 有 時。

とぞかきつけたる、彼ト者ゆき、の人に示していへらく、此標上にかきつけたる四句の語は、乃是一生の禍福、吉凶は、時なり運なり、命なり、生を知り死をしり、因をしり道をしるとの意なり、身の上の善悪吉凶をとほとおもふ人あらば、且十餘錢をあたへてとひ給へと、ひたすらよばはりけり、また前面を見れば、人あまたおしこり物をかこみてたちたり、平右衛門諸人をおしひらき、まへにくぐり出てこれを見るに、一個の漢子、皂 服を穿ちくれなるの絨織のたすきひきゆひて、黄綾の褲子をまとひ、一口の大腰刀をおび、さもいかめしく打扮て、たかき床儿の上に居たり、うしろに藥厨をすゑおき、返魂丹、和中散とかきつけたる、金字の招牌をか、げたり、是乃花棒をつかひ撫長劍て、賣藥的なり、這漢子やがて床儿をふみならし、腰を把りて閃一閃し、呀と一聲よばはりけるが、忽かの大腰刀をぬき、颯々とふりまはし、上下左右にひらめかす、明晃々たることいなづまの光るに似たり、さて太刀を鞘にをさめ床儿を下り、一盤子に包藥を盛たるをもちて、四方八方に繞り、見物の諸人にむかひていへらく、小人はこのたび遠方より當所に来り、諸主顧をたのみて今日をいとむ的なり、小人が劍法原來未熟にして、人の目をおどろかすにたらざれども、只諸主顧をなぐさめんため、みだりにこれをつかひて尊覽にいれつるなり、そもそも我家にて製する返魂丹、和中散は、世にたくひなき良法なり、世間の艸藥と一列に看做給ふことな

かれ、ねがはくは諸主顧、たかく尊手をあげ給ひて數錢をなげ、此盤中の藥をもとめ給へと、搦舌水のながる、がごとくたかやかによばひて、三四へんめぐりければ、諸見物、おのゝ錢を出して藥をもとめ、日色西山にかたむくをみて、日もくれぬべしとて、風にあたれる木の葉のごとく、四方にみだれてぞたちさりける、寺岡は人なきを見て床儿のほとりに来るを、這賣藥漢子はやく見つけて、白眼しつ、招牌の背後にいたりて、何ごとにかあらん、兩人ひそかにさ、めきけるをりしも、彼ト者また弄蛇者もこゝに来りて、おのゝ頭をよせて密話しつ、路上の説話草裡有人といへり、此處密事を議するにあしかりなんと云ひて、つひに寺岡をひきてかしこへとていざなひ行きぬ、此三人はいかなるものぞとなれば、ト者に打扮たるは夜邪魔重太郎なり、蛇を把りたる漢子は千邪鬼彌五郎なり、賣藥的に打扮たるは萬夫不當の勇者雄鷲文太といふ的なり、此餘の義士們田樂どもに紛入り、もつばら仇家の動靜をさぐりけるとぞ、しかるに寺岡は三人にみちびかれて一つの街にいたりけるに、忽一陳の肉香芬々として鼻をおそふ、なほちかくす、みて見れば、此に一個の小酒店あり、平右衛門目をあげて見るに、高布帳を垂れなめに湘簾をくだして、簾には紙もてはれる方燈に丹青をほどこして、牡丹花と紅葉樹をゑがきてかけたり、這是野猪鹿兒の臚をひさぐ標兒なりとぞ、さて店の中央に土籠をまうけ、おほいなる匾鍋をすゑおきつ、彼肉香は此鍋のうちより起り出しなりけり、此店のあるじと見えたるわかき漢子、赤裸になりてあかじみたる犢鼻褌をむすび、臚下にありて、みづから酒器を懸居り、床の上には妻とおぼしき女、爐火に當て黙然として座し居たり、外には一箇の小厮も見えず、唯是夫婦兩口的と見えて、恰も相如文君が模様に似たれども、臨叩市中錢おくる人もなきにや、いとく艱難の光景なり、しかるに此店のあるじ、重太郎等四人が来るを見て、忙々

衣服を把て穿し、四人をひきて樓上のぼらしむ、さて烟茶の款待一回雑話をはりて、都て五人頭を交へ耳を接へて、や、ひさしう密事をぞ議しける、此店の主人は是竹森喜太八なり、さきつ年出雲より此地に來り、のちに妻をも此にうつして、夫妻もろともかやうに酒店をひらき、もつばら仇家の動靜をうか、ひ探らん事をはかる、都て大星が計策なりけり、かく密談のあひだ人もや來ると、老婆は店をまもり、心をくばりて居たる折しも、步卒やうの漢子來り床几に尻かけて、やよ好酒をいませともとむ、老婆こゝろえ侍りといひて、一壺の酒を盥め、野豬の肉に葱をそへて、羹にしたるを碟に盛拿來り、いざ酌給へといひてあたへければ、此漢子てづから酒を斟て飲み、羹をくらひつ、問話一回して、權たのしみて居たる、老婆またじりをひるがへして、暗に此步卒が模様を見るに、高家の號衣を穿て、腰に一ツの票をくりつけたれば、肚裡にいふかりとひていへらく、主顧の腰に帯給ひたる票は、何のためにかし給ふ、步卒こたへていへらく、これにこそおほく縁故あれ、頃日世上のうはさに、鹽治の家士等ひそかに影をあつめ、事を復讐に托して、我相公を打んとくはだつるよし、此ゆるに我相公緊門を牽給ひ、出入の諸人をおごそかに查させ給ひて、我等がごとき微職までも此票をたまふ、是すなはち門の出入何時にてもゆるさせ給ふしるしなりと、つぶさにかたりければ、老婆は簀子を把りてひたひがみ搔やりつ、打笑ていへらく、奴家も人のかたるを聞侍りしに、鹽治の家士們は、今落魄てこ、かしこに伶俚、なかには路上にたちて丐子するありとなん、彼們が微運をもつて、高運強威の權家を闖はんとはかるは、恰も水中の月を撈んとするがごとし、およばぬことにこそとて、ひたふるに冷咲ひければ、彼步卒もともに陪笑し、とまれかくまれよからぬ人ごとにこそといひて、つひに一壺の酒をのみつくし、ふたたび酒をこひければ、老婆

又一壺の酒を汲み、熱くあた、めてあたふ、彼步卒心よげに、蓋をかたむけて此酒を飲みけるに、忽と渾身麻木のけさまに倒れ、翻転して床几の下におちたり、是乃のちの酒に蒙汗藥を入れたるゆゑなり、老婆急樓上のぼりて、しかくのことありと告げければ、喜太八かしくもはからひたりといひて胡梯を下り、かの步卒を扛起して樓上のぼり、寺岡に對ひて如此く這般くはからふべしと低言ければ、寺岡意會了おのれが衣服をぬぎ、步卒が衣服を剝とりてこれを穿し、票をとりて腰にくりつけ、忙々胡梯を下りてはしり出で、たゞちに師直が館をのぞみてはせ去けり、さてかの衙門にいたりて後門よりすゝみいらんとしけるを、門者喝住ていへらく、爾は何殺才なればみだりに門内に入るや、寺岡打咲ひ、足下は何ゆる府中の人を錯認給ふぞといひて、かの票を出して見せければ、門者これをみてことなくとほしやりつ、寺岡心中によるこび、月明に乗じて第中をはせめぐり、外廳、牙房、使臣房、水間、下處、柴庫にいたるまで、のこりなく見まはりて、つひに又後門よりはせ出けるが、號衣をきて票をおびたれば、一人としてあやしむものもあらざりき、扱もとの酒店にかへり樓に上りて見れば、彼步卒はいまだ毒氣さめず、口中涎をながして臥居たり、寺岡は慌忙衣服と票をとりて、彼が身上にかへしければ、竹森これを扛起て樓を下り、依舊床几の上に臥おき、しかくせよと老婆に命じて、ふた、び樓に上る、老婆はこれをうけたまはり、解藥をとり來りて彼が口にそぎ入れ、さあらぬふりして爐火のほとりに座し居たり、停回て彼步卒毒氣醒て起上り、四邊を見まはし惘然として居たるが、忽掌を鼓ていへらく、奇なる哉妙なる哉、曾て此店の酒は出門倒とやらん號けて、名酒のほまれたかしと聞きつるが、しかいふもうべぞかし、我わづかに小半升を飲つるに、前後不覺に醉たるこそ奇特なれ、我ひさしく酒を好めども、

いまだかゝる氣力狼き美酒ある事をおぼえず、酔中大に趣ありといひて、ひたすら贅美し、價の錢をかぞふる折しも、三更の鐘聲耳にひびきければ、我をまつ人あるに、おぼえず時をうせしとひとりごちて、穿履不送、いそぎまどひて出行ぬ、老婆は這光景をみて、しのびずして嗟々然と笑ふ、樓上の四人も暗にうかゞひ見て、ひとしく一笑をもよほしけり、不在話下再説、加吉川本藏は、いぬる年鈴鹿山におきて、商賈的と賣白酒的に騙かれて、あまたの禮物をうばはれ、その刻破肚て死ぬべくおもひけるが、一事おもふむねありて、權一命をたもち、其所よりあとをくらうしてければ、桃井侯のうたがひ、いよ本藏が身におよびて、つひに禮物の正賊にきはまり、鎌倉にある妻戸難瀬、女兒小波をとらへて、數箇月獄につなぎ、しばぐ拷訊をなして、本藏が去向をとひ給ふ、されどもとよりちり計もしらざりければ、少も口詞不差によりて、方纔その罪を減じ給ひ、一日獄をひき出して母子ともに五十杖うちて、つひに鎌倉の境をおひ出し給ふ、此一ふしの事にあづかる人等、戸難瀬母子をあはれみて杖をかるくあたへたれば、幸に身上つ、がなく恰も網を漏れたる魚、籠を離れたる鳥のごとく、いそぎまどひてぞ立去ける、そもく這戸難瀬といふは、容貌の美麗なるのみにあらず、丈夫に劍法をまなびて能兩刀をつかふ、更に亦奇とすべきは、女にまれなる大力にて、委是女中の丈夫なり、このゆゑに人みな、かの梁山伯の女將、一丈青冠三娘が再生にやあらんなどいひあひけり、女兒小波は年方に十六歳なり、彼も亦生得て姿容うるはしく、意態やさしく、世にまれなる標致にぞありける、此兩人鎌倉をはなれて、權且しるべの方にありけるが、かくてはかひなし、京都に赴き丈夫のおとづれをもとむべしとおもひつきて、已に行装をと、のふ、乃頭に遮目笠をいたゞき、衣の上に浴衣を並折りて穿し、鞆脚布をまとい、草鞋

をはき、腰に兩口の刀をおびていでたつ、かやうに刀劍をおびて男子の模様に打扮し、ろいかなれば、此ころはひは、後醍醐天皇崩じ給ひ、楠正行亡びし後に、南朝の聖運や、かたむき、足利の武徳日々にさかんになりゆきて、權且世の中無爲に屬すといへども、新田の氏族、和田楠の一類、なほ許多のこりて城々に楯籠り、諸皇子威を囿ひて囿々に熱しおはしまし、只時の變あらんことをまつ時なれば、その慮にのりて四方に群賊おこり、や、もすれば、ゆき、の旅客を害して錢財をうばふ、このゆゑに戸難瀬、彼賊をふせがため、かくは扮ちけるとぞ、小波も賤女のすがたに難做てことまつたくと、のひければ、心ほそくも母子兩人、おもひよらざる客旅にぞ赴きける、かくて夜は雲霧を披ひて荒林宿、朝は曉月を帶て險道に登り、からうじてやうく駿河國にぞ到着ける、もとより此は山水秀麗の地にして、名におへる富士峯巖我と聳え、美穂松原蒼々とつらなりて、えもいはれざる好景なり、戸難瀬母子は、心にもあらぬ旅にてあれば、かゝる絶景にも眼とまらず、唯いたづらにすぎ行て、宇津山にさしか、りぬ、當時は己に十月のなかばなれば、ゆき、の旅客もまれくにて、夢にも人にあはず、只失群の孤雁ひとりみづから天に貼てとぶのみ、山々のけしき谷々のけはひまで、甚凄じき光景なり、さらでだに此あたりは、山路の險阻にて、旅客のゆきわづらふ所なるに、もとより小波は襲衣のおもきすら、身上にたへざる手弱女なれば、いかでか險路をゆくにしのぶべき、足たちまち破れ、鮮血淋漓とながれて、いまは一步だにうごかすことあたはず、かしこに跌きこ、に倒れてせんすべなげなり、原戸難瀬は女丈夫なれば、みづから志をはげまし、小波を扶掖してひたぶるに走りけるが、すゝるにさむき風襟袖にふきいれ、渾身寒栗子てしのびがたし、しかのみならず、しきりに餓にのぞみて、ほとんど十分の艱苦にぞせまりける、飯をもとむべき人家もなければ

ば、これをいかんせんと、たどるくまた一里ばかりゆきて、一ツの九折をすぎ、杖をとめて遠々地に望見れば、前面の疎林深處より、一道の煙たちのぼりたり、小波聰明的なればこれを見ていへらく、阿母あれ見給へ、那裡に煙のたちのぼれるは、かならず人家あるなるべし、戸難瀬いへらく、我もしかおもふなり、且かしこに去て人家を捜すべし、いざ来れと云て、小波を扶けはせ去て見るに、果して林のうちに一ツの家あり、壁の骨あらはれて、うちよろほひたる破敗屋なり、家のうしろには数十株の紅葉樹ありて今をもなかに葉を染たれば、赤條々として見るめもあやなり、前にはほそき流ありて一條の獨木橋をかけわたしたり、兩人此橋をこえて地上にちりぼひたる紅葉を踏みつ、門首にいたりて見れば、廳のほとりにやれたる蘆簾をなめにたれ、簾に一箇の方燈をかけ、糊たる紙にいくばくの文字をかきつけたり、

一椀登、單醪、下酒、餠飴、可漏子、

已上五種、各盡鮮極、精凡往來客官、宜賜顧、としるしつれたり、此方燈は乃是火を點すのみにあらず、白日も簾にかけおきて、往來の旅人にしめす標識なり、又一ツのさ、やかなる方燈には、駿河屋と云三ツの文字をふとくかきて、かたつかたの柱にかけたり、戸難瀬等母子かの招牌を見つけて大によろこび、たゞちに裏面に入て床几の上に尻かけ、包裹を解下しければ、腰かまひたる一個の婆々、籠の邊より抄手しつ、出来て、酒をまわらせんや、飯をまるらせんやと云、戸難瀬は酒はようなし、只飯をもとむ、とくもち来れと云、婆々、應待侍といひて、やがて一碗の飯と一碟の小菜を把て、ちりばみたる漆盤にする、もち来りて兩人が前に放在ぬ、兩人且これを喫てや、飯をのぞき、權疲倦をやすめて居たるをりしも、前面の竹林のうちに、鈴の聲命令とひびきけるが、一個の馬隸一匹の空馬をひき、したゝみたる

聲して、ほしいま、に山歌を唱ひて出来る、その曲兒に道、

夕陽輝坂下、鈴鹿難晴、

相挾土山雨、鶯駝其疾行。

扱此馬かひたゞちに此店に來り、馬をとりて門前の枯木につなぎ、婆娘しばらく門首をかし給へといひて、軒の下に座し、負喧しつ、衣の虱をひろひてぞ居たる、馬はしきりにみじろぎし、一二聲いばえてゆばりをたる、この臭氣鼻をおそひてたへがたかりしかば、戸難瀬はとく此を立出ばやと思ひ、婆々にとひていへらく、これより向に客舎をもとむべき所ありや、婆々こたへて曰く、此より五里あまり行けば、藤枝の宿といひて、客店ある所あり、かしこに行給へといひつ、老眼を擦摩で、まぶたたゆげに日色をあふぎみて、又曰く、今已に八ツの時すぎぬべければ、かならず路中にて日はくれぬべし、その心がまへしてゆき給へと云、かたはらより那馬かひ挿口道、さきほどより合愛を見申すに、足をそこね給ひていと難爲に見えたり、年もゆき給はざるに、いとほしきことにこそ、さらでだにかく日みじかき時節なるに、足よわをとまなひたゞしく去給はゞ、半途にてようせずば日晩れぬべし、我馬を史て合愛を乗せしめ給はずや、小生案内ならにおくりまゐらすべし、幸彼藤枝にかへる足なれば、脚價の多少はきらひ侍らすといふ、戸難瀬はいらへもせず、つくつく此馬かひが模様を見るに、一幅の手帕を把て頭を包了、身には縋縋を穿し、腰には草索をおびとせり、面は黒くして鍋底のごとく、眼は圓して銅鈴に似たり、更に鬘がちにて胸毛しげり、つぶくと肥たる漢子にぞ有ける、戸難瀬肚裡にはかりておもへらく、彼面に似ず、かく甘言美語をもちうるは、意下もつともいふかし、さりながら小波は一步もはこぶにたふべからず、

これはいかにせんと、ひたすら肚裡踏踏けるが、ふた、びおもへらく、這奴才たとひ互心あるとも、なでうことかあらん、おそろゝにたらずと心を決し、馬かひにむかひていへらく、爾いばかりの錢をもとめて馬をかすべきか、馬かひがいはい、今も申すがごとく、錢のすこしきをさらはざれば、兩串ばかりたまはらば、望外にすぎつべし、戸難瀬曰く、實にしかりや、さらば爾をやとふべし、かならずしもの中に過分の錢をもとむべからず、よくよくこゝろうべしと云ふ、馬かひは理會得といひつゝ、馬を把て床几の邊にひき来る、戸難瀬は飯の代をつぐのひ、小波を馬に上しめて、つひに此所を出ぬ、かくて二里ばかり行て四方をかへりみるに、日色漸々晩て、山影深沉、樹陰漸没、落日烟をおびて、碧霧を生じ、彩雲水に映きて、紅の光をちらし、雉鳴て雌をしたひ、鳥亂て宿をもとむ、只釣叟舟を移して去り、村童轎に跨りてかへるのみ、一個として旅人のゆくにあはず、戸難瀬はいとゞしく心火急ば、しきりに馬かひを催促して、やゝまた半里ばかり行きて此所を見るに、此あたり都て茫茫したる廣莫にて路なき所なり、扱日はまつたくれて東西をわきまへがたし、馬かひかねて心中にたくみたることにてあれば、俄に馬をとゞめ且小波をひきおろし、七十三八十四ねぢけたることを云て嚇し、便機に乗りて盤纏をうばひとらんとす、戸なせおもへらく、我猜にたがはず、果して這奴才賊をなす徒なり、遮莫おそろゝにたらずと聲を勵していへらく、爾我を女子と思ひ小颯て賊せんとするは、却是爾が運命のつたなき所なり、常言にも、風搖らざれば樹動かず、船揺かざれば水渾らすといふこと有り、脚價をとりて立去ば爾が幸なり、若悪心を起さば立地に一命をうしなふべし、但我本事をなすべきかと云て、腰刀の尻をさまにかへして、まくり手に柄をにぎり、這厮拵扎せば只一打とためらひけり、小波は母のうしろにたちかくれてうちわななき

て居たる、原來此馬かひは、此驛道にきこえたる悪根なればすこしもひるまず、呵々笑ていへらく、爾我を斬んやさは大に興あることなり、いざいざ斬れと云つゝ、おのれが身を把りて戸なせに擦來擦去、ますますねぢゆがみたることのみをいひて嚇しける折しも、里塚のうしろより、蓬頭垢面的むさげなる漢子等、四五人ばらばらと去り出て双方をなだむるさまになし、戸難瀬小なみをとらへて、ほととみだりがはしき事をなさんとす、此四五人の男どもは、都是伴馬隸なり、戸なせ今は怒をしのびず、就勢に兩人の馬かひを把りて地上に撲地投つけ、路のかたはらに生ひたる大柳樹の下に立寄りて、木のもとを緊と抱き、腰を把りて只一越ゆりければ、忽帯根拔起したりける、誠に希有の大力凡人の所爲にあらず、彼巴姫板額に比ぶるとも、をさくおとらざるべし、馬かひ等はこれを見て大におどろき、皂雕を見て紫燕のおそろゝ、がごとく、身をちりめてぞ逃去りける、戸なせは彼枯柳樹を目よりたかくさげ、彼等があどをおひ行さけるが、暗夜の黒地裏に見うしなひて、その去がたをしらざれば、只得牙を咬みて半途より立かへり、舊路に來りて見れば、彼前の賊馬かひ、枯草の叢中にまぎれ入りてあとにもどり、小波をとらへて右の脇にはさみ、左の手に馬をひきて、逃去くに恰好撞見たり、戸難瀬はこれ氣頭上なれば、いかでか憤をしのぶべき、やがて彼柳の樹を調轉して、馬かひが頭をのぞみ、腦漿も出よと勢に就て打ちければ、可憐此馬かひ、忽頭洞にめりこみて、斷線偶戲のごとく、揮軟となりて死にけり、戸なせ馬かひが屍を把りて糞窖のうちに擱いれ、小波を馬にうちのせてみづから口綱をひき、飛也似走去しが、がらうじてやうく一簇の人家ある所にゆきつきぬ、是乃藤枝の宿なり、戸なせ等母子此夜は且此所に客店をもとめて歇みけり、不題休絮繁、且説、戸難瀬等さまの艱難を忍び、ゆきく近江國大津の驛にいたり

ぬ、こ、は都ちかき所なれば、驛中の光景大に熱鬧なり、戸なせ母子此驛を過ぎけるに、此に一簇の人
十字街につどひ、榜を看てまち／＼評議して居たる、戸なせ諸人の鎖在叢裏て、ともに榜をよ
むにその文に道、

いぬる 某の年某の月某日、勢州鈴鹿山におきて山賊をかたらひ、慶賀の禮物をうばひ逃去たる犯
人、加古河本蔵を捕獲來的には、賞錢三百貫文を支給べし。

とぞかきつけたる、戸難瀬これをよみをはり、暗に嘆息しておもへらく、我丈夫平日忠をいただき義をおも
んじ、一點のあやまちなく、更に十八般の武藝を通曉して、またなき武夫なるに、はからずもかゝる無實の
罪に陥給ふこと、いかなるあしきすぐせなるや、主公より高祿を賜はり、珠服、王饌一點の不足なきに、
いかでかわづかの禮物をかすめんや、うたがひなく無實の罪を得給ふものならんといひて、只願涙にむせ
びけり、此折しもうしろに一個人ありて右の手を伸し、戸難瀬が肩牌を推していへらく、大膽の女何ゆるほ
しいまゝに榜文をよむや、我にしたがひ來れといひて、つひに兩人をひきて、いづこへかはせ行きける、畢
竟這人は是甚人ぞ且聽下回分解。

(後編卷之三)

忠臣水滸傳後編卷之三

第九回

本蔵短笛別鶴曲を吹く
力彌長鎗雪佛頌を得る

語説當時、戸難瀬母子をみてゆきたる人は、是甚人なるか、別人にあらず、乃是兼好法師なり、此人前
は武州金澤と云所に住みけるが、師直がために屢わづらはしき事ありしによりて、那地をしりぞき、今は
京都にありて洛東の吉田と云所に住みぬ、故に時人吉田の兼好と叫慣す、彼本蔵は曾て此人に和歌を學
び、師弟のよしみあるゆゑに、此人加古川が干隔湯となりたることを聞き、暗に嘆みて居たる折しも、思
ひがけず、此にて戸なせ母子に行あひたるによりて、乃ち那們をみて來り、權且菴中に隠匿おきけるとぞ、
戸なせ等は兼好に投托居て、毎日洛中を徘徊し、祇園、清水、知恩院など、諸人群衆の地にいたりて、もつ
ばら本蔵が消息をもとめけり、しかるに一日此邊の土兵等、大勢戸なせ等がおひ來りて、兩人をとり
かこみ、大に叫はりていへらく、正是爾は、藤枝の宿におきて、馬隸をころしたる女にまぎれなし、と
くとく手を束ねて絆をうけよといふ、戸なせ聞きておびれたるつらつきして、奴家は都一見の賤女なり、
女の身にていかで人をころし得べき、人たがへばし給ふなと云て、再三抵賴けれども、土兵等これを耳
にも入れず、七手八脚、長脚鑽、留客住、鉄扒等を打揮りて、からめとらんとりかこみぬれば、戸なせ今
は已ことを得ず、たゞちに兩口の腰刀を抜き、双の手にうちふりて、四面八方を斬回り、火花をちらして

聞ひけり、已にしてあまたの土兵等、或はひらき或はかこみ、いきほひ猛た、かふといへども、敵することあたはず、恰も嬋娟たる牡丹花の露をあらそひて、山蜂のむらがるごとくなり、しかるに一人の土兵一個空をうかゞひ、わな、きふしたる小波をとらへ、小脇にはさみて走行かんとする折しも、むかひの方より一個の少年的、一籠の菜菔根を挑ひ來り、此光景を見てやがて籠をうちすて、急々忙々扁擔を把りて、かの土兵が向脛をよこさまにはらひ、地上に打たふして小なみをたすけ、なほ土兵等の叢中にはしり入り、勢に就てうちたてければ、土兵等は戸なせひとす、敵しがたき所に、此者さへそひくははり、前後よりさしはさみて打たてられ、いかでかこれをこらゆべき、恰も風秋葉を吹敗り、雨春花を打散ふがごとく、皆ちり／＼に逃去りぬ、げにこ、ちよき光景なり、扱此少年的は、常に此村中を徘徊し、菜蔬を賣て過活とし、名を命松と叫做的にて、年わづかに十七歳になりぬ、されども力量人にすぐれ、才智他にこえたる的なれば、兼好常に此者をあはれみ、折々本錢を借して、賈をなさしめたるゆゑ、彼又その恩をわすれず、もし兼好がためにもちゐらるゝ事あれば、力を盡してつかへけるが、已に此日も戸なせ等を、兼好が所縁の者と知りて、かく危急をすくひけるとぞ、已にして戸なせ等、命松がたすけによりて、難儀をまぬかれ、あつくその恩を謝し、乃ち三人つれ立て、兼好が菴にかへり、しかゞの事ありきと説ければ、兼好聞きて二人のつゝ、がなきをよろこび、さて命松に對ひていへらく、爾土大根をうるるとおもひがけず婦人等の難儀をすくひたるは、正是土大根の精兩箇の精兵に化して、筑紫の押領使をすくひたる説話に一般、我儂をいつくしみて、信ある時は徳あるの道理を知れり、欽喜／＼といひて、ひたふるに讚美ければ、戸なせ母子は更に感謝にたへざりけり、しかるにはや黄昏のころほひにいたり、命松は別を告

てまかりぬ、かくて戸なせ兼好に告ていへらく、起先奴家おほく土兵等をくるしめられたれば、彼等ふた、び分をくはへ來りて、此菴をおそひ、到底は師父に連累をおよぼさん事必定なり、これによりて奴家心安からざれば、今宵のうちひそかにおちゆかばやおもひ侍り、兼好がいへらく、我連累にあふ事はつゆばかりもいとほざれど、おん身等此菴中にありて、もし土兵等に捉へられなば、ゆゝしき大事なり、他所に去るもよかるべし、さもあれおん身等の避ゆかんとおもふ地方はいづくぞや、戸なせいへらく、曾て風聞にも聞給ひつらん、鹽治侯の家士に大星由良といふ的あり、今は白身人となり當國に身をのがれて、某郷にかくれ住むよし聞きおよび、兼て彼が兒子力彌と云ふものと、小女小なみと、赤繩の約をむすび、大星とは已に縁者のよしみあり、幸此より路のほどもちかければ、彼がかくれ家をたづねて、大星をよすがとし、一來是丈夫の去向をもとめ、二來是親事をと、のへて、小女が指望をもとげしめんと要侍り、兼好がいへらく、大星が大名を聞くこと年ありて、恰も雷の耳にとゞろくがごとし、這人當世の豪傑なるよし、我常に渴想するといへども、縁なくしていまだ相見えず、彼人をたのまんときはめて良計なり、ともかくにも心をながうして、異日ふた、び天日の面を見る時を俟べしと云て、言に實情をあらはしければ、戸なせ母子口をひとしうし、師父の洪恩心に銘じ骨に鏤りて、身ををはるまでわすれ申すまじといひて、涙ながらに包装など收拾て、何くれと時をうつすほど、おぼえず五更のころほひになりぬ、とく別を告げてまかりなんとし、窓を開きてみれば、いつのまにか雪ふりて、満地玉をしけるがごとし、兩人蓑笠をかりて身におほひ、いとけしう下衆のさまに扮ちて、つひにまかり出でぬ、しかるに起先より門外の樗樹のこすゑに、一箇の土兵上り居て、裏面的動靜をうかゞひけるが、兩人のおちゆくを見て、班輩のものに號をしらせん

とやおもひけん、跳下りけるを、兼好目ばやく見つけ、急に這をとらへて地上に挽翻し、かたつかたに鼎のなりしたる水盤のあるを把りて、頭にうちきせ、緊くおさへければ、かの土兵只手脚を抖し眼眩て、拵扎ことあたはず、恰度彼仁和寺の法師にことならず、戸なせ已に十歩ばかりあゆみ出けるが、此物おとを聞き立て立もどり、這光景を見て躊躇ければ、兼好目をもつてをしへ、おん身等は此に管ことなかれ、とくとく去べしといへば、戸なせ等は只多謝くといひすて、いそぎまどひてぞ走去りける、不在話下、再説、大星由良は、日夜復讐の計策に心をくわしめけるが、此年亡父七回の忌にあたりぬ、原来大星が父は八幡六郎といひて、前年故延尉のために、陰山の宿と云地方におきて、陣歿したる忠臣なり、その刻屍をその地に葬りて墳を創たり、彼陰山の宿と云は、京都より三日路ばかりへだちたる地方とぞ、大星亡父の追薦をいとむとて、兒子力彌を領て彼陰山の宿にいたり、父の墳に上り、香花燈燭をそなへて弔祭し、事はて、踏路におもむき、山路の險阻をせかへりけるが、當時は正是嚴冬の時節にて、折しも、形雲密布、朔風漸起、紛々揚々として、一天に大雪ふり來り、世界都て銀をしきたるがごとし、賊是王猷が職を訪時、袁安が高臥日、斯こそあらめとおもはる、正是、

近江 難見 鷲 遠樹 易分 鴉

扱此邊はいぬる元弘播磨の際、兵火のためにやかれたる跡なれば、村野の百性盡く離散して、一路の煙なく、行人もまれくなり、故 此日已にくれけれども、大星父子やどりをもとむべき人家だになく、大にゆきわづらひて、只頸を締め身を抖しつ、からうじてやうく、三里ばかりぞ走去きける、此時はや三更のころほひなり、さらでだに行きがたき、山路の險阻なるに、北風はげしく雪をそばせて、ふかく徑

路をうづめたれば、四方白漫漫地して東面をわきまへがたく、つひに踏をふみあやまりて、山ふかくまよひ入り、火把さへ雪水にけされたれば、只雪あかりをよすがとして、ひたぶるに走けるが、寒氣ますますきびしく、骨を透し、吹雪におもてをうたれ、雪巻風のために吹たふさるゝことあまたたびにして、一步だにうごかすことあたはず、ほとんど進退をうしなひ、十二分の艱苦にぞせまりける、かくて兩入渾身大につかれ、惘然と站て前面をのぞみ見るに、那里に一所の辻堂ありて、ふかく雪中にうづもれたり、大星いへらく、此大雪にては夜どほしに行て家にかへらん事、とてもかなふまじければ、枉て彼辻堂に一夜をあかすべし、いざ來れといひて、兩人いそぎ辻堂にいたり、たゞちに内に入て見るに、是一ツの舊堂にて、堂上に石佛の寶手地蔵を安じたり、なほ好々四邊をかへりみるに、梁の上には烏鵲巢をいとなく、床の下には蜘蛛網をむすび、木の葉塵にまじはりて、孤兔の跡を印し、いと凄涼光景なり、兩人且蓑笠をぬぎ、身上の雪を抖淨めて床の上ののぼり、佛を頂禮してはて、力彌うちより戸を開ち、傍邊に一塊の大石ありけるを擬將、巨尻に靠下て櫃ねふらんとしけるに、朔風壁の縫間より吹入りて、寒氣はげしく、恰も劍もて肉を割がごとくなれば、すこしも晴あはず、父子兩個只いたづらにおもてを對し、ものいはずして居けるが、氣力つかれたるにや、漸々にねぶりを生じ、おぼえず一時ばかり熟睡したり、しかるに雪類の聲耳にひびきて、大星偶ねぶりをさまし、頭を擡て見るに、恠哉、白直垂を穿ちたる一位の官人、忽然として枕上にたちたり、看一看に、這官人は乃是、延尉にぞおはしける、大星大におどろき、急に恭々敬々跪きていへらく、故君今此にあらはれ給ふは、禦敵師直を亡すこと、延推せるゆるならん、小臣晝夜これのみ念慮にかけて、寢食をわするゝといへども、いまだ時いたらず遅延におよび侍りぬ、伏望

は相公罪をゆるし給へと云、延尉のたまはく、我今此に來れるは、爾等に危急の災あることをつけんためなり、とくく此を逃去れ、もし猶豫せば、忽一命をうしなふべし、必しも疑惑することなかれと告給ひ、朦朧として霧のごとく化失給ふ、大星大に哭き、今一遭かたちをあらはし給ひて、小臣が想を省しめ給へといひつ、後をしたひ走出んとしたる時、颯然として驚醒めぬ、是乃南柯の一夢なり、力彌は父がものにおそはる、聲をきつて、ともにねぶりをさましければ、大星如此くの夢を見たりと説り、いそぎ此所をはしりさらんといふ、力彌きつて、やがて彼石を把りて撥開、戸をひきあけんとするに、きびしくこほりつきたるにや、とかくすれどもあかず、希有の寒氣哉とつぶやきて、只得うしろの壁をうちくづし出んとするに、いつのほど何者の所爲にか、堂のめぐりにあまたの太木を蹴りて、きびしく鎖おきぬ、戸のあかざりしは此ゆゑなりけり、力彌大に氣を焦燥、力をきはめて就勢太木をおしたふし、やうやう鎖出けるが、此邊を見るに、雪中にあまたの人の踪を印たり、兩人これを見て、いかにも怪きことなりとおもひ、慌々忙々足をそらにはしる、かくてこ、かしこ路をもとめて、わづか十町ばかり行ける所に、俄に必々剝々地ひびく聲ありて、漸々にたかく聞えければ、兩人これを聞きて大におやしき、かしらをかへして舊路をのぞみ見るに、彼辻堂とおぼしき所に火おこり、煙さかんにのぼりて四方をてらし、刮雑々と焚えければ、大星且おどろき且いふかりておもへらく、彼火おこりたるはかならず舊途の辻堂ならん、彼堂中一點の火の氣なかりけるに、こはいぶかしき事ならずや、おそらくは賊の所爲にて、我輩をどろかせ、その空に飛じて財をうばはんと計りたるならん、何にまれ、故君夢中に此災あることを告給はすんば、我等父子非命に死すべき、危哉、舊君泉下にありても、我輩をあらはれ給ふこと如此

かし、正思むくいがたしと云て、兩人再び拜しをばり、又はしること二里ばかりにして、四方をかへり見けるに、遠々地林深處より、一道の灯の光隠々閃見えければ、兩人もし人家やあると思ひ、たゞちに林のうちに走いたりて見るに、果して一軒の草屋ありて、家のうちに暗々と、話響もれきこえけるゆゑ、且壁のくづれよりさしのぞきて見るに、八九箇の漢子ありて、爐火をとりかこみ、向火て酒を飲居たり、首席に座したる漢子を見るに、正是這漢子は、野坂内なり、大星父子且おどろき且あやしき、なほうかゞひて居けるに、そのうちに一人の大男がいへらく、我輩相公の命をうけ給り、大星父子が來れるみちすがら、前にうかゞひ後につきて、雪夜に乘じ途中におきて打とらんと計りけれども、大星火子はもとより武藝の達人なれば、容易に手を下しがたく、ためらひつる折しも、兩人辻堂に宿しけるゆゑ、こは彼等が運の盡ぬる期なりとおもひ、我輩數人一齊あつまりて、おほく大木大石を把り、堂のめぐりに蹴りてきびしく鎖住、燒草に火薬をそぎ、火をつゝみて床の下にさし入れおきたれば、やがて火おこりぬ、されば彼等はいかにはたらくとも、只七頭八倒するのみにて、脱出ることあたふまじ、必定這暗は父子ともに一塊の灰となりつらん、相公且放心下て一杯をくみ給へといふ、伴内いへらく、彼等父子だにうしなへば、草を斬て根を除きたるがごとく、このころ輩はおのづから志をうしなふべし、我鎌倉にかへりなば、執事相公に爾等が功勞を申覆ておほく賞錢をあたふべし、這是當坐の勞資なりとて、身邊をさぐりて金子をとり出し、此者どもにわかちあたへけるが、なほ衆人に對ひ、汝等夜のあけぬまに彼所の火をしめし、兩人の焼骨をひろひとりて土中にうづめ、踪跡なくすべしと云を聞き、みなく口をひとしうし、こゝろえ侍りと答へて、また酒を喫てぞ居たる、此者どもは都是此邊の無頼凶人にて、此家は彼等がすみ家なりと

ぞ、しかるに力彌は彼話をき、て、忽一發の怒心上より起り、家内にとび入て、伴内等數人をうち殺さんと、已に身ををどらせけるを、大星はやく欄住めていへらく、此所におきて彼等をころさば、かへりて密事の綻となるべし、彼等をころして何の益かある、とくく立去るべしといひて、こぶしをにぎりて力彌が手をとりて、しひてひきつれ出ければ、力彌はあとをかへりみつ、牙を咬みてぞはせ行さける、扱兩人夜どほしにはしり、次の日にいたりてやうく家にかへりつきぬ、且説、戸難瀬小波等は、兼好が菴を立出で、雪中をはしり、碎瓊亂玉を踏み、からうじてやうく大星が寓居に着到けり、小波は此ぞ力彌が家裡なりとき、て、黄鶯はじめて谷口を出て、梅花樹上に尋到たるに一般、半喜半羞、ひたすらおもてをくれなるにして、いとわらはげて見えたり、かくて兩人たぐちに門首にいたり、相煩と案内しけるに、うちより一個の養飯使女出で、あないし給へるは何人にておはしますぞといふ、戸なせいへらく、這裡は由良公の府上なり麼、しからは加古川本蔵的の老婆戸難瀬といふ的、遠々地たづねまゐりつるよしをきこえつきたまはれといへば、彼女こゝろえ侍りこなたへいらせ給へといひて、おくのかたへはしり入り、しかくときこえつぎければ、やがて由良が妻阿石、おもひがけざるおもちしつ、出で、席をはらひ、兩人をむかへ入れて、座已にさだまりぬ、扱互に初來相見の禮をのべ、一回の間話をはりければ、戸なせ端々正々していへらく、奴家母子今日しも府上にまゐりたるは、他の事にあらず、前年令郎力彌兄と、小女小波と、許嫁しつるのち、鹽治相公はからざる横禍にかゝり給ひ、由良公の在所さだかならざるがゆゑに、おのづから音信もおこたり侍りぬ、こはゆるしまたひねかし、扱見給ふがごと、小女はや身材たかう生ひたちて、標梅之期におよびたれば、とく親事をとくのへて、おや子放心下たく要ひ、かくおしてま

ありつるなり、けふしも幸黄道吉日とか好日なれば、由良公と議し給ひ、その準備し給ひてよ、是非に煩申すなりといふ、小波は母のうしろにありて、只はちらひてうつぶさめたり、阿石聞きて、こはおもひがけざることを、心得もなきにおしてかく物し給ふは卒爾なり、折から拙夫由良外に出でいまだきたらず、たとひ拙夫家にとありとも、此親事は承引申すまじといふ、戸なせがいへらく、前年已に言をかためて、かたみに許嫁したるを、今にいたりなどてしかの給ふぞ、阿石がいへらく、そのゆる申すべし、おん身の丈夫本蔵は、今已に干隔湯となり、去向をしらすとなく、おん身等おや子は既に是住むべき家なく、たのむべき父も夫もなき身にて、路頭にまよふ丐子のたぐひなり、何爲さる人の女兒を娶りて、ながく家名をけがさんや、これぞうけひきがたき縁故なるといとにくげにいふ、戸なせは原火性的女子にてあれば、これを聞きて、忽面皮紫色してけしきはりけるが、暗に怒をしのびていへらく、拙夫本蔵はからずも禍を得て、權干隔湯となりつれども、我等母子豈丐食をすべけんや、さまで辱め給ふは、娶のことを變じ給はんとして事を托し給ふならん、遮莫武夫同士言かため誓ひつるを、今にいたりいかでか變ずべき理あらん、夫人よも木石にてはあらじ、いきとしいけるもの憐の心なからんや、此うへはたとひ道理にあたらずとも、枉てうけひきてたまはれ、幾度も煩申すなりと、平日のまけじ魂も、子をおもふ心の切なるによりて、いきどほりをしのび言を盡してぞたのみける、阿石は只別了臉、しばらく答もせで居けるが、俄につとたちて、あなかしましのことや、何にまれうけひくまじ、とくく女兒を伴ひてかへり給ひねと、ことばすげなういひすて、はしりておくの間にぞ入りける、戸なせあとを見おくりて、且怒り且悲み、切齒咬牙けるが、やがて腰刀を把りて扱はなち、已に自害せんと見えけるを、小波あわておどろきて、母親は何ぞ

とかし給ふぞといひつゝ、慌々忙々て欄住ければ、戸なせ燧燧のごとき吐息していへらく、丈夫不幸にして無實の罪に陥給ひ、たちよるかげとたのみつる、大星夫妻には見はなされ、親事はと、のはで、かへりて巧子よなんど辱められしくちをさしよ、生きて耻をさらさんより、寧ろ索爽に死んには不如、阿兒はあとにとまりて、老公の去向をたづね、我にかはりてつかへよかし、自己此にて自害せば、義をしらぬ彼等夫妻も、すこしは心をひるがへし、親事をうけひかんもしるべからず、そもいかなる宿世のむくいにて、かく薄命には生れしことぞといひて、手をとり聲をはなちて泣きける、小波もともに泣入りて、しばし正氣なかりけるが、や、涙をおさへていへらく、こは母親のおほせともおぼえ侍らす、子の身としておやをさきたて、なごていきながらふべき、奴家丈人丈母の心になはねばこそ、かくはにくまれ侍りつれ、父母を辱むるは到底奴家の罪ぞかし、平常父親の教をきつるに、一女兩家の茶を吃せずとやらん、たとひ親事はとげすとも、一たび丈夫とさだめつれば、此家をいでてかへるべきにあらず、夫の家に死するは原是本意とする所なれば、こゝろよく眼目べし、萬望は母親みづから下手で、奴家を殺してたび給へと、一味に列女の道を守る、意下やさしくもなほあはれなり、戸なせは女丈夫にて心はげしき女なれども、悲嘆にせまりて氣力よわり、唯是存意にくれけるが、や、志を勵し涙をのこひていへらく、女兒のことは有理く、年ゆかねどもさすが武夫の女兒なり、かしこくもいひつるものかな、備ひとり殺さじ、母も共にむなしくなり、泉下までおや子苦樂をともにすべし、果有這心腹、いざくといひて、明晃々たる刀を把り、小なみが背後に立まはる折しも、門外に一個の梵論ありて、尺八の笛を大聲に吹あげたり、那梵論の打扮を見るに、羅笠をいたゞき、袈裟を穿ち、行纏をまとひ、草鞋を穿き、背上に包裹をおひ、手に

竹笛を把りぬ、都是在客旅化齋の模様なり、戸なせ權手をとめていへらく、女兒那笛の聲をきつるか、那是御鳥養子之調なり、禽鳥すら子をおもふ、しかるをいはんや人として、いかでか子を殺すにしのぶべき、我輩いかなる宿世にてかゝるうきめにあふにかと、かぎりなきくりこといひつゞけつゝ、ふしまろびてぞ泣きける、正是、

脱 劍 頻 催 不 忍 情、
誰 吹 長 笛 一 暗 飛 聲、
隔 門 一 曲 傾 頭 聽、
夜 鶴 籠 中 憶 子 鳴。

戸なせいかほどかなしみて、はてしなきことにてあれば、や、手抖脚軟をこらへて、よろめきつゝ、後にたてば、小なみわるびたるけしきも見せず、掌を合せて佛名をととなふ、戸なせが把りたる一刃、險些見、小なみが頭上をのぞんで、呀といひさまふりあぐる、時に紙門の裡に聲ありて、たかやかに要歌とよぶ、戸なせこれをききて、權刀の手をとめてけるに、那門外の笛もともに吹やみぬ、戸なせいへらく、今要歌とよびたるは彼笛のことならんに、我おぼえず心漫了といひて、ふたゞび刀をふりあげれば、又笛も吹出したるに、なほ要歌とよびぬ、戸なせいへらく、又要歌とよびたるは這刀の手裡か、那笛の手裡か、いづれに對してのことぞ、内よりいらへていへらく、夫人手をうごかし給ふ事要歌なり、做親をうけひき申すべしと云て、紙門をひらき、昇平曲を唱つゝ、白木臺盤を把りて恭々敬々拿いでたり、是乃阿石なり、さていへらく、おやの身として子をころさんと、さばかりおもひつめ給ふ、心ざしのいとほしく、承引がたき親事を枉てと、のへまめらするなり、さはいへ世の常ならぬ聘禮なくてはかなふまじ、その準備ありやといふ、戸なせ聞きて、且一二分の放心下刀を把りて鞘に收めていへらく、此兩鞘の腰刀は祖上よ

り傳到たる拙夫の寶刀にて侍り、いざこれを引べきに、うけをさめ給ひなんや、阿石いへらく、奴家のぞむ聘禮はそれ等の物にあらず、此臺盤におんみの丈夫本藏公の首級を盛てたまはり候へ、戸なせおどろきていへらく、こはいふかしきおほせなり、何ゆゑにかしかのたまふぞ、阿石いへらく、本藏殿はさきつとし鈴鹿山におきて山賊をかたらひ、禮物をうばひ逃去たる賊魁にあらずや、古の語とて聞きつ、渴すれども盜泉の水を飲ず、熱すれども惡木の陰に息すといふことありとなん、おなじかざしの名をけがさんこと、豈これを忌ざらんや、さる徒の女兒を娶りて、義を守る大星が兒の妻とせんは、千びきの磐石と葫蘆をかけて、いづれかおもきとはからんがごとし、倘若おん身おや子、本藏殿の汚名をす、がんとおもはば、自害をす、め首級を把ておくり給へ、しからは做親を遂げしむべし、いかに首級をおくり給はんや、親事を歇給はんや、いでく回答きかんと云て、いたくせめける詞ことわりにあたりたれば、母子兩人只胸つぶれて、叫苦一聲に頭を低れ、聲をせずしてぞ居たる、此時しも門口より本藏の首級晋呈すべし、いざ接候へとたかやかに叫て、彼の門外の梵論、編笠を脱てうちに入るを見れば、是乃加古川なり、戸なせ母子大におどろき、呀、老爺、いかなればかゝる扮してこゝには來り給へる、加古川喝て云く、あなかしがまし織細のことは次に説るべし、阿石娘つゝがなくおはしつるか、小人門外にありて首尾つばらにきとりつ、夫人のぞみ給ふ聘禮まゐらすべしと云つ、背上におひたる包裹をとりて、彼臺上に放在、阿石あやしとおもひつゝ、さしよりてつゝみをひらき見るに、一ひらの小旗をとりて、一ツの首級をつゝみおさぬ、旗の上には文字をかきつけたり、

進御 足利 將軍 慶賀 禮物

と云十字なり、お石ますくあやしみ、彼首級を把りて、看一看、是乃鉄の真九郎が首級なり、時に本藏かたりていへらく、小人前年鈴鹿山におきて賊の爲に驅れ、慶賀の禮物をうば、れてせんすべく、肚を破りて死んとおもひつるが、權一命をたもち賊をとらへて罪を贖んにしかじと翻思し、かく梵論に假折し名も白梵字と更へ、ひたすら賊の在處を探りありくに、ゆくりなく攝州なる宿川原と云地方の、九品念佛の道場におきて、いろをし坊と云梵論に出あひぬ、那斯あやしき模様なれば、暗に探りこゝろみたるに、那是鉄真九郎諱名を殺人鉄九郎とよびて、松尾山の石窟にかくれすむ山賊の頭領なるよし、禮物の賊もかならず道断ならんと思ひ、からめとりて官府にゐて行き、つばらに首告たれば、速に獄につながれていなく拷問せられけるに、果して鈴鹿山の賊情つぶさに供招におよびぬ、これによりて彼つひに頭を刎られ、已に鼻示せらるべかりしが、彼は原來鹽治侯の家士なりと聞き、一來故廷尉の面をけがさんもかたはらいたく、二來鎌倉にもちかへりて主君の尊覽にいれ、我罪を贖聞えんと、官府にねがひて、此首級を乞うけ、いま歸國にのぞみつるが、大星兄の安否おぼつかなく心にかゝり、みちゆきふりに府上を訪ひつるに、はからずも妻子前に來りて此にあり、こはかならず縁故あらんとおもひ、門外にたちて動靜をうかがへるに、果して事ありて、做親の儀をあらそふ、轉換世上之變、只不改是父母之心なり、萬望は夫人、彼等が心中をさつし給ひて、指望をとげさせたまはれと、一五十一つばらに説ければ、阿石をはじめ、戸なせ母子も、はじめてその來歴をさとしけり、此時已に大星は力彌を領て雪中をはせかへり、門外にためらひて居けるが、本藏が説話を聞をはりて内に入り、且禮をおこなひていへらく、本藏兄分手以來健におはしけるか、原來足下は世にまたなき豪傑なるを、いかでか不義の志あらん、無實の罪を得られしと

は、老早より猜いたせしなり、さはあれど合愛を娶てまのあたり、新奈となさんをおはれみ、かねて拙妻と議し、事に托してこれをいなび申せしなり、足下の意下を見ぬきたれば、大事をつ、まず説申さん、抑我輩復讐のくはだてありて、已に今事なばと、のひたり、本意とげてのちは、父子ともにならず死すべき覺悟なれば、たとひ合愛をめとるとも併老のえにしならず、唯是これをかなしみて然ははからひつるなり、さもあれしひてのぞみ給ふならば、いかでかいなみ申さん、心やすかれといふ、阿石その尾につきていへらく、拙夫の説申すがごとくおもふむねあればこそ、心にもあらぬなきことは申したれ、ひとへに無禮の罪を恕し給へと、夫妻ともにならなき心をのべければ、本藏等三人且十分に放心下ぬ、さて大星貞九郎が首級にむかひていへらく、這厮父九大夫に擯斥せられてのち、賊をなすと云風聲を聞きしが、果してしかり、誠是人面獸心の徒なり、本藏兄此賊首級吉席のけがれなり、とく收拾給へ、阿石は銚子瓦蓋など把來れ、力彌は衣服をあらためよといひて、權且做親の儀式をばと、のへける、本藏等親子のよろこびいへばさらなり、かくて事をはり、本藏偶後園を見るに、郷の童等がつくりたる一塊の雪佛あり、大星にむかひこれを指して云く、執事師直賄賂をむさぼり騙密に長じ、美々しく居館をいとなむといへども、たとへば金銀珠玉をかざり、殿宇を創て、彼雪佛を安置したるがごとし、豈長久をたもたんや、義氣さかんなる足下等の陽氣に値ば、立地に水と化してきえうせなん、彼が亡命ちかきにあるといふ、力彌きつてすゝみ出で、權も師直にたとへたる雪佛、見るにしのびがたし、いで一鎗あたへて、好前兆をあらはさんといひて、やがて褲子のはしをりて高く帯にかいばさみ、鎗架の鎗を拿りて庭上にとび下り、只一擲に彼雪佛をつきくづしければ、雪は四方にとびちりて、うちより一ツの文匣出たり、力彌いぶかり是をとりて父にあたふ、大星とりてひらき見るに、うちに一封の書あり、封皮に引路之圖と云ふ文字をかきたり、緘をたちて看一看、是乃師直が衛門裏引路之圖本なり、衛門中の光景のこる所なくこまやかにかきつけたり、又おくのかたに、國字をもてかきたる文あり、

家のつくりやうは夏をむねとすべし、冬はいかなる所にもすまる、暑きころわろき住居はたへがたきことなり、ふかき水はすゝしげなし、あさくてながれたるはるかにすゝし、こまかなる物を見るに、や戸は葺の間よりもあかし、天井のたかきは冬さむく灯くらし、造作は用なき所をつくりたる見てもおもしろく萬の用にもたちてよしとぞ人のさだめあひ侍りし。

とかきつけたりたり、大星好々見をばりて頂戴、大によるこびていへらく、前に寺岡平右衛門鎌倉に下り、敵地の光景をうかゞひて告知らせけるゆゑ、大抵これをさとすといへども、いまだ詳ならず、日夜此事のみうれひたるに、おもひがけず此圖本を得たること、大なる幸なり、さもあれ何人の厚情によりて、此雪中にうづめおきけるやと、ひたすらあやしむ、本藏かたはらよりうかゞひ見て云く、正是此書は兼好法師の字跡なり、曾て小人彼人に和歌を學びて舊交の情ふかし、彼人前年武州金澤にすみたる刻、師直かれに托して居館の繪圖をか、しめたりとき、ぬ、おそらくは此圖本、その時の草稿ならん、小人法師の主意をはかるに、説苑にいはゆる、天地親なし常に善人に與すといへる意にて、足下にこれをめぐみたるならん、さはいへいつのほど何人をして、此雪佛のうちにはうづめおかしめけん、いぶかしくと云ふ、大星きつて、小人兼好師父の大名をき、たること年あり、今已に同國に住むといへども、縁なくしていまだまみえざるに、かやうの厚志にあづかること感佩にたへず、正是我爲には、孫吳の書三畧六韜にもは

るかに喪たりと云て、ます／＼よろこびけり、却此文匣はいつのほどたれをして、那里にうづめおきたるなれば、兼好昨夜なせ母子にわかれてのち、倘若彼等路中におきて、又土兵等がめにかゝり、落難せんことをおそれ、暗に彼命松にいひつけて、見えがくれにしたがはせけるが、その時彼文匣を把りて命松にあたへ、しか／＼せよといひつけけるほどに、命松うけたまはりて、戸なせ等が跟に随來り、此に到着たるを見とゞけてかへりゆく時、彼文匣を暗に雪佛のうちにうづめおきけるとなん、都是兼好が厚志なりけり、扱戸なせは鎌倉にて獄につなされ、彼地をおひはなたれしことをはじめとして、道中におきて馬隸をころしたること、および兼好が菴に隠匿て、命松が好意にあづかりしこと、昨夜彼菴をはなれてこゝに來りしことまでの首尾をつばらに説りければ、大星父子も昨夜危急の難をのがれたることを説りて、一齊に恙なき出會をよろこびけり、本藏いへらく、大星兄の忠義感するにあまり有り、當初唐山の伍子胥、吳王を諫勸て死したるは、いまだ忠義と稱するにたらず、昔者豫讓、今也大星、併て倭漢たゞ、兩箇の名士なり、やよ小波、かゝる忠義の大星兄を丈夫となし、兒の力彌を丈夫とするは、皇妃となるにもまさりたるぞ、嗚呼臣たるもの、鋭なる哉といひて、ひたすら稱讃しけり、後人つらねたる詩あり、説得て好、

懷君 執節 辱其躬、
還薄子 胥強 諫功、
殊賞 大星 兼豫讓、
兩臣 相列 鑑誠 忠。

却大星本藏にむかひていへらく、加古川兄那雪中の竹を見給へ、雪は和訓す、ぐと云文字なり、竹のすぐなる生れは、恰足下の性質に似たり、權雪におほはれて身を屈め給ふといへども、今已に昔日の耻をそゞぎ給へり、雪をはらへばかの竹もおもてをおこす時いたれり、恭喜々々といふ、本藏ます／＼よろこびていへ

らく、小女が親事とのひ、一世の指至今日一度にとげ、百慮米のごとく息みぬ、さはいへ足下の密事をきゝて、まうさじといふ誓には、小女の小さなみ、おもては新婦、うち／＼のころには質子ともおぼされてひとへにあはれみ給るべし、大星いへらく、新婦のことはいさ、かも怠慢すべからざれば、只心安くおぼされよ、本藏いへらく、多謝々々、足下の厚情いづれの日かむくい申すべき、歸國にのぞみて心火急れば、もはや告別申すなりといひて、戸なせもろとも立出んとす、小なみはさらなり、大星親子唯是わからしむのびす、涙をおさへて門おくりす、本藏は只依々戀々として出行きぬ、此後いかなることかある、且聽下回分解。

(後編卷之三畢)

忠臣水滸傳後編 卷之四

第十回

島寺袖義士を眷戀す
天川屋屠兒を拳打す

話説鹽治の家士に、山背助宗村と做叫のありしが、原來大力にして酒をこのみ、二分の酒を吃とせんば則一分の本事あり、十分の酒を吃とせんば則十分の氣力あり、弓馬鎗棒はさらなり、十八般の武藝盡く通曉し、忠義をたふとみ名利をいやしめ、柔をたすけ剛をくじく豪傑にして、人の危難を見てはかならずしくはすとふことなし、しかるにすぎつる建武の年間、故延尉高貞公在世の刻、かの宗村年二十一二歳の時にてありしが、主君の命により事を管て大和國にいたり、旅店に數日をすこす、一日閑に乗じ獨歩してこゝかしこにいたり、山水を遊覽して一ツの街にいたりけるに、這處は是當國の要路なれば、人烟輻集、語和喧闐、士女老少道につらなりて、東にさり西にいたり、細々絡繹としてゆき、しばらくもたえず、げに行川のながるゝに似たり、宗村なほ此邊を繞て見るに、こゝに一座の拘欄あり、看的人さそひあつまり、いとにぎはしかりければ、宗村これを見して解悶せばやとおもひ、たゞちに拘欄のうちにていたりて看るに、一個の舞妓臺の上にあり、いまだ舞をはじめずといへども、看的人臺の四方にあつまり、群をなし隊を拽てのぞみ見る、宗村諸人の叢裏に鑽入り、前にすゝみ出てこまやかに見るに、かの白びやうし、年紀は十六七歳、衣服は故衣にして十分の美なしといへども、容貌ははなはだ美麗にして、梨花雨を

帶し、白玉香を生ずるがごとく、大に動人的顔色なり、見るがうち又一個の老翁臺の上に出て、諸人にむかひ禮をなしていへらく、小人等は這回他國より當所にいたりたる父子の者にて侍り、小人かく年老て零落し、なりはひなきゆゑに、只這女兒をよすがに今日をいとみなみ侍り、伏てねがはくは、各位看客、一覽のちかならず賞錢をめぐみ給ひて、小人等をたすけ給へといひをはりて、樂器をうちならしければ、かの妓女衣服をかいつくろひ、扇を把りて、ゆるやかに身をおこし、しづかにあゆみて、已に舞をはじめむ、翠帳紅圍萬事の禮法異りといへども、船のうち波の上、一生の歡會はおなじと唱ひ、柳腰たよ／＼として、進歩かろくはこび、袖をひるがへし裙を曳きて、鸞鳳のごとく舞ひければ、見物の諸人咄と喝采聲、しばしがほどやまず、誠是莫愁的歌、陽阿的舞を見きくこゝちせりとて、大に感嘆をもよほしけり、さて舞をはりてかの老翁賞錢をこひければ、もろ／＼の見物、おのがじ、錢をあたへておしあひて出ぬ、宗村も拘欄の外に出て、日色をあふぎ見るに、はや西山にかたむきしかば、いそぎて旅舎にかへりぬ、又日ごろへて、宗村ふたゝび街にいたり、酒店の樓に上りて酒肴をもとめ、みづから數杯をかたむけて大に興に入り、偶四邊をかへりみつるに、壁のうへに一首の詩あり、

要 拯 危 艱 應 拯 急
遷 延 輒 鋪 立 地 枯
眼 遊 一 過 無 救 難
失 口 不 談 眞 漢 夫

宗村此詩をよみをはりて打咲ひ、這是かならず好事のもの、戲書ならん、心にきき詩の意故とうちひとりごちて、心中大に綽 趣、また數盃をかたむけて爛醉しける折しも、問壁關子に人ありて啞々咽々と哭聲しきりに嘸かりき、宗村これをきゝて忽然として怒り、碟兒盞兒を把り、地上に丟在ていへらく、此家の

ともがら何奴才を紙門のうちに置き哭しめて我酒興を妨ぐるや、我今日此に來りて酒肴をもとむれば、是乃一個の主顧ならずや、しからは一點の興をもそゆべきを、さばなく烏晦氣哭聲をきかして、興をやるはいかなることわりぞと、たかやかに罵りければ、酒保これをきき、慌忙樓に上り來り、こしらへなごめんとしたる處に、やをら紙門をひらきて、一個の老兒一個のわかき女をひきて立出で、うやくしくひぎまづき宗村にむかひていへらく、我輩貴客のこゝに居給ふをしらず、心中辛苦あるまゝに、おぼえず哭て興をさまたげ侍り、露ばかりも此家の人等のしれることに侍らず、ひとへに无禮の罪をゆるし給へといふ、宗村かの兩人を見るに、熱面的にてあれば、乃とひて曰く、爾等は當地の拘欄におきて舞をなす者にあらずや、何のゆゑによりてさばかりうれふるぞ、老兒が曰く、のたまふがごと、我等父子は歌舞吹彈をなして世をいとむ者に侍るが、這回ゆゑしき大事おこりたるによりて、しかかなしみ侍りぬといひさして、兩人ともに涙を撲簌々々おとしければ、憐憫の心を生じ、ことばをやはらげて云ふ、小生は是、權當地に足をとむる旅人なり、我性質人の危難を見て、むなくすぐることをはちとす、爾兩人のおもてを見るに、恰も橋れたる木のごとし、心中の苦辛猜せり、ゆゑしき大事とはいかなることぞ、つゝます來歴をかたれ、我ちかひて爾等をすくふべしといふ、かの老兒暗に宗村が模様を見るに、志氣堂々威風凜々として、よのつねの人物にあらず、さらに言語自然に誠あるをききて、すこしく力を得て曰く、なまけふかきおほせにつきて事をつゝますかたり侍らん、小人は原來越前國の者にて、島寺内記といふ樂戸、これなる女兒はいとなき時より歌舞をなし、つねに高貴の宴席にめされ、島寺の袖とよびぬ、前年新田羽林義貞公、金崎におきて船あそびありし時、かしこくも春宮の御前にめされ、歌舞をなしてあまたかづ

けものたまはりしより、漸々に家榮えてさまで衣食とばしからざりしが、賊のために家をやかれ財をうばはれて、一時に零落し、せんすべもなければ、前月當國にいたり、當地の拘欄をかりて女兒に歌舞をなさしめ、小錢を乞てわづかにいとなきとす、しかるに當國の屠者長偶女兒を見てふかく愛慕し、しひてめとらんことをもとむ、もしうけひかすんば、父子ともにとらへていたくうきめを見すべしとて、當郷の出口出口日毎に手下をつけおきて守らしむ、此ゆゑに我等國のうちの羊のごとくのがれいでんことあたはず、只心をくるしむるのみなり、此よしを官府に首告んとおもひ侍れど、當地の人等は後日彼等に仇をかへされんことをおそれ、一個としてともなひいづる者なし、明日は好日なるよし、女兒をむかへとらんとつげおこし、事已にこゝにせまりぬ、屠兒を女婿となして姓名をけがさんよりは、寧ろ父子ともにくびれて死んじかじと心をさため、親子は一世のちぎりとかきければ、泉下におきて再會のほどもはかりがたくおもひ、一杯をくみておや子今生のわかれをなさんとて、此酒樓にいたり、おぼえず哭て興をやぶり侍り、ひとへに罪をゆるし給へと涙をのごひつゝ、つばらにかたりければ、宗村これをきき、呵々と喚て曰く、何等の大事かとおもひつるに、這是かやすき小事なり、那庵瀆濫才良婦をめとらんとのおむは身のほどをしらぬ奴才なり、我這拳那厮がかうべを打くだきて、おん身等のうれひをはらふべし、彼が家はいつれの處にありや、内記が曰く、此所より五里ばかりをへだちて一座の高山あり、捉鬼山と稱す、かの山中に住むとなり宗村が云く、何にまれ此處は事を議するによからず、おん身はいづれの處に住むや、内記が云く、這街のうしろに一軒の空房あるをかりて旅宿とし侍り、宗村が云く、しからはおん身の旅宿にいたりて事を議すべしといひて、やがて酒錢をつぐのひ、つひに三人一齊に酒店を出てかこへ行きぬ、さて宗村内記が旅宿

にいたりて云く、小生はやおん身等をすくふべき良計をおもひつきぬ、その計は如此々々道般々々といふ、父子これをきき、ていまだ十分に心を安んぜずといへども、もし計しそんじなばその時死すともおそかるまじ、とまれかくまれ這人の主意にしたがふべしと心をさだめて、只三拜してふかく恩を謝しければ、宗村はわかれを告げておのが旅宿にかへりぬ、かくて次の日黄昏絶、ふた、び宗村島寺が旅宿にいたりけるに、今夜は屠兒が方より袖兒をむかへに来るべき約にてあれば、手下等を欺待すべきまうけの酒肴など父子てづからと、のへたつるとて、はしりまはりて居けるが、宗村が来りしをよろこび、一間のうちに請じて且酒をすむ、宗村は曾て心中に計あれば、のどかに敷蓋をかたむけてまちけるに、二更のころほひにいたり、屠兒の手下ども十四五人、あやしげなる禮服を穿し、一乗の轎子を擦げ火把をふりてらすすみ來り、白板盤子に、胃架、素衣、帶等、婚儀の禮服を盛りたるを把り、一回的口菓をのべてこれを呈す、内記これをとりをさめ、酒肴を把りて手下等にすめ、何くれとして時うつりければ、手下等しきりに催促す、袖兒おくの間に入りてかの素衣を着かへ、胃架を戴き、渾身白漫々地打扮て立出で、父にたすけられて轎子にのりうつりければ、手下等これをか、げ出し、一齊に恭喜々々といひつゝ、いそぎ行きけり、原來彼屠兒長は、捉鬼山に住て家大に富み、大厦美麗を盡して恰も諸侯の第宅に似たり、しかるに此夜新娘をむかふるとて、前門に篝火をたき、廳々に燈燭をてらし、こゝかしこに靛燈をたて、手下の男女あまたはしりまはり、いと美々しきまうけのさまなり、時に遠見の者走りきたりて、はや新娘の轎子來れりと報じければ、手下等前門に出て轎子をむかへ、みちびきて正廳に控のぼせけるに、やがて彼長、異様な禮服を穿ちて立出ぬ、這屠者生得てはなはだ醜淡なり、但見、

眉は濃くして、蜘蛛のうごめき出たるがごとく、眼は圓くして、銅鈴をかけならべたるに似たり、鼻低頬高、耳小口歪り、腮の邊に赤き鬚鬚しげり、黄なる牙齒なみわろくならぶ、若閻羅王、巧人に轉世たるにあらずんば、定是、生殺神、新婿に假扮たるならん。

さて彼屠兒、立よりて轎子の戸をひらき、みづから新娘の手をとりてたすけ出さんとす、時にかの新娘、たちまち胃架を把てなげすて轎子ををどりいで、はやく一脚をとばせて屠兒を踢倒し、鐵石のごとき拳を提起て、呀といひて鼻子上を打ちけるが、打得鮮血迸流、鼻半邊に歪みて、恰も箇の油醬舖をひらきて、醜的、酸的、辣的、一發都滾出來に似たり、なほ眼眶の際、眉の稍に就て、連て二拳打ちければ、可憐這屠者、眼やぶれ烏珠迸出て死しにけり、這新娘に假扮たるは、乃是宗村なり、手下どもこれを見て迷魂湯、新娘とおもひしは大げものにてあるぞ、那厮のがすなといひて、七手八脚竹鎗を把りて圍住む、宗村衣服のすそをとりてたかく帯にかいばさみ、鐵燈檠を把りてちかづく者十四五個打倒し、四面八方にめぐりてふりまはしければ、立地にうちころさるゝもの十餘人疵をうけたるものは敷をしるべうもあらず、宗村こゝちよくおもひ、なほ敵する者あらば打ころさんとためらひ居けるが、たけき勢におそれたるにか一個としてちかづく者なければ、つひに門外にはせ出ぬ、さて認得徑路といへども、月明に乗じ、道をもとめてはせかへり、たゞちに島寺が旅宿にいたりて、かのはたらきの始終をかたりければ、父子のものは只話をきくすら身うちわなきておそれぬ、宗村は手下ども此家きたりて仇をかへすべきをおそれ、此夜急に父子をして家内をとりをさめしめ、行装をさせ、圓金五塊あたへて盤纏となさしめ、おのれみづから父子のものにつきそひて、此處を立出で、間道をよぎりて國境までおくりゆきぬ、島寺父子わかれに

のぞみ涙をおとして曰く、我々もひがけず相公のたすけによりて、あやふきいのちをたもちぬ、委是重生父母なり、もしゆくするつ、がなく今生にながらへなば、異日いさゝか大恩をむくゆべしといひて、地上にふして禮をなす、宗村曰く、大丈夫の作事はかならず始ありて終あり、此處までおくり来ればは、やきづかはしきことなし、此にてわかれ申さん、縁あらば再會すべき時あらん、つゝがなくおはせといひて、つひに別を告げておのれが旅宿にかへりぬ、島寺父子はいつくをあてともなくはせ行きけり、かくてのち、宗村は主君の幹事と、のひて、雲州にかへりけるが、彼屠兒等數人をうちころしたる一件、泐々揚々地、世上にうはさあり、宗村が所爲なりといふこと、つひに高貞公の耳に入り、已に罪せらるべきを宗村が爲人をしみ給ひ、暗にめして事を囑付、金子二百兩あたへて府中を逃奔なさしめ給ふ、かくて宗村は主君の仁慈によりて罪をまぬかれ、涙をおとして恩を謝し、夜に乗じて府中をのがれ出けるが、にはかに干隔湯となり、立よるべきかかげもなくせんすべなければ、泉州にいさゝか所縁の者あるをこゝろざして、かしこにいたりぬ、さて泉州にいたり、かしこまよひありき、一所の十字街を過ぎけるに、背後より恩人恩人とよぶものあり、身をひるがへして見れば、乃是彼島寺内記なり、内記おもひがけぬ所におきて宗村にあひ、ことに身上の模様まへとことなるを見て大にいぶかり、恩人は何ゆゑにかゝるすがたになり給ひて、當國にきたり給ふぞと云ふ、宗村且心中によろこび、此におきてはからず足下にあひたるは、こよなき幸なり、事をつばらにかたるべし、權且かしこに來り給へといひて、かたはらの茶坊裏にいたり、干隔湯となりしいはれをかたりければ、内記いとうれひて曰く、恩人かく落魄給ひしは、都是我等父子が罪なり、恩人救を垂れ給ひしゆゑに、我等父子身上つゝ、がなく、今當地にすみてすぎはひをなしぬ、活命の洪

思いかでかわすれ侍らん、小人等つねに恩人と再會せんことをねがひけるに、今日はからず此におきて出會せしは、誠是皇天のひき合なり、且小人が宿所にいたり給へといひて、宗村をともしひいそぎて家にかへりぬ、かくて宗村島寺が家に權住して、身のをさまりをはかりけるが、内記父子の望によりて、つひに袖兒を妻とす、原來宗村は父母妻子なく、その身干隔湯となりたれば、ふたゝび武夫に立かへるを願はれず、もとより二君につかふる意なければ、當國沙界といふ所に一所の店をひらき、店名を天川屋と稱じ名を義平と叫び、主君のたまはりたる二百兩の金子を本錢となし、走海販賣をなして營生とす、袖兒も名を更て阿圓と稱じ、夫妻むつましく過ぎけるが、ほどなく一子を生み、名を義松とよぶ、義平は今かく民間に下りけれども、武夫の志をわすれず、營生のひまには此地の後生等をあつめて、劍訣打拳等を教へ、もつばら義をたふとみ利をいやしめ、かの宋代の豪傑九紋龍史太郎が爲人をしたひて、背上に雲龍の花繡を刺りけるゆゑに、時の人皆彼が混名を黑雲龍義平と做叫、一個の好漢とたゝへて大にうやまひけり、さて内記は晩年の樂をきはめけるが、日月情なく年華かぎりありて、つひに病にそみて身故しとなん、事しげくわづらはしきはうちおきていはず、しかるに四年ばかりを過てのち、鹽治侯師直がために無實の罪におち、一時にほろび給ひしとき、義平且悲且怒、一命をすて、故君の讐を復し、いさゝか大恩にむくいんとおもひけるが、常言に孤掌不鳴といへるがごとく、一個の力をもて、豈強威の權家をうかゞふことあたはんや、只いたづらに切齒咬牙いきどほりをしのびてぞ過了ける、不在話下、且説、石堂縫殿助といひて、高貞公の同胞の弟あり、石堂右馬丞義基の嗣子となり、京都に居住し給ふ、高貞公うせ給ひしのは、貌好夫人小衛内とともに彼館にやしなはれておはしぬ、しかるに時光過ぎやすく日月梭のごと

くめぐりて、此年己に高貞公の大祥にあたりたれば、天龍寺におきて修設好事、且管領のきこえをはり、且故廷尉の覺提のためとて、小衛内を出家なさしめんとなり、これによりて縫殿助、貌好、小衛内、おのゝ禮服を穿し、従者をひきて天龍寺にいたり給ひ、米錢を把てまろゝの巧子に施行し、好事をはりてのち、小衛内剃度し給とて、鴻鍾を鳴し法鼓を撃しめ、夢窓國師禪椅の上に坐し給へば、一山の衆ふた、び法堂に會し、法坐の下にいたり、一齊に合掌して拜禮をおこなひ、わかれて作兩班たつ、貌好夫人小衛内をひきて法坐の下にいたり給ひ、縫殿助のかたはらにおはす、石堂の家人、僧帽僧衣、袈裟、拜具等を臺にもり、さ、げ出て法坐の下におく、中央には一爐の信香をたき、香氣馥郁たり、堂中清淨なることいふべうもあらず、時に行童出て、小衛内の禿髮をわかつて九ツに縮ひ、淨髮人剃刀を把りてかたはらにいたれば、嗚呼痛哉、年六歳の小衛内、掌を合せて佛號となへ拜禮し給ふ、その身宇多天皇の後佐佐木の昆裔として名家の子孫なるに、不幸にして父をさきだて、家をうしなひ、ながく浮圖の廢料となり給ふ、豈をしまざらんや、その身はをさなくしてことをわきまへ給はざれども、母夫人の心中いかにあらんと涙をおとさぬ者もなし、時に國師、這兒のゆくする禍福吉凶を考へ見るべしとのたまひ、咒語をとなへ眼をとち、や、ひさしうして四句の偈をさづけ給ふ、その偈に道、

遇山而死、
遇川而活、
遇園而悲、
遇岡而懼。

國師偈をつけ給ひ、此兒の禍福吉凶都て此偈のうちにある、かならずわすれしめ給ふなど、いひをはり給へば、淨髮人若きみのうしろに立ち、己にみどりの髮を把りてなさけなく、只一剃刀にそりおとさんとした

る時しもあれ、石堂の家士急々忙々走りきたり、報じて曰く、這回鎌倉より官使として山名侯上京し給ひ、今日着駕にて、只今たゞちに當寺にいたり給ひ、管領の命を告げ給ふとなり、速駕をむかへ給ふといひてしりぞきぬ、縫殿助大におどろき、はからざる官使の來駕、這是いかなるゆゑぞと眉頭を一從ければ、夢窓國師の曰く、管領の命とあれば等閑のことにあらず、權剃度をとゞめ官使をむかへ給へといひて、衆僧をひき法堂をせりぞき給へば、夫人も若君をとまなひ、あとにつきてしりぞき給ふ、不多時、門前に人馬の足音ひゞさけるが、山名次郎右衛門馬上にあり、あまた引了從人きたり、横門のまへにて馬を下り、従者は盡く此所にをらしめ、ひとりみづから烏帽子をたゞし直垂をかいつくり、端々正々としてすゝみきたる、縫殿助いそぎまどひ、法堂を下りて地上に拜伏し、尊駕をむかふること大に遅々せり、罪をゆるし給へといひて、うやゝしく禮をおこなひ、みちびきて法堂の上ののぼり、山名を首席に請じ、はるかに下り平伏して曰く、領了官使勞駕到此、且公命のむね謹領、すみやかに告給はるべしといふ、山名ころも手をかきあはせ、威儀を整頓て曰く、公命のむね非爲別事、鹽治の家士等、似巧人一般の身となり、餓鬼のごとくくるしむのあまり、熱をむすびて密計をくはだて、事を復讐に托して執事をうしなひ且高貞の惡意をつきて管領をおそひ奉らんとはかるよし、世こそりて外議す、恰も夏虫火を撲ち焔を惹きてみづから身を焼くがごとく、到頭は彼等首をうしなふべきはだてにして、もの、數ならずといへども、今己に南北兩朝にわかれ、新田和田楠等の一類諸州にかくれて、只時の變あらんことをまつ時節なれば、小事といへどもすておかれず、これによりて質子として、高貞が妻貌好ならびに兒子を鎌倉にゐて來れとの殿旨なり、しかるに今日當寺におきて、彼兒子を剃度せしむるとか、途中におきてき、つるゆる、

足下の居宅にいたるべきを、枉て此にきたれり、速兩人をわたすべしといふ、縫殿助きつて只胸つぶれ、かしらをたれていらへず、心中におもへらく、管領の命はおもしといへども、娘々鎌倉にいたらば、かならず師直がためにはづかしめられ給はん、さては泉下の阿兄に對して、何のかんばせかあらん、又公命ををかす時は、罪石堂の家に管り、養父に對して不孝となる、奈何せんくと、とさまかうさまにおもひみだれけるが、漸々心をさため頓首して曰く、公命のむね恐入てうけたまはり侍り、いかでかそむき侍らん、鹽治の家人等隠謀のこと、もとより虚説なりといへども、さばかり管領のうたがひ給ふうへはせんすべなし、すみやかに質子をわたし侍らん、されど一個是女子一個是をさなきもの、ことに鎌倉にいたるは長路にてあれば、路中のこゝろえなど申ふくめ、なごりをもをしみたたくおもひ侍れば、萬乞一盞茶時ゆるし給はるべし、權且公は方丈にいたり給ひ、くつろぎて鞍馬のつかれをやすめたまへといふ、山名が曰く、火急の命なれば、一時間ものべがたしといへども、枉て少刻がほどゆるすべし、かならず遅延することなかれといひつゝ、翌々と四邊をかへり見て、つひに方丈の裏にいたりぬ、縫殿助は手を又き首を抵れて居けるが、心中におもへらく、事已に急にせまる、別に良計あるべからず、寧ろ我破肚をなし、管領のうたがひをとき怒をなだむるにしかじ、是了是了とおもひきはめて、やがて腰刀を抜きはなち、衣服をくつろげて已に肚につきたてんとしたるをりしも、かたはらの簾中におきて一聲撲地とひびき、たちまち鮮血濺のひまよりはしり出しかば、縫殿助刀をすて、はしりより、簾をひきちぎりて見るに、嗚呼哀哉、嗚呼痛哉、痴好夫人親手小術内をさしころし、その刀をもておのが吭につきたて、かさなりてふじ給ふ、縫殿助大におどろき扯起して見るに、はや兩人いきたえて死し給ひぬ、まことにあはれの光景見る目

もあてかねたり、時に山名欠し伸しつゝ、時刻うつりぬ、とく質子をわたせといひて出来りけるが、此光景を見て心中におどろき、もし替身のかと立よりて看一會て好眼熟たるうへに、夫人は世にたぐひなき美女にてあれば、見たがふべうもあらず、此裡の機關大にたがひ、只是呆たるばかりなり、縫殿助大にかなしみて曰く、痴好母子自殺をなしたるうへはせんすべなし、此とほり鎌倉にきこえつき給はるべし、山名が曰く、彼癡女ものにくるひやしつらん、管領の慈悲をかへり見ず、自殺をなしたるうへは、首級を接てかへるべし、皆是高貞が逆悪のむくいなり、こゝちよきかなといひて冷咲ひけるが、原來師直夫人をふかく愛慕し、管領の命といつはりて、質子に托し、夫人を鎌倉に引て、おのれがのぞみをとげんとはかり、山名を假官使となして、奸計をおこなはしめたるなれば、山名口にはしかいへども、計をあやまりて夫人をころしたれば、師直のいかりをおそれ、却是心中には大にくるしみけり、常言に一枝を欲て百枝を損ずといふことあり、此たぐひなるべし、かくて山名兩人の首級をとりてかへりければ、縫殿助ひとり法堂にあり、ふたゝび刀を把りて肚をかきやぶらんとしたる所に、やよはやまり給ふなと聲かけて、一個の漢子法堂の上ののぼり、はるかに下りて區々の伏す、縫殿助見やりて曰く、爾は何者なれば我破肚をとむるぞ、我爾を識認す、那漢子が曰く、相公はいときなき時石堂家の嗣子となり給ひ、彼家におきて生長し給ひたれば、小人を見しり給はざるもうべなり、小人はこれおん家士山背助宗村といひし者なり、前年故ありて雲州を逃奔し、干隔滂となり、今は商人となり下りて、店名を天川屋と稱し、名を義平とよび侍り、夫人若きみともにつゝ、がなくおほすに、など自殺し給ふぞ、縫殿助曰く、呀爾は宗村にてあるか、夫人母子眼前に死し給ひ、いまだ屍をとりをさめず那里にあり、いかでかつ、がなからんや、義平曰く、しかの

給ふもうべなり、那里にて死したる母子兩人は小生が妻阿園、兒子義松にて侍り、縫殿助大に恠て曰く、爾何事をかいふ、夫人母子は我家にやしなひて、我常に貼身するにいかでか見たがふべき、ことに山名は曾て嫂のおもてをよく見しりぬ、豈好替身をもてあざむき得べけんや、義平曰く、山名眼をうばはれしもことわりなり、相公すらなほ見たがへ給ふ、且小人身のうへをつばらにかたり侍らんとて、和州におきて居兒を打ころしたる一條、主君の慈悲によりて罪をのがれ雲州を逃奔したる一條、および泉州にいたり、島寺父子と縁をむすびたる事まで有枝有葉約細説了けるが、替身の計策をかたり侍らんとて又曰く、這回妻子を引て當地にいたりたるゆゑは、いかにもして娘々に拜謁し昔日の罪を贖び、身をきよくしてのち大星が影にくは、り、故君の仇をむくはんとおもひ侍りてなり、しかるにけふしも當寺におきて、故君の遺薦をいとなみ給ふとき、恰好と此にいたり食堂にありてをりを見あはせ、夫人小衛内また相公にも拜謁し奉らんとおもひけるに、豈はからんや、官使來駕ありて、一場の禍、夫人等のおん身に及び、相公のおん身もあやふし、此こそいさゝか洪恩をむくゆる時節なれ、さいはひ妻夫人の容貌によく似たれば、妻子をもて質子の替身とし、官使をあざむかんとおもひけるが、さてはのちに事ほころびなん、事索自殺させてあざむくにしかじと、かれらにいびふくめ、暗に國師につげ、御母子の衣服をこひてかれらに穿しめ、髪をつかねたるさま、でこまやかに假扮て、かくははからひぬ、妻は原舞妓にてありしゆゑ、最好打拵得たり、しかのみならず、國師道家の變身術をおこなひ給ひしゆゑ、相公すらなほ質とし給ひぬ、豈山名をあざむき得ざらんや、これを小人が微功となし給ひ、故君にかはりて昔日の罪をゆるし給ひてよ、さあらば妻子等も泉下におきてよろこぶべし、此事ひとへにねぎ奉るなりとて、涙を撲簌々々とおとしければ、縫殿

助奇異の思ひをなし、彼が忠義を感じ、阿園等母子が忠死をあはれみ給ひ、悲歎にせまりけるが、貌好夫人も小衛内を引て出來り給ひ、阿園等が屍首にとりすがりて、はてしなきくりことのたまひつゝ、むせかへりてぞ哭給ふ、かゝるをりしも、又一箇の漢子はしりきたりて、法堂の下にひざまづくを、縫殿助見給へば、是乃寺岡平右衛門なり、寺岡やがてふところをさぐり、文匣をとり出して呈上す、縫殿助接て匣をひらき見給ふに、是大星が書簡にて、密事またくと、のひ、ちかき日發足し、鎌倉にいたりて仇家をうたんと云一條をしるし、おのれら死後の事までをこまやかにかきつけたり、縫殿助夫人と、もにこれをよみをはり給ひ、一頭にはよろこび、一頭にはかなしみ、悲喜交集、さて縫殿助が曰く、我國師のしめされし偈の意をつらくかんがふるに、遇山而死といふは山名が事に應ず、遇川而活といふは天川屋が事に應ず、遇園而悲と云は阿園がことに應ず、遇岡而憐と云は寺岡がことに應ず、都是後來の事にあらず、今日眼前の吉凶をしめされしなり、凡慮のおよぶ所にあらず、奇哉妙哉といひて、感嘆轉やまさりける、又義平にむかひて曰く、我備が意下を見ぬきたれば、一箇の大事を令ん是別ならず、山名を十分にあざむき得たりといへども、もし後に事やふれば、罪最おもし、これによりて我心を安んせず、權且夫人等の身をかくし、のちに良計をなして無事をはかるべし、夫人等のかくれ家は民間にしくべからず、權且夫人母子を備にあづくるあひだ、心をもちてかじづけよと命じ給ひ、しかくして去けと指揮し給へば、義平かしくみて奉はり、一合の長韓櫃を把りてうちに夫人小衛内をかくし入れ、擔子の模様を装做、石堂の家士兩個を脚夫のさまに打扮せて、おのれみづから監押のさまに打扮て、一齊にまかり出んとしたる所に、忽法堂の床の下より、一個の教化的あらはれ出で、彼擔子を攔住て曰く、我那裡にかくれ居て爾

們が密話をつばらにき、ぬ、這櫃のうちには高貞が妻子をかくせり、引出して山名侯にわたすべし、はしる
 ことなかれといふ、義平すこしも不慌、彼がくびすちをとらへ、地上に撲地なげつけて、寺岡に峻眼す、
 寺岡その意を曉り、手はやく腰刀をぬき、とびかゝりて那厮が胸の上をさしとほしければ、只一聲阿と叫び
 て死にけり、義平これを見て阿々と打咲ひ、好軍神の血まつりかなといひつゝ、はしり行きぬ、かの教化的は
 乃是隠寶刀了竹なり、此日山名がために問者となり、施行をうくる巧人にまぎれ入りて此所に來り、かくれ
 居たるなり、却阿園義松が屍は天龍寺に葬り、爲に修設好事てその靈魂をあつくまつり給ひけるとなんき
 こえし、且話天川屋義平はかの櫃をまもり、泉州沙界をのぞみていそぎ行ける、半途におきて日くれけれ
 ば夜とほしにゆかんとて、みづから灯笼を把、前にすすみて一味地にはしり、一座の松林にそひて亂草逆
 離たる所をすぎけるに、泥水の邊に蛙兒なき、遠寺の鐘聲かすかにひびきていとものさみしく、時は三
 更のころほひなり、義平櫃を挑ひたる兩人の者にかたりて曰く、這林のうちにおきては剪徑に撞見、財を
 うば、れ命をうしなひたるものおほしとき、ぬ、我輩兩君を守護し、身に大事を管りたれば、いさ、
 ぬも心をゆるしがたし、足下等もその心がまへして行給へと、いまだいひもをはらざるに、遠々地火把の
 光あらはれ出で、漸々にちかづき來る、義平おもへらく果して彼等は賊ならん、さもあらばあれ平常の本
 事をあらはし立地に打殺すべしと、こぶしをにぎりてまちけるに、彼等は賊にあらず、かへりて是七八人
 の土兵にて、已に此にいたり、義平等が模様を見てあやしみ、前後をかこみていへらく、我々は知縣の命
 をうけて賊をとらふるものなり、爾等が模様いとあやし、その擔子かなならず贓物ならん、速にいまし
 めをうけよ、知縣廳前にゐてゆかんといふ、義平腰をりて曰く、見給ふがごと小人等は商人なり、這擔

子は京都にて買ひとりたる貨物にて侍り、あやしみ給ふことなかれ、土兵等曰く、曾て謙賊等さまに容
 を變へ、このあたりに徘徊して、もつばら旅客を害し錢財をうばふよしをき、ぬ、爾いつはるともいかでか
 まこと、すべき、はやく手をつかねよ、義平曰く、實に小人等は商人なり、すみやかに道をひらきてとほし
 給へ、いなとほすまじ、いなとほし給へといひて、互にあらそひける、土兵等ますくあやしみ、大ぬす
 人め、さばかり抵頼ば擔子をひらきて點檢すべしと云て、手をくださんとす、義平は是火性短氣の生にて
 あれば、忽一發の怒心上よりおこり、立かゝりたる土兵を踢退け、おのれが身を把りて擔子の上におほ
 ひ、大に吼りて曰く、爾們清淨の營生をする我輩をとらへて賊なりといひ、擔子に手をくださんとす
 は、却是爾們こそ賊ならめ、我をたれとかおもふ、我は是泉州沙界に住みて、天川屋義平といふ好漢な
 り、しひて擔子に手をくださば立地に踢殺べし、これを見よといひて兩袒、白漫々地肥て銀板のごとき
 背上に刺し、雲龍の花繡をあらはして見せけるに、土兵等は皆是虛心病的にてあれば、これを見ても大にお
 それ、一言半句をいはずいちあし出してにげさりけり、かくて義平つゝ、がなく泉州にかへり、夫人小衛内を
 ふかく隠匿おき、朝夕心をもちわてかしづきけるとなん、義平は妻子をころして主君の恩にむくい、阿園
 はおのれ死し兒をころして丈夫の恩にむくゆ、彼は忠士これは貞婦、ともに千歳の美談となれり、都是人
 の臣たるもの、人の妻たるもの、鑑なり、後人義平を讃したる詩あり證とす、

多 年 運 蹇 市 塵 沈、
 進 葉 生 泥 金 混 土、
 舊 習 不 忘 義 膽 深、
 他 時 現 出 本 來 心。

後來如何ことかある、且下 回に分解を聴け。
 (後編卷之四畢)

忠臣水滸傳後編卷之五

忠臣職文庫

第十一回

大星琵琶湖にて大に義を聚む
兼好國見山にて夢に石を降す

話說大星由良は、弱の強に勝ち、柔の剛に勝つといへる老聃の言、柔能剛を制し、弱能強を制すといへる軍議の語を以て意とし、命をかるんじ義をおもんずる鐵石の士をあつめ、粉骨碎身千辛萬苦して事まつたくと、のひ、已に時節到來したるにより、ちかき日鎌倉に發足すとて、一夜暗に近江國石山寺におきて、同盟の士をあつむ、一來是肅隊をなし軍令をさだむべきため、二來是一杯をくみて箇々今生のわかれをつげんためなり、原來當山の寺主は、大星が親眷にて腹心の人にてあれば、衆人心を安んじ、三人五人づ、うちつれて漸々につどひきたる、抑石山寺は石光山と號し、天平勝寶六年の草創なり、聖武帝の朝、僧正良辨、如意輪觀自在丈六の像を安置す、一千有餘年を経たる靈場にして、誠是好一座の大刹、清淨活佛の寶地なり、佛殿はたかく崑上にそびえ、週廻は都て巖石漸々とそびだち、樹木陰々としげる、鐘樓は月窟と相連り、經閣は峰巒と對立、巖前の花木春風に舞て暗に清香を吐き、洞口の藤羅宿雨を披て倒て嫩線を懸る、比良神は石上に釣をたれて靈迹をしめし、紫式部は堂中に書をつづり玉硯をとむ、絶頂を片履岡と稱し、東寺崎、螢谷等有名の地、しるしつくすべうもあらず、後は連峰峩峩として、崑崙笠取につらなり、前は勢田川のがれ森々として、湖水につゞく、げに此地の月を賞して

八景の一勝とせるもうべなり、相國寺林長老一首の詩あり、説得好、

秋風蕭瑟一天涯、霜滿四山不帶霞。
古來回岩寒月影、吟殘葉々霧中花。

さるほどに大星をはじめとして、諸士ことごとく當山にあつまり、佛殿の正面に三ツの胡床をまうけ、大星由良第一の胡床に坐す、破浪郷右衛門第二の胡床に坐す、大星力彌第三の胡床に坐す、その餘の輩は左右にわかれて居ならびたり、おのゝ装束をあらため、頭に鐵巾をいたゞき、身に單甲を穿ち、腰に兩刀を跨、都ておなじさまに打扮、手には角弓、腰槍、柳植のたぐひ、心えたる所の軍器を把りて、殺氣人を侵し威儀嚴重に見えたり、大星やがて身をおこし胡床を下りて、中央にすゑおきたる香卓のもとにいたり、一炷の香を拈り、つゝしみて天地を拜しければ、忽然として法坐のうしろに、金磬を鳴し法鼓を撃こる大にひゞく、這是密議を外へもらすまじきため、寺主のかくものし給へるなり、大星天地を拜し、伏て願は神明我輩が志をあはれみ給ひ、這回の大事勝利を得、故主の仇をむくはしめ給へと、ふかく觀念しければ、皆一齊に拜禮してこれを祈りけり、さて大星依舊胡床に坐し、衆人に示していへらく、我輩仇家を打は夜に乗じて襲はんにかじ、夜打にはかならず暗號をもちうべし、天武紀を見つるに、田邊の小隅倉屋に詣り夜營中に入る、己が卒と足麻侶が衆と、わかちがたきをおそれ、每人に金といはしむ、金といはざるは乃斬と見えたり、是乃本朝暗號のはじめなり、唐土におきては、經國雄略、堯山堂外記等に暗號のことをのせ、又名山兵制記に答號あり、紀効新書に暗令あり、都是夜軍に暗號をもちたるためしなり、本朝暗號のはじめなれば、ふるきをたふとみて我輩彼金といへることばをもちうべし、如此々々

這般々々と、つばらにしめし、此令にたがふ者は不忠たるべし、よく〜心得給へといひければ、皆一齊に心え侍りとこたふ、さて大星令をつけをばり、身をおこして欄檻のはとりに立出で、四方をのぞみ見るに、此時已に九月のなかばなりしが、天に一朵の雲もなく、一輪の明月皎々とかゞやき、恰も白日のごとし、琵琶湖を眼下に見くたしてえもいはれざる好景なり、時に敷行の賓雁嘹唳として空中をとびきたる、大星これをゆびさしていへらく、各位彼を見給へ、彼はすなはち八個の陣制にはゆる雁行の陣なり、我輩彼雁のごとく隊をつらね群をすゝめ、首尾を正して進退心を一ツになす時よ、豈勝利を得ざらんや、たとひ師直殿中に避け、鐵洞に躲るゝとも、かれが首級は我たなごゝろのうちにある、首途の吉兆此うへかあるといひてよろこびければ、皆一齊に雀躍してつひに佛殿をしりぞき、方丈に宴席をまうけて、大に飲酌をなし、三更のころほひにいたりてわかれをつけ、おの〜宿處にかへりぬ、説分兩頭、且説、山名次郎右衛門は、前に天龍寺におきて僞級を接りたることをゆめにだもしらす、計をあやまちて實に親好夫人をころしたりとおもひ、師直のいからんことをおそれて、鎌倉にかへらす、身をかくして居けるが、別に一功をなして師直の心をなだめんとおもひ、這夜大星等石山寺に會せることをつゆばかりもしらす、密計を商議せんとて、鵜坂内をいざなひて琵琶湖に船をうかめ、腹心の者に櫓をとらせ、月明に乗じてはるかに漕いだし、湖心にいたりて四方をかへり見るに、渺々たる大湖中に一隻の船も見えず、をりこそよけれと伴内に説りていへらく、小人計をあやまち親好をころしたれば、執事のいかり給はんこと必定なり、これによりて鎌倉にかへることあたはず、恰も没脚蟹のごとし、此うへは別に一計をほどこし、大星父子をうしなひ、草を斬りて根を除く一功をなして罪を贖んとおもひ、密事を議するには船中にし

かざればかくはからひつ、伴内がいふ、小人も又大星父子をうしなはんとおもひ、前に一計をほどこしけるが、彼等運つよくして計にあたらす、むなく相公の用金をつひやしたれば、鎌倉にかへりて相公にまみゆるにかんばせなし、公の良計につきて彼等をうしなは、誠是相公の病根をたつ道理にて、もつとも大功なり、速計をしめし給へ、山名が云く、這回はよのつねの計策はもちろながたし、苦計にあらずんばあたるべからず、我計は如此々々這般々々とかたりければ、伴内掌をうちて大によるこび、妙計々々速にその計をおこなふべし、那們かゝる良計ありてあすの命のあやふきはしらす、枕をたくふしぬらん、愚哉々々といひてあたりをはぐかる事もなければ、大に口をひらきて呵々と咲ひける時しも、遠々地蘆葦深處より、あまたの水鳥翻々と羽だ、きしてとびさりけるが、忽櫓の音ひきて、壇に漁歌を唱ふ、その曲兒に道く、

網底難逃 這賊孩、
一刃成輪 代魚來、
義士赴雙 啓行日、
餐之且飲 獨懷杯。

兩人原是慮心病的にてあれば、這曲兒をき、て喫一驚、たちまち船をひるがへし西岸をのぞみてはしりけるが、彼蘆のうちより一隻の漁船を漕いだし、蓑笠をきたる一個の漢子艦にたちて、一張の角弓一枝の箭をとりて打搭へ、満月のごとく拽熬て弦音たかく漂とはなつ、その箭あやまたず山名が船の櫓を把たる者くびすちを射ぬかれ、たちまち飄筋斗て水中におちたり、山名鵜坂これを見ます〜おどろき、伴内みづから櫓を把りて飛也似に逃去りけるが、をりしもあれ一陣の西風吹來り、水を捲き浪を起し船風にさからひてうごかず、こゝろなしにかあとへひきもどさるゝがごとし、伴内は何とせん〜と云つ、命をきは

に力をきはめて漕ゆきけるに、又むかひの蘆のうちより一隻の漁船あらはれ出で、蓑笠をきたる漢子一條の寝槍を提て船にたちたるが、やがて鈎索をなげて山名が船を拵住め、身を把て閃一閃と飛うつり、鎗を燃りて山名にかゝる、山名やむことをえず腰刀をぬきてこれをうけとめ、いまだ六七合もた、かはざるに、はや敵することあたはず船のうちに逃入る所を、彼鎗はやく閃きたりて山名が吭を擲とほし、只一鎗につきころしぬ、伴内驚得て大に迷ひ、慌々衣服をぬぎすて、水中にとび入り、うきつしづみつからうじて對岸にいたり、石籠の上にはひのぼりけるが、ながく積鼻榊を曳て恰も蛙兒に尾のあるが似し、さて爛泥のうちはひめぐり、やう／＼高埠に上り得て息を吻と續けるところに、おもはざりき背後に又、蓑笠をきたる大漢子手に柳樋を提たるが仁王立にたち、髻坂を隠て大喝一聲、我老早此所にありて爾等がまよひ来るを俟わびたり、みじろぎもすなとよばふ、伴内これをきき、て魂魄九霄の雲外にとび、腰ぬけてはしることあたはず、只掌をすりてたすけ給へ、すくひ給へとわな、き／＼つ、いふ、那漢子呵々と咲ひ、爾無益のことをいはず、只速に極樂往生せよ、いで爾がために引導すべし、如是畜生發菩提心とたはぶれ、柳樋をとりなほし、伴内が頭をのぞみ腦漿もいでよと勢に就きて打ちければ、可憐かうべ胴にめりこみて死にけり、かくて那漢子身邊をさぐりて號笛をとり出し吹きたてければ、前の二艘の漁船此所に漕來り、彼船にたちたる兩人の漢子、おの／＼手に鮮血淋々たる首級を提て、櫓をとりたる者とともに岸に上り来る、こなたの大漢は腰刀をぬき伴内がかうべを刎て手裏に在り、都て五人立あつまり何ごとにかあらんさ、めき、かの三ツの首級の頭髪を將むすびて一處と做し、鎗上にく、りつけこれを把て五人一齊に立去けり、此時いまだ四更にすぎず、さて彼五人は何人ぞなれば、角弓を把たるは河背勇太なり、寝槍を把た

るは大星西平なり、柳樋を把たるは雄鷲文太なり、櫓を把たるは腹心の家僕等なり、此夜大星石山寺に會せるにより、若し密事をうかゞふものあらんことをおそれ、前に寺岡に命じこの邊をまもらしめけるが、山名髻坂が來れるを見つけて、大星に告げたるゆゑ、大星三人の士をもちぬ、師直が羽翼たる兩人をころして、ひごろのいきどほりをはらひ、軍神をまつりて首途をいはひけるとぞ、かくて大星等事まつたくと、のひたれば、已に吉日をえらび、行装をなしおもひ／＼に容を變て、鎌倉にぞ下りける、原來是天地間は、一座の大戲場なり、善の擺劃、惡の脚色、ともに天地神明の看官、善惡邪正をわかちて、禍福をむくい給ふ、たとひたくみに機關をもちうるとも、到底は都て徒然、豈夫益あらんや、山名髻坂が徒、乃是好榜様なり、好事先生のつらねたる個勸世の詩あり、説得好、

當場扮作丑生姿、惡貌美心相見知、
天地從來如雜劇、世營一齣介無私。

問話休憩、且説兼好法師は、前に洛東の吉田に住みけるが、那里は大都會露塵の地にして、つねに静ならず、おのづから世の塵にけがれて、徳をそこなひ行を濁すことおほく、正清からざれば、つひにかの地を避れて伊賀の國にいたり、國見山の麓、田井莊に草庵をいとなみ、紙被、麻衣、一鉢の貯へ、藜羹に足ることを知り、好みてつねに古文を愛し見ぬ世の人を友として、只閑静をたのしみくらしけるが、一夜ともし火のもとに晋書をひらきて見居たるに、猛然として眼を生じ、おぼえず机に倚て眼をあはせけるをりしも、柴門をひらきて來るものあり、兼好かうべをかへしてこれを見るに、みづらゆうたる兩箇の童子、たゞちに書几の前にいたり、兼好に對していへらく、我等今娘々の命を奉りて、爾をむか

へんがため此所に来れり、備とくく我にしたがひて歩を移すべしといふ、兼好兩童子の言をきくに、鶯の聲燕の語にして、男子の音聲にあらず、頭をか、けて熟看に、果して兩人ともに女童なれば、兼好大にあやしみ問て曰く、女童等はいづくより來り給ふおんかたなるぞ、女童が曰く、我等は娘々の命を奉りて、備を宮中にむかふる者なり、事はのちに曉すべし、唯宜速にきたるべしといひて、手をあげて天をさしまねきければ、忽然として天上より一朵の白雲下り、一條の梯子となる、已にして兩女童兼好が手を取りていざなひ、梯子に上りて半天の裡にいたりけるに、空中に一つの驕門あり、兼好みちびかれて門内に入り、私に此處を見るに別に一つの世界ありて、星月明明として香風馥郁たり、なほ百歩ばかり過ぎて此邊を見るに、左右に大なる松樹數株ありて、枝葉交りて稠密たり、中央に一條の大路あり、前面には澗々と湖泉ひびきて、青石の大橋あり、兩邊は都て朱欄杆なり、岸の上には奇花異草萎々として、佳色一輪の月に映じ、清香一陳の風に寄る、茂竹翠柳おのづから凡ならず、偏是人間のうちとは見えす、兼好ますくあやしみ、げに稀有の光景哉、必然仙人の住處ならめと讚美して、つひに宮門のうちに入りけるに、此に玉樓金闕たちならびて、その美麗なること叙つくすべうもあらず、兼好已に玉殿の階の前にいたりける所に、數箇の侍女いでむかひ、すなはちひきて玉殿の上のぼらしむ、兼好おぼえず身うち戰慄て、毛髮倒にたちぬ、時に侍女玉簾をとりてたかく捲きけるゆる、ひそかに頭を擦りて簾中のぞみ見るに、七寶九龍床の上に、一個の娘々坐し給ふ、頭には九龍飛鳳の髻を結び、身には金縷絳綃の衣を穿ち、藍田の玉帶長裙を曳き、白玉の圭璋彩袖を擧げ、顔は蓮華のごとくにして、天然の眉目雲環を映かし、唇は櫻桃に似て、自在の規模雪體を端す、誠是凡女とは見えざりけり、這娘々を

いかなる神女とたづぬるに、乃是九天玄女なり、兼好は只地上に拜伏し、頭を低てつ、しみ居たるに、娘々玉音をひらきてのたまはく、這回天帝のみことのりをかうぶりて、備を天上に宣すこと別事にあらず、前に五星ならびに數箇の客星盈縮位をうしなひて、魔心斷す、道行完からざるがゆゑに、天帝權彼等を罰して其精を下界に下し、假に下濁の凡身となし、日本國に生れしめ給ふ、すなはち歳星を降して雲州の刺史鹽冶尉高貞が臣、大星由良と呼做的に生れしめ、熒惑星を降して、泉州沙界の賈人、天川屋義平が兒子義松といふ的に生れしめ、填星を降して、山州乙訓郡山崎の究人、與乙兵衛といふ的、又連野韓平が老婆阿輕といふ的に生れしむ、太白星を降して、鹽冶の家十連野韓平といふ的に生れしめ、落魄せしめて山崎の麓にをらしむ、又辰星を降して、鹽冶高貞が妻親好、大星由良が妻阿石、桃井の家士加古川本藏が妻戸難瀬、女兒小満、天川屋義平が妻阿蘭等、五個の人と生れしむ、別に數箇の客星を降して大星以下いくばくの義臣に生れしめ、人間吉凶の應其衆にしたがひて天上に告げしめ、奸臣佞者を誅戮せしめ、天にかはりて道をおこなはしめ給ふ、しかるに彼等今天數已につきて、天上に踏すべき時いたれるによりて、天帝天書をくだして、彼等を天上にかへらしめ給ふ、此ゆゑに兩童をつかはして備を此にむかへたり、彼天書を備にか、しめんがためなり、とくくこれをかくべしとのたまふ、兼好再拜して曰く、小生が凡筆をもつていかでか能天書を寫べけんや、こはひとへにゆるし給へ、娘々のたまはく、何ぞかならずしも謙退におよばんや、備は原來廉潔にして、行きよく心濁らず、名利をもとめず、曾て皇天を感せしむるの徳者なり、已に天書を寫べき者備に應せり、すみやかにかくべしとのたまひて左右をかへりみ給へば、侍女等やがて筆硯を携いで、兼好にあたま、また屏風の背後より、兩個の黄巾の神、大なる

青石を擡起て出来り兼好がまへにするおく、兼好辭することあたはず、つひに筆をとりければ、娘々天書
 の文を告給ひ、かの石上に寫しめ給ふ、さて兼好つ、しみてこれを寫罷りければ、娘々大によるこび給
 ひ、侍女をめし、爾且彼に酒を酌しむべしとのたまひければ、一人の侍女玉盃に酒を酌て兼好にあたふ、
 兼好うやくしく玉盃を接へてこれを飲みけるに、香積郁として味甘路の如し、又一人の侍女一盤の仙菓
 を捧て兼好にすゝめ、酒已に數巡におよびしかば、娘々兼好にのたまはく、天凡相へだ、ればひさしく
 爾をとめがたし、すみやかにかへるべし、兼好かしこみて拜謝す、娘々又黄巾の神に對してのたまは
 く、爾們は此青石の天書を下界になげくだすべし、かならず遅延することなかれと命じ給ひ、侍女等にたす
 けられて玉簾ふかく入給ひけるが、忽然として、そのあとに五色の雲を生ず、兩個の黄巾の神は命にし
 たがひ、彼青石をとりて雲中になげ入れけるに、恰も霹靂のごとくひゞきて、そのまゝ、下界におちたり、兼
 好此ひゞきにおどろき、おぼえず眼をひらく時、依然として書几に倚て燈下にあり、是乃南柯の一夢な
 り、兼好ゆめさめて奇異のおもひをなし、只惘然として居たる所に、歎一陳の風起り梢をふるひ草をう
 ごかし、机の上を三匝て、よみさしおきたる晋書五行志の卷を、撲籟々々と吹轉して風をさまり
 ぬ、兼好晴をさだめてかの書を見るに、風來りてひらきたる張に、五星のことをしるして數言の語あり、
 その語にいへらく、

凡五星盈縮失位、其精降于地、為人、歲星降為貴臣、熒惑降為童兒、歌謠嬉戲、填星降為老人、婦女、太白降為壯夫、處於林麓、辰星降為婦人、吉凶之應、隨其衆一也。

兼好これを讀了りて想道、此語はすなはちこれ、夢中に九天玄女の告げ給へる所と、符節をあはせたるが
 ごとし、熟想に史記の天官にも、星墜ちて地にいたるときは、則石也としるして、原來星の石に變
 すること、天地自然の理なり、故に青石の天書をくだし給ひて、大星等故主の仇をむくい、天に歸すべき
 時いたれるを示し給ふものならめ、奇哉妙哉、道五行志の語、那天官書の説、曾て虛誕妖妄のことに
 あらずとうちひとりごちて、感嘆轉やまざりけり、さて次の日にいたり、兼好街にいで、あそびけるに、
 こゝかしこに人こぞりて、このごろ鹽治の家士大星由良が徒、故君の讐敵高階師直をうちたり、その始末
 は如、此々々這般々々とかたり、傳説渺々揚々地して、諸人彼等が忠義を賞讃しければ、兼好此外議をき
 き、嗚呼昨夜の夢果して正夢なり、大星が徒都て凡身にあらずと、ますく奇異のおもひをなし、奸臣忠士
 のためにほろび、一旦雲ひらけて、天日の面を見るに一般、泰平の時已にいたれりとつぶやき、心中大に
 歡喜して菴にかへりぬ、げに兼好がことばのごとく、奸臣師直が一族ほろびてより、南朝北朝のあひだお
 のづから和し、つひに兩朝和睦をなし給ひければ、諸州の鬪戰忽をさまり、國土安穩、五穀豐登、路遺
 を拾はず、戸夜閉ぢず、萬民枕を泰山の安きにおき、泰平無事をたのしみけるとなん、誠是、大星が大功
 なり、詩あり證とす、

衆木常時相與同、
 一治一亂都天道、
 乍起數雄討積惡、
 更爲國土泰平日、

忠臣水滸傳後編、卷之五

蒼松貞操見霜風、
 或死或生是地工、
 能令萬世鑑純忠、
 盡屬陰陽造化功、

(後編卷之五畢)

忠臣水滸傳終

假名手本忠臣藏

竹田出雲
三好松洛
並木千柳

第一

齋有りとといへども食せざれば其味を知らずとは、國治つてよき武士の忠も武勇も隠るゝに、譬へば星
 の晝見えす夜は亂れて顯はるゝ、例を爰に假名書の「太平の代の政、頃は曆應元年二月下旬、
 足利將軍尊氏公、新田義貞を討亡し、京都に御所を構へ徳風四方に普く、萬民草の如くにて靡き従ふ御
 威勢、國に羽を伸す鶴が岡八幡宮御造營成就し、御代參として御舍弟足利左兵衛督直義公、鎌倉に下着
 なりければ、在鎌倉の執事高武藏守師直、御膝元に見下す權柄眼、御馳走の役人は、桃井播磨守が弟
 若狹助安近、伯州の城主鹽治判官高定、馬場先に幕打廻し、威儀を正して相詰むる、直義仰出さるゝは、
 いかにか師直、「此唐櫃に入れ置きしは、兄尊氏に亡されし新田義貞、後醍醐の天皇より給はつて着せし
 兜、敵ながらも義貞は清和源氏の嫡流、着捨の兜といひながら、其儘にも打置かれず、當社の御蔵に納め
 る條其心得有るべしとの嚴命なりと宣へば、武藏守承り、「是は思ひも寄らざる御事、新田が清和の

假名手本忠臣藏

六五九

末なりとて着せし兜を尊敬せば、御旗下の大小名清和源氏はいくらも有る、奉納の儀然るべからず候と、遠慮なく言上す 詞「イヤ左様にては候まじ、此若狭助が存するは、是は全く尊氏公の御計略、新田に徒黨の討洩され御仁徳を感心し、攻めずして降参さする御方便と存じ奉れば、無用との御評議率爾なりと、言はせも果てず 詞「イヤア師直に向つて率爾とは出過ぎたり、義貞討死したる時は大わらは、死骸の傍に落散つたる兜の数は四十七、何れがどう共見しらぬ兜、左様で有らうと思ふのを、奉納した其跡でさうでなければ大きな恥、生若輩な形をしてお尋もなき評議、すつこんで御居やれと御前好きま、出る儘に、杖共思はぬ詞の大槌、打込まれて急立つ色目、鹽治引取つて 詞「コハ御尤なる御評議ながら、桃井殿の申さるゝも治る代の軍法、是以て捨てられず雙方全き直義公の、御賢慮仰ぎ奉ると、申上ぐれば御機嫌有り 詞「ホ、左言はんと思ひし故、所存有つて鹽治が婦妻を召連れよと言付けし、是へ招けと有りければ、はつと答の程もなく、馬場の白砂跳徒にて裾で庭掃く襦袢は、神の御前の玉箒、玉も歎く薄化粧、鹽治が妻のかほよ御前遙下つて畏る、女好の師直其儘聲懸け 詞「鹽治殿の御内室かほよ殿、最前よりさぞ待遠御太儀、御前の御召近うくと取持顔、直義御覽じ 詞「召出す事外ならず、往元弘の亂に、後醍醐帝都にて召されし兜を、義貞に給はつたれば、最期の時に着つらん事疑はなけれ共、其兜を誰有つて見驗る人外になし、其頃は鹽治が妻、十二の内侍の其内にて、兵庫司の女官なりと聞及ぶ、無見知あらんす、覺あらば兜の本阿彌、目利くと女には、嚴命さへも和らかに、御受申すもまた婿か詞「冥加に餘る君の仰、夫こそは私が、明暮手馴れし御着の兜、義貞殿拜領にて、蘭奢待といふ名香を添へて給はる、御取次、則ちかほよ、其時の勅答には、人は一代名は末代、すは討死せん時、此蘭奢待を思

ふ處、内兜に姓古め着るならに、鬘の髪に香を留めて、名香薫る首取りしといふ者あらば、義貞が最期と思召されよとの、詞はよもや違ふまじと申上げたる口元に、下心有る師直は、小鼻いからし聞き居たる、直義委しく問召し 詞「オ、詳なるかほよが返答、左あらんと思ひし故、落散つたる兜四十七、此唐櫃に入置いたり、見分させよと御上意の下侍、屈むる腰の海老鏡を、明ける間遅しと取出すを、怖めす臆せず立寄つて、見れば所も、名にし負ふ、鎌倉山の星兜、とつばい頭獅子頭、さて指物は家々の、流義流義によるぞかし、或は直平筋兜、鍔のなきは、弓の爲、其主々の好として、数々多き其内にも、五枚兜の龍頭、是ぞと言はぬ其内に、はつと薫りし名香は、かほよが馴れし義貞の兜にて御座候と指出せば、左様ならめと一決し、鹽治桃井兩人は、寶藏に納むべし此方へ來れと御座を立つ、かほよに御暇賜はりて段かつらを過ぎ給へば、鹽治桃井兩人も打連れてこそ入りにつれ、跡にかほよはつきまなく、師直様は今暫し、御苦勞ながら御役目を、御仕舞有つてお靜に 詞「御暇の出た此かほよ、長居は恐れおさらばと、立上る袖摺寄つてじつと控へ 詞「コレまあお待ち待ち給へ、今日の御用仕舞次第、其許へ推参して御目に掛ける物が有る、幸の好所、召出された直義公は我爲の結ぶの神、御存じの如く我等歌道に心を寄せ、吉田の兼好を師範と頼み日々の状態、其許へ届けくれよと問合の此書状、いかにもとの御返事は、口上でも苦しいない、杖から杖へ入る、結び文、顔に似合はぬ様參る武蔵鍔と書いたるを、見るよりはつと思へども、はしたなう恥しめては却て夫の名の出る事、持歸つて夫に見せうか、いやく夫では鹽治殿、憎しと思ふ心から怪我過にもならうかと、物をも言はず投返す、人に見せじと手に取上げ 詞「戻すさへ手に觸れたりと思ふにぞ、我文ながら捨も置かれず、くどうは云はぬ、好返事聞くまでは、口説いてく口説抜く、

方は御口上受取り、殿へ其通り申上げられよ、御使者は力彌、娘小浪と言號の聲殿、御馳走申しやれ、先奥方へ御對面と言捨て「一間に入りける、となせは娘を傍近くなう小浪、一父様の堅くろしいは常なれど、今仰しやつた御口上、請取役は其方にと有りそな所を、となせにとは、母が心とは甚い違、其許も又力彌殿の顔も見たかる、逢ひたかる、母に代つて出向やや、いやか〜と問返せば、あいとも否とも返答は、根らむ顔のおぼこさよ、母は娘の心を汲み、アイタ、娘背を押して給も、是は何と遊ばせしと狼狽へ騒げばイヤ喃、一今朝からの心遣ひ又持病の癪が指込んだ、是ではどうも御使者に逢はれぬ、アイタ、娘、太儀ながら御口上も請取り、御馳走も申して給も、御主と持病には勝たれぬ〜と徐々と立上り、一娘や随分御馳走申しやや、したがり馳走過ぎ、大事の口上忘れまいぞ、私も聲殿にアイタタ逢ひたからうの奥様は、氣を通してぞ奥へ行く、小浪は御跡伏拜み〜、一忝い母様、日頃戀し床しい力彌様、逢はば左言を右言をと、娘心の悸々と、胸に小浪を打寄する、疊さほりも故實を糺し入來る大星力彌、また十七の角髪や、二つ巴の定紋に大小、立派爽に、道大星由良之助が子息と見えし其器量、徐々と座に直り、一たそ御取次頼み奉ると感慙に相違ぶる、小浪ははつと手を突へ、確と見交す顔と顔、互の胸に戀人と、物も得言はぬ赤面は、梅と櫻の花相撲に枕の行司なかりけり、小浪漸胸押鎮め「是は〜御苦勞千萬に能こそ御出で、只今の御口上請取役は私、御口上の趣を、御前の口から私口へ、直に仰しやつて下さりませと摺寄れば身を扣へ、一ハア是は〜不作法千萬、惣じて口上請取渡しは、行儀作法第一と、疊を下り手を突へ、一主人鹽治判官より若狭助様への御口上、明日は管領直義公へ未明より相詰申す筈の所、定めて御客人も早々に御出あらん、然れば判官若狭助兩人は、正七

ツ時に急度御前へ相詰めよと御直様より御仰、萬事間違のなき様に今一應御使者に參れと、主人判官申付け候、故右の仕合、此通り若狭助様へ御申上げ下さるべしと、水を流せる口上に、小浪は空然顔見とれ、左右應もなかりけり、オ、聞いた〜使太儀と若狭助、一間より立出で、一昨日御別れ申してより、判官殿間違うて御目にかゝらず、成程正七ツ時に貴意得奉らん、委細承知仕る、判官殿にも御苦勞千萬と、宜しく申傳へて呉れられよ、御使者太儀、然らば御暇申上げん、ナニ御取次の女中御苦勞と、徐々立つて見向もせず衣紋繕ひ立歸る、本藏一間より立代り、一ハア殿是に御入、彌明朝は、正七ツ時に御登城御苦勞千萬、今宵も早九ツ、暫く御間遊ばされよ、成程〜、イヤ何本藏、其方に些用事あり密々の事、小娘を奥へ〜、ハアコリヤ〜娘、用事あらば手を拍たう奥へ〜と娘を追遣り、合點の行かぬ主人の顔色と、御傍へ立寄り、一先程より御伺ひ申さんと存せし所、委細具に御仰せ下さるべしと指寄れば蹴寄り、一本藏今此若狭助が言出す一言、何に寄らず、畏り奉ると二言と返さぬ誓言聞かういハア是は〜改つた御詞、畏り入り奉るでは御座れども、武士の誓言は、ならぬと言ふのかい、イヤ左にあらず、先委細篤と承り、子細を言はせ跡で意見か、イヤ夫は、詞を背くか、サア何と、ハツはつと計さし俯き、暫時詞なかりしが、胸を極めて指添抜き、片手に刀拔出し、ちやう〜と金打ちし、一本藏が心底斯の通り、止めも致さず他言もせぬ、先思召の一通御急きなされすと、本藏めが胃の腑に、落付く様にとツくりと承、らんと相述る、ム、一通語つて聞せん、此度管領足利左兵衛督直義公、鶴が岡造營故、此鎌倉へ御下向、御馳走の役は鹽治判官、某兩人承る所に、尊氏將軍よりの仰にて、高師直を御添人、萬事彼が下知に任せ御馳走申上げよ、年配と言ひ諸事物馴れたる侍と、御意に随ひ勝に

乗つて日頃の我儘十倍増、都の諸武士並居る中、若年の某を見込み雑言過言異二つにと思へ共、御上の仰を憚り、堪忍の胸を抑へしは幾度、明日は最早了簡ならず、御前にて恥面か、せる武士の意地、其上にて討つて捨る必ず留めるな、日頃某を短慮なりと奥を始め其方が意見、幾度か胸にとつくと合點なれども、無念重なる武士の性根、家の断絶奥が歎、思はんにては無けれども、刀の役目弓矢神への恐れ、戦場にて討死はせず共、師直一人討つて捨れば天下の爲、家の恥辱には替られぬ、必ず短氣故に身を果す若狭助、猪武者よ狼狽者と、世の人口を思ふ故、汝に篤と打明かすと、思込んだる無念の涙、五臟を貫く思なる、横手を拍つてしたり、
 詞「ム、能う譯を仰しやつた、能う御了簡成された、此本藏なら今迄了簡はならぬ所、ヤイ本藏ナ、何と言つた、今迄は能う了簡した堪忍したとは、其方此若狭助を弄するか、是は御詞とも覺えず、冬は日陰夏は日陽、除けて通れば門中にて、行違の喧嘩口論ないと申すは町人の癖、武士の家では杓子定規、除けて通せば法度がないと申すのが本藏めが誤か、御詞さみ致さぬ心底、御覽に入れんと御傍の、小刀抜くより早く書院なる、召替草履片足片手の早ねた及、とつくと合せ縁先の松の若枝、すつぱと切つて手敏捷、鞆に納め、
 詞「サア殿、先此通に瀟洒と遊ばせ遊ばせ、言ふにや及ぶ、人や聞くと邊に氣を付け、今夜はまだ九つくつたりと一休、枕時計の目覺し本藏めが仕掛け置く早く、
 詞「オ、聞入有つて満足せり、奥にも逢うて餘所ながらの暇乞、モウ逢はぬぞよ本藏、さらば」と言捨て、奥の一間に入給ふ、武士の意氣地は是非もなし、御後影見送り、勝手口へ走出で、
 詞「本藏が家來共馬牽け早くと言ふ間もなく、股立しやんと凛々しげに御庭に牽出せば、縁より閃と打乗つて師直の館迄、繼げや續けと乗出す、
 詞「辨に繼つてとなせ小浪コレ何處へ、始終の様子は

聞きました年にこそ由れ本藏殿、主人に御意見も申さず、合點が行かぬ留めますと、母と娘がぶらぶら、
 辨に繼り留むれば、
 詞「ヤア小煮出た、主人の御命御家の爲を思ふ故に此時宜、必ず此事殿へ御沙汰致すな、御耳へ入れたら娘は勘當、となせは夫婦の縁を切る、家來共道にて諸事を言付けん、其處退け兩人、イヤイヤ、シャ面倒なと鏡の端、一當はツしと當てられて、うんと計に仰向に反るを見向もせず、家來續けと馬煙追立て打立て力足踏立て、こそ
 三重「驅り行く。

第三

足利左兵衛督直義公、關八州の管領と新に建てし御殿の結構、大名小名美麗を飾る時裝束、鎌倉山の星月夜と袖を列ぬる御馳走に、御能役者は裏門口、表御門は御客人御饗應の役人衆、正七ツ時の御登城武家の、威光ぞ耀きける、西の御門の見附の方、ハイ、と嚴然、挑燈照し入来るは、武藏守高師直、權威を顯はす鼻高々、花色模様の大紋に、胸に我慢の立烏帽子、家來共を役所、に殘し置き、下部僅に先を拂はせ、主の威光の召おろし、鶴の眞似する懸坂内、肩背嚴らし申し御旦那、
 詞「今日の御前表も上首尾、鹽治で候の、イヤ桃井で候のと、日頃は咄は嗟つばと迷騰けど、行儀作法は狗を、家根へ上げた様で、さりととは、腹の皮、イヤ夫に付き兼々鹽治が妻かほよ御前、未だ殿へ御返事致さぬ由、御氣にはさへられぬ、嫖致は好けれど氣が叶はぬ、何の鹽治輩と、當時出頭師直様と、イヤ、聲高に口利くな、主あるかほよ、度々歌の師範に托せ、口説けども今に叶へぬ、則ち彼が召使かるといふ侍婢新參と聞き、其奴をこま付け頼んで見ん、扱またとりえがある、かほよが誠に否ならば、夫鹽治に仔細を

じよかな、イヤ〜夫程にも御座らぬ、然らば少の間御寛ぎ、御前の首尾は我等が宜い様に申上ぐる、仲内一間へ御供申せと、主従寄つて御籠に迷惑ながら若狭助、是はと思へど是非なくも奥の一間へ入りければ、ア、最う樂じやと本蔵は、天を拜し地を拜し御次の間にぞ控居る、程もあらず鹽治判官、御前へ通る長廊下、師直呼びかけ遅し〜 詞「何と心得て御座る、今日は正七ツ時と、先刻から申渡したでないか、成程遅なほりしは不調法去ながら、御前へ出るは未だ間もあらんと、袂より文箱取出し 詞「最前手前の家來が、貴公へ御渡し申しくれよ、則ち奥かほよ方より参りしと、渡せば請取り成程〜 詞「イヤ其許の御内室は扱々心懸か御座るは、手前が和歌の道に心を寄するを聞き、添削を頼むと有る、定めて其事ならんと押披き 詞「さなきだに、おもきが上のさよ衣、わがつまならぬつまな重ねそ、ハア是は新古今の歌、此古歌に添削とは、ム、〜と思案の内、我戀の叶はぬ驗、扱は夫に打明けしと思ふ怒を左あらぬ顔 詞「判官殿、此歌御覽じたて御座らう、イヤ只今見ました、ム、手前が讀むのを、ア、貴殿の奥方はきつい貞女でござる、ちよつと遣はさる、歌が是じや、つまならぬつまな重ねそ、ア、貞女〜、ア其許はあやかり物、登城も遅なほる筈の事、内に計りへばり付いて御座るに依て、御前の方は御構ひないじやと、當てこする雑言過言、彼許の喧嘩の門迷とは、判官更に合點行かす、むつとせしが押鎖め 詞「ハ、〜〜〜是は是は、師直殿には御酒機嫌か、御酒参つたの、何時盛らしやツた、イヤ何時呑みました、御酒下されても呑まいでも、勤める所は急度勤める、貴公は何故遅かつたの、御酒参つたか、イヤ内にへばり付いてござつたか、貴殿より若狭助殿、ア、格別勤められます、イヤ又其許の奥方は貞女といひ、御容色と申し、手跡は見事、御自慢なされ、むつと成されな虚言はないはさ、今日御前には御取込、手前とても同然、其中へ鼻毛

らしい、イヤ是は手前が奥が歌でござる、夫程内が大切なら御出御無用、總體貴様の様な、内に計り居る者を、井戸の鮎じやと言ふ譬がある、聞いて置かしやれ、彼鮎めが僅三尺か四尺の井の内を、天にも地にも無い様に思つて、不斷外を見る事がない、所に彼井戸邊に釣瓶に付いて上ります、夫を川へ放し遣ると、何が内にはかり居る奴じやに依て、悦んで途を失ひ、橋杭で鼻を打つて、即座にびり〜〜と死ます、貴様も恰好鮎と同じ事、ハ、〜〜と出放題、判官腹に据る兼ね 詞「是りや其許狂氣召さつたか、イヤ氣が違ふたか師直、シヤ此奴、武士を執へて氣違とは、出頭第一の高師直、ム、すりや今の悪言は本性よない〜と、又本性なりや如何する、オ、斯様すると拔撃に、眞向へ切付くる眉間の大傷、是はと沈む身のかはし、烏帽子の頭二ツに切れ、又切懸るを脱けつ潜りつ逃廻る折もあれ、御次に控へし本蔵走出で、押留め 詞「コレ判官様御短慮と、抱留むる其隙に師直は、館を指して駆けつ轉びつ逃行けば、己師直直二ツ、放せ本蔵放しやれと迫合ふ内、館も俄に騒出し、家中の諸武士大名小名、押へて刀もぎ取るやら、師直を介抱やら上を下へと 三重「立騒ぐ、表御門裏御門、兩方打つたる館の騒動、挑燈閃く大噪ぎ、早野勘平狼狽眼走歸つて裏御門、碎けよ破れよと叩き大聲上げ 詞「鹽治判官の御内早野勘平主人の安否心元なし爰明けて給べ、早く〜と呼はつたり、門内よりも聲高々 詞「御用あらば表へ廻れ爰は裏門、成程裏門合點、表御門は家中の大勢早馬にて寄付かれず、喧嘩の様子は何と〜、喧嘩の次第相濟んだ、出頭の師直様へ慮外致せし料に依て、鹽治判官は閉門仰付けられ、網乗物にて只今歸られしと聞くより、ハア南無三寶、御屋敷へと走係つて、イヤ〜、閉門ならば館へは猶歸られしと行きつ、戻りつ思案最中、必おかる道にてはぐれ、ヤア勘平殿 詞「様子は残らず聞きました、こりや何

とせう如何せうと取付き、歎くを取つて突退け 詞「エ、めろく」と吹顔、コリヤ勘平が武士は捨つたはや
 い、最う是迄と刀の柄、コレ待つて下され 詞「是りや狼狽てか勘平殿、オ、うろたへた、是が狼狽ずに居
 られうか、主人一生懸命の場にも在合さず剩へ、囚人同然の綱乗物御屋敷は閉門、其家來は色に耽り御
 供に外れしと人中へ、兩腰指して出られうか爰を放せ、マ、マ、待つて下さんせ、尤じや道理じやが、其
 狼狽武士には誰が仕た、皆わしが心から、死ぬる道ならお前より私が先へ死なねばならぬ、今お前が死
 んだらば誰が侍じやと譽めまする、爰をとつくりと聞分けて、わたしが親里へ一先來て來さんせ、父様
 も母様も在所でこそ有れ頼母いお人、最う斯成つた因果じやと思つて女房の言ふ事も、聞いて下され勘平
 殿とわつと計に、泣沈む 詞「さうじや、尤、其方は新參なれば委細の事は得知るまい、御家の執權大星山良
 之助殿、未だ本國より歸られず、歸國を待つて御詫せん、サア一時なりとも急がんと身拵する所へ、鷲
 坂伴内家來引連れ驅出で 詞「ヤア勘平汝が主人判官師直様へ慮外を働き、かすり疵負せし科に依て屋敷
 は閉門、追付首が飛ぶは知れた事、サア腕廻せ連蹄つてなぶり切、覺悟ひろげと犇けば 詞「ヤア宜い所
 へ鷲坂伴内、己一羽で喰足らねど、勘平が腕の細ねぶか、料理鹽梅喰うて見よ、イヤ物な言はずな家來ど
 も、畏つたと兩方より、捕つたと係るを、まつかせと掻潜り、兩手に兩腕捻上げはッし」と蹴返
 せば、代つて切迄む切先を刀の鞘にて丁と受け、廻つて來るを踏と柄にて仰向に外し、四人一所に切係
 るを右と左へ一時に、でんがく返しにばた」と打据ゑられ、皆散々に行く跡へ、伴内燥つて切りか
 ぐる引外しそつ首握り、大地へどうど筋斗打せしツかと踏付け 詞「サア何うせうと此方の盛、突かうか切ら
 うか蹴殺しと振上げる刀に縋つて 詞「コレ」其奴殺すと御詫の邪魔、最う宜いわいなと、留める間に足の

下をば狗鼠くと、尻に尾のない鷲坂は、命辛々逃げて行く、エ、残念く去ながら、彼奴をばらさば不
 忠の不忠、一先夫婦が身を隠し、時節を待つて願うて見ん、最早明六ツ東がしらむ横雲に、時を離れ飛ぶ
 鶉、かはいくの女夫連、道は急げど跡へ引く、主人の御身いかぞと、案じ行くこそ 三取「浮世なれ。

第四

鹽治判官閉居によつて扇が谷の上屋敷、大竹にて門戸を閉ぢ、家中の外は出入を止め、事嚴重に見えにけ
 る、斯る折にも、華やかに奥は、媚めく女中の遊、御臺所かほよ御前、御傍には大星力彌、殿の御氣を慰
 めんと、鎌倉山の八重九重、色々櫻、花籠に、活けらるゝ花よりも、生ける人こそ花紅葉、柳の間の廊下
 を傳ひ、諸士頭原郷右衛門、跡に續いて斧九太夫、一是は力彌殿早い御出仕、イヤ某も國元より親
 共が參る迄、晝夜相詰罷在る、それは御奇特千萬と、郷右衛門兩手をつき 詞「今日殿の御機嫌は、如何御
 渡り遊ばさるゝと、申上ぐればかほよ御前 詞「オ、二人共太儀、此度は判官様御氣詰りに思召し、
 御所勞でも出やうかと案じたとは格別、明暮、築山の花盛御覽じて、御機嫌の能い御顔ばせ、夫故に自
 も御慰に差上げうと、名有る櫻を取寄せて見遣る通の花拵へ 詞「ア、いか様にも仰の通、花は開く
 物なれば御門も開き、閉門を御赦さるゝ、吉事の御趣向、拙者も何がなと存すれど、個様な事の思付は、不
 調法なる郷右衛門、ヤア肝心の事申上げん、今日御上使の御出と承りしが、定めて殿の御閉門を御赦
 さるゝ、御上使ならん、何と九太夫殿、さうは思召されぬか、ハ、ハ、ハ、コレ郷右衛門殿、此花といふ物も、
 當分人の目を喜ばす許り、風が吹けば散失せる、此方の詞も先づ其ごとく、人の心を喜ばさうとて、武

士に似合はぬ、ぬらりくらりと跡から元る正月、詞、なせとおいやれ、此度殿の御越度は、響應の御役儀を蒙りながら、執事たる人に手を負せ、館を騒がせし科、輕うて流罪、重うて切腹、自體又師直公に、敵對ふは殿の御不覺と、聞きも敢へず郷右衛門、一扱は其方、殿の流罪切腹を願はる、か、イヤ願ひは致さねど、詞を飜らす眞實を申すのじや、元をいへば郷右衛門殿、此方の格齋しわざから發つた事、金銀を以て頬を打ちめさるれば、個様の事は出来まうさぬと、己が心に引當て、欲面打消す郷右衛門、一人に媚諂ふは侍でない、武士でない、喃力彌殿、何とさうでは有るまいかと、詞の角を宥むる御臺、二人共に争無用、今度夫の御難儀なさる、元の發は此かほよ、日外鶴が岡で響應の折柄、道しらすの師直、主の有る自に無體な戀を言掛け、種々と口説きしが、恥を與へ懲らせんと、判官様にも知らさず、歌の點に事寄せ、さよ衣の歌を書き恥しめて遣つたれば、戀の叶はぬ意趣ばらしに判官様に悪口、元來短氣な御生付、得堪忍なされぬは、御道理でないかいのと、語り給へば郷右衛門、力彌も俱に御主君の、御憤を察し入り、心外面に顯はせり、早御上使の御出と、玄關廣間ひしめければ、奥へ斯と通じさせ、御臺所も座をさがり、三人出向ふ間もなく、入來る上使は石堂右馬之丞、師直が尻近樂師寺次郎左衛門、役目なれば罷通ると會釋もなく、上座に着けば、一間の内より鹽治判官、徐々と立出で、是は、御上使と有つて石堂殿御苦勞千萬、先御盃の用意せよ、御上使の趣、承り、いづれもと一献酌み、積徳をはらし申さん、「オ、それ宜うござろ、樂師寺も御對致さう、したが上意を聞かれたら、酒も喉へ通るまいと、嘲笑へば右馬之丞、我々今日、上使に立つたる其趣、具に承知せられよと、懷中より御書取出し、押開けば判官も席を改め、承る、其文言、此度鹽治判官高定、私の宿意を以て、執事高師直

を及傷に及び、館を騒がせし科に依て、國師を沒收し、切腹申付くる者也、聞くよりはツと驚く御臺、並居る諸士も顔見合せ、あきれ果てたる計なり、判官動する氣色もなく、御上意の趣委細承知仕る、扱是からは、各の御苦勞休めに、うち寛いで御酒一ツ、コレ、判官賦止召され、其方が今度の科は、縛首にも及ぶべき處、御上の慈悲を以て、切腹仰付けらる、を有りがたう思ひ、早速用意もすべき筈、殊に以て切腹には定まつた法の有るもの、夫に何ぞや、當世様の長羽織、ぞべらくとしらるるは、酒興もせず血迷ひもせぬ、今日上使と聞くよりも、斯あらんと期したる故、兼ての覺悟見すべしと、大小羽織を脱捨つれば、下には用意の白小袖、無紋の上下死装束、皆々是はと驚けば、樂師寺は言句も出ず、顔膨らして閉口す、右馬之丞指寄つて、御心底察し入る、則ち拙者檢使の役、心靜に御覺悟、ア、御深切忝なし、刃傷に及びしより、斯あらんとは兼ての覺悟、恨むらくは館にて、加古川木藏に抱留められ、師直を討渡し、無念骨髄に徹つて忘れがたし、淡川にて楠正成、最期の一念に依て生を延くと言ひしごとく、生交り死替り、體憤を晴さんと、怒の聲と諸共に、御次の換打叩き、一家中の者共、殿の御存生に御尊顔を拜し度き願、御前へ推參致さんや、郷右衛門殿御取次と、家中の聲々聞ゆれば、郷右衛門御前に向ひ、「いか、計らひ候はん、フム、尤なる願なれ共、由良之助が參る迄無用、はツと計一間に向ひ、聞かる、通の御意なれば、一人も叶はぬ、諸士は返す詞もなく、一間も寂と、靜まりける、力彌御意を承り、兼て用意の腹切刀御前に直すれば、心靜に肩衣取退け座を寛げ、コレ、御檢使、御見届け下さるべしと、三方引寄せ九寸五分押戴き、力彌、力彌、ハア、由良之助は、未だ參上

仕りませぬ、フム、エ、存生に對面せで残念、ハテ残り多やな、是非に及ばぬ是までと、刀逆手に取直し、左手に突立て引廻す、御臺二目と見も遣らず、口に稱名目に涙、廊下の換路開き、驅込む大星山良之助、主君の有様見るよりも、はッと計りにどうと伏す、跡に續いて千崎矢間、其外の一家中、ばらばらと驅入つたり、「ヤレ山良之助待兼ねたはやい、バア御存生の御尊顔を拜し、身に取つて何程か、オ、我も満足満足、定めて子細聞いたである、エ、無念、口惜しいはやい、委細承知仕る、此期に及び、申上ぐる詞もなし、只御最期の尋常を、願はしう存じまする、オ、言ふにや及ぶと兩手を懸け、ぐツツと引廻し、苦しき息をほつと吐き、「山良之助、此九寸五分は汝へ遺物、我鬱憤を晴させよと、切先にて氣管切切り、血刀投出し空伏に、どうと轉び息絶ゆれば、御臺を始め列居る家中、眼を閉ち息を詰め、齒を切ばり控ゆれば、由良之助にじり寄り、刀取上げ押藏き、血に染まる切先を打守り、拳を握り、無念の涙はらはら、判官の末期の一句、五臟六腑に染渡り、扱こそ末世に大星が、忠臣義心の名を揚げし、根ざしは斯としられけり、藥師寺は突立ち上り、「判官がくたばるからは早々屋敷を明渡せ、イヤ左は言はれな薬師寺、所謂一國一城の主、ヤ方々、葬送の儀式取附ひ、心靜に立退かれよ、此石堂は檢使の役目、切腹を見届けたれば、此旨を言上せん、ナニ由良之助殿、御愁傷察し入る、用事あらば承らん必ず心置かれなと、列居る諸士に目禮し、悠々として立歸る、「此藥師寺も死骸片付ける其間、奥の間で休息せう、家來參れと呼出し、「家中共ががらくた道具門前へほうり出せ、判官が所持の道具、俄浪人にまげられなと、館の四方を睨廻し、一間の内へ入りにける、御臺はわツと聲を揚げ、扱もく武士の身の上程悲しい物の有るべきか、今夫の御最期に、言ひたい事は山々なれど、未練なと御上使のさげしみが恥かし

さに、今まで堪へて居たわいの、最愛の有様やと、亡骸に抱付き、前後も分かす泣給ふ、「力附參れ、御臺所諸共亡君の御骸を、御菩提所光明寺へ早々送り奉れ、由良之助も跡より追付き、葬送の儀式執行はん、堀、矢間、小寺、間、其外一家中、道の警固いたされよと、詞の下より御乗物、手舁に昇きすゑ戸を開き、皆立寄つて、御死骸涙と俱に、載せ奉りしづくと昇上ぐれば、御臺所は正體なく、歎き給ふを慰めて、諸士の面々我一と、御乗物に引添ひ引添ひ、御菩提所へと急行く、人々御骸見送りて、座に着けば斧九太夫、「何大星殿、其許は御親父八幡六郎殿よりの家老職、拙者逆も其右には座せ共、今日より浪人となり、妻子を養育む術なし、殿の貯置き給ふ御川金を配分し、早く屋敷を渡さすば、藥師寺殿へ無禮ならん、イヤ千崎が存するには、指す敵の高師直、存命なるが我々が憎恨、討手を引受け、此館を枕として、ア、これく討死とは悪い了簡、親九太夫の申さる、通り屋敷を渡し、金銀を分けて取るが上分別と、評議の中に山良之助、默然として居たりしが、「只今の評定に、彌五郎の所存と、我が胸中一致せり、所謂亡君の御爲に、我々殉死すべき筈、むざくと腹切らうより、足利の討手を待受け、討死と一決せり、ヤア何と言はる、能い評定かと思へば、浪人の瘦我を張り、足利殿に弓引かう、ア、夫は無分別、マア此九太夫合點がいかぬ、オ、親父殿さうじや、此定九郎も其意を得ぬ、此談合には省いて貰はう、長居は無益お歸りなされ、「夫宜かる、孰れも緩りと居召されと、親子打連れ立歸る、ヤア欲面の斧親子、討死を聞怖して逃歸つたる臆病者、彼奴構はずと大星殿、討手を待つ御用意、ア、さわがれな彌五郎、足利殿に何恨有つて可引くべき、彼等親子が心底を探らん爲の計、藥師寺に屋敷を渡し、思ひくに當所を立退き、都山科にて再會し、胸中残さず打明けて、評議を占めんといふ間もあら

せず、次郎左衛門一間を立出で 詞「ハテ、べんぐ」と長詮議、死骸片付けたら、早く屋敷を明渡せと、い
がみ掛れば御右衛門 詞「ア、成程お待ち兼ね、亡君所持の御道具、其外の武器馬具迄よく、改め請取られ
よ、サア由良之助殿退散あれ、オ、心得たりとしづく」と立上り 詞「御先祖代々、我々も代々、晝夜詰め
たる館の内、今日を限と思ふにぞ、名残惜氣に見返り、御門外へ立出づれば、御骸送り奉り、
力彌、矢間、堀、小寺追々に馳歸り 詞「扱は屋敷を御渡し有つたか、此上は直義の、討手を引受け討死せんと、
はやり立てば由良之助 詞「イヤ、今死すべき所にあらず、是を見よ方々と、亡君の御遺物を抜放し 詞「此
鋒には、我君の御血をあやし、御無念の魂を残されし九寸五分、此刀にて師直が、首掻切つて本意を
遂げん、實に尤と諸武士の勇、屋敷の内には薬師寺次郎、門の關拔はッしと閉てさせ 詞「師直公の罰が
當り、扱よいざま〜と、家來一度に手を叩き、咄と笑ふ鯨波、アレ聞かれよと若侍、取つて返すを由
良之助 詞「先君の御憤晴さんと思ふ所存はないか、はッと一度に立出でしが、思へば無念と館の内を、
振返り、はッたと睨んで 三重 詞「立出づる。

第五

鷹は死しても穂は摘まずと、譬に洩れず入る月や、日敷も積る山崎の、邊に近き住居、早野勘平若氣の
誤、世渡るもとで細波傳ひ、此山中の麻猿を、打つて商ふ種が島も、用意に持つや袂まで、鐵砲雨の煙
動雷電、誰が水無月と白雨の、晴間を爰に松の蔭、向より來る小挑灯、是も昔は弓張の、燈火消さじ滯さ
じと、合羽の裾に大雨を、凌ぎて急ぐ夜の道 詞「イヤ申し、卒爾ながら火を一ツ御無心と立寄れば、旅

人もちやくと身構し 詞「ム、此街道は無用心と、知つて合點の一人旅、見れば飛道具の一口、商、得こそは
貸さじ出直せと、恠と動かば一討と、眼を配れば 詞「イヤ成程、盜賊とのお目違ひ御尤千萬、我等は此
邊の獵人なるが、先程の大雨に火口も濡り難儀至極、サア鐵砲夫へお渡し申す、自身に火を付け御貸しと、
他事なき詞顔付を、急度眺めて 詞「和殿は早野勘平ならずや、さいふ貴殿は千崎彌五郎、是は堅固で御無
事でと、絶えて久敷對面に、主人の御家没落の、胸に忘れぬ無念の思、互に拳を握合ふ、勘平は指し俯
向き、暫し詞もなかりしが 詞「エ、面目もなき我身の上、古朋輩の貴殿にも、顔も得上げぬ此仕合、武士
の冥加に盡きたるか 詞「殿判官公の御供先、御家の大事發りしは是非に及ばぬ、我不運、其場にも有合せ
す、御屋敷へは歸られず、所詮時節を待つて御詫と、思ひの外の御切腹南無三寶、皆師直めがなす業、せめ
て冥途の御供と、刀に手は懸けたれど、何を手柄に御供と、どの顔さげて言譯せんと、心を碎く折から
詞「密に様子を承れば、由良之助殿御親子郷右衛門殿を始として、故殿の憤憤散せん爲、寄々の思召
立有りと、我等とても御勘當の身といふでもなし、手係り求め由良之助殿に對面遂げ、御企の連判
に御加へ下さらば、生々世々の面目、貴殿に逢ふも優曇華の、花を咲かせて侍の、一分立て、給はれか
し、古傍輩の好武士の情、御頼み申すと兩手をつき、先非を悔いし男泣、理せめて不便なる、彌五郎
も傍輩の悔道理と思へども、大事をむざと明さじと 詞「コレサ、勘平、はて扱、お手前は身の言譯に取
雜せて、御企のイヤ連判など、は何の謔言、左様の噂會てなし、某は由良之助殿より郷右衛門殿へ急
の使、先君の御廟所へ、御石碑を建立せんととの催し、併し我々迎も浪人の身の上、是こそ鹽治判官殿の
御石塔と、末の世までも人の口の端に係る物ゆゑ、御用金を集むる其御使、先君の御恩を思ふ人を撰出す

爲、態と大事を明されず、先君の御恩を思はゞ、ナ、合點か〜と、石碑に擬へ大星の、謀を餘所に知らせしは、實に傍輩の好なり 詞「ハア、忝い彌五郎殿、成程石碑と言立て、御川金の御拵ある事、とつくに承り及び、某も何とぞして用金を調へ、それを力に御託と心は千々に砕けども、彌五郎殿、恥かしや主人の御罰、今此形容、誰に斯との便もなし、され共かるが親、與市兵衛と申すは頼母しい百姓、我々夫婦が判官公へ、不奉公を悔み歎き、何とぞして元の武士に立返れと、爺媼共に歎き悲む、これ幸ひ御邊に逢ひし物語、段々の子細を語り、元の武士に立返ると言明さば、僅の田地も我子の爲、何しに否は得も言はじ、御川金の手係りに、郷右衛門殿まで御取次、一入頼み存すると、餘儀なき詞に、ム、成程 詞「然らば是より郷右衛門殿迄、右の譯をも咄し、山良之助殿へ願うて見ん、明々日は必ず急度御返事、則ち郷右衛門殿の旅宿の所書と、渡せば取つて押戴き、重々の御世話、忝し 詞「何とぞ急に御川金を拵へ、明々日御目に係らん、某が在家お尋あらば、此山崎の渡場を左へ取り、與市兵衛とお尋あれば、早速相知れ申すべし、夜更けぬ内に早くも御出で、コレ此行先は猶物騒、随分ぬかるな合點、石碑成就する迄は、蚤にも噛さぬ此體、御邊も堅固で、御川金の便を待つぞ、さらば〜と兩方へ立別れてぞ急ぎ行く、又も降来る雨の足、人の足管とぼ〜と、道は開路に迷はねど、子故の關につく杖も、直なる心堅親仁、一筋道の後から 詞「オ、イ〜親仁殿、宜い道進と呼ははつて、斧九太夫が紛定九郎、身の置所白浪や、此街道の夜働、だん平物を落指し 詞「往時から呼ぶ聲が、貴様の耳へは這いらぬか、此物騒な街道を能い年をして大膽〜、連に成らうと向へ廻り、きよろ付く眼玉ぞつとせしが道は老人 詞「是は〜お若いに似ぬ御奇特な、私もよい年をして、一人旅はいやなれど、サアいづくの浦でも金程大

切な物はない、去年の年貢に詰り、此中から一家中の在所へ無心に往たれば、是もびたひらな才覺ならず、時の明かぬ所に長居は成らず、す〜一人戻る道と、半分言はさず、ヤイ喧しい 詞「有様が年貢の納まらぬ其相談を聞きには来ぬ、コレ親仁殿、おれが言ふ事篤と聞かしやれや、マア斯じやは、こなたの懐に金なら四五拾兩の高、縞の財布に有るのをとつくりと見付けて来たのじや、貸して下され、男が手を合す、定めて貴様も何ぞ詰らぬ事か、子が難儀に及ぶによつてと云ふ様な、有る格な事じやあろけれど、おれが見込んだらハテしよ事がないと諦めて、貸して下され〜と懐へ手を指入れ、引きすり出す縞の財布、ア、申し夫は 詞「夫はとは、是程爰に有る物と、引つたくる手に纏付き 詞「イエ〜此財布は跡の在所で草鞋買ふ連、端錢を出しましたが、跡に残るは糞食の握飯、糞糞せん様にと娘がくれた和申散、反魂丹でござります、お救しなされ下さりますと、ひつたり先行く先へ立廻り 詞「エ、間分のない、酷い料理するがいやさに、手ぬるう言へば付上る、サア其金爰へ撤出せ、遅いとたつた一討と、二尺八寸拜打、嘯悲しやといふ間もなく、蘆竹割と切付くる、刀の廻りか手の廻りか、はづれる拔身を、兩手にしツかと掴付き 詞「どうでもこなた殺さしやるの、オ、知れた事、金の有るのを見てする仕事、小言吐かずと死ばれと、肝先へ指付くれば 詞「マ、マア待つて下さります、ハア是非に及ばぬ、成程〜、是は金で御座ります、けれ共此金は、私がつた一人の娘がござる、其娘が命にも替へぬ、大事の男がござります、其男の爲に入る金、些譯有る事ゆる浪人して居ます、娘が申しますは、あのお人の浪人も元はわし故、何とぞして元の武士にして進せたい〜と、喉とわしとへ毎夜さ頼み、ア身貧にはござります、どうもしがくの仕様もなく、婆といろ〜談合して、娘にも吞込ませ、聲へは必ず沙汰なしと謀合せ、ほんに〜親

子三人が血の涙の流れる金。夫をお前に取られて娘はなんと成りませう、コレ拜みます助け下されませ、お前もお侍の果さうなが、武士は相身互、此金がなければ、娘も聲も人様に顔が出されぬ、たつた一人の娘に連添ふ聲じやもの、不便にごさる可愛ごさる、了簡してお助けなされて下さりませ、エ、お前は若いによつて未だお子もござるまいが、頓てお子を持つて御覧じませ、親仁が言居つたは尤じやと思召して、此場を助けさしやつて下さりませ、マア一里行けば私在所、金を聲に渡してから殺されませ、申し、娘が悦ぶ顔見ながら死たうござります、コレ申しア、あれ、あれと呼はれど、跡先遠く山彦の、御に哀催せり「オ、悲しい事ぢや、まつととこばへ、ヤイ老め、其金でおれが出世すりや、其恵で己が翁も出世するはやい、人に慈悲すりや悪うは報はぬ、ア、かはいやと、ぐつと突く、うんと手足の七顛八倒、のたくり廻るを脚にて蹴返し「オ、最愛や、痛かるけれどおれに恨はないぞや、金が有りやこそ殺せ、金が無けりや何のいの、金が敵じやいとしばや、南無阿彌陀、南無妙法蓮華經、何方へなりとうせおると、刀も抜かぬ辛さし抉り、草葉も朱に置く露や、年も六十四苦八苦、あへなく息は絶えにけり、仕済したりと件の財布、暗がり耳の掴取「ヒヤ五拾兩、エ、久しぶりの御對面、忝しと首に引繫け死骸を直に谷底へ、勿込み蹴込む泥まぶれ、反は我身にかゝるともしらす立つたる後より、逸散に來る手負猪、是はならぬと身をよぎる、驅來る猪は一文字、木の根岩角踏立て蹴立て、鼻噴らして泥も草木も一捲に飛行けば、あはやと見送る定九郎が、背骨を掛けてどツさりと肋へ抜ける二ツ玉、うん共ぎやつ共言ふ間なく、驚り返りて死したるは心地よくこそ見えにけり、猪打留めしと勘平は、鐵砲提げ爰彼處、探り廻りて扱こそと引立つれば猪にはあらず「ヤア、〜是りや人じや南無三寶、仕損じたりと思へど暗

き眞の闇、誰人なるぞと問はれもせず、まだ息あらんと抱起せば、手に當る金財布、掴んで見れば四五拾兩、天の與と押戴き、猪より先へ逸散に飛ぶがごとくに「急ぎける。

第六

みさき踊がしゆんだる程に、親仁出て見やばんつ、ばんつれて親仁出て見やばんつ、麥かつ音の在郷歌、所も名に負ふ山崎の小百姓、與市兵衛が地生の住家、今は早野勘平が、浪々の身の隠れ里、女房おかるは寝亂れし、髪取上げんと櫛箱の、あかつき掛けて戻らぬ夫、待間も解けし投島田、ゆふにいはいぬ身の上を、誰にか黄楊の水楯に、髪の色艶梳きかへし、品好くしやんと結立てしは、在所に惜しき姿なり、母の齡も杖つきの、野道とぼく立歸り「オ、娘髪結やつたか、美しう能う出來た、イヤもう在所はどこもかも麥秋時分で閑しい、今も數際で若い衆が麥かつ歌に、親仁出て見やばんつれてと唄ふを聞き、親父殿の遅いが氣にかゝり、在口まで往たれど、ようなう影も形も見えぬ、サイナ是りやまあどうして遅い事じや、わし一走見て來やんしよ、イヤなう若い女の一人歩行はいらぬ事、殊に其方は稚い時から、在所をあるく事さへ嫌で、鹽治様へ御奉公に遣つたれど、どうでも草深い所に縁が有るやら戻りやつたが、勘平殿と二人居やればおとましい顔も出ぬ、オ、母様の夫りや知れた事、好いた男と添ふのじやもの、在所はおるか貧しい活計でも苦にならぬ、頓て盆に成つて、とさま出て見やかゝんつ、かゝんつれてと云ふ歌の通り「勘平殿と只つた二人、踊見に往きやんしよ、お前も若い時覺があると、指合くらぬ瓦礫娘、氣もわさ〜と見えにける「何ほ其様に面白可笑しう言やつても、心の中は、イエ〜濟んで

ござんす、主の爲に祇園町へ、勤奉公に行くは兼て覺悟の前なれど、年寄つて爺様の世話やかしやんすが、夫りやいやんな詞「小身者なれど兄も鹽治様の御家來なれば、外の世話する様にもないと、親子咄の中道傳ひ、駕籠を昇かせて急ぎ來るは祇園町の一文字屋、爰じやくと門口から、與市兵衛殿内にかと言ひつゝ、這入れば、詞「是はマア、遠い所を、ソレ娘煙草盆、お茶上げましやと親子して、樋でお家を始人屋の亭主、詞「扱昨夜は是の親父殿もいかい太儀、別條無う戻られましたか、エ、扱は親仁殿と連立つて來はなされませぬか、是はしたり、お前へ往てから今において、ヤア戻られぬか、ハテめんような、ハア、若し稻荷前をぶら付いて、彼玉殿につまゝりやせぬかの、コレ此中安へ見に來て極めた通り、お娘の年も恰五年切、給銀は金百兩、さらりと手を打つた、是の親仁が言はるゝには、今夜中に渡さねばならぬ金有れば、今晚證文を認め、百兩の金子お貸しなされて下されと、涙をこぼしての頼故、證文の上で半金渡し、残り奉公人と引替の契約、何が其五拾兩渡すと悦んで戴き、ほたく云うて戻られたは最う四ツでも有らうかい、夜道を一人金持つていかぬ物と留めても聞かず戻られたが、但しは道に、イエ、寄らしやる所はなうか、さん、無いとも、殊に一時も早うそなたやわしに金見せて悦ばさうとて、いきせさと戻らしやる筈じやに合點がいかぬ、イヤこれ合點のいくいかぬは其方の穿鑿、こちはさがりの金渡し、奉公人連れて往のと、懐より金取出し跡金の五拾兩、是で都合百兩、詞「サア渡す受取らしやれ、お前夫でも親仁殿の戻られぬ中はなうかる、わが身は遣られぬ、ハテぐづぐと埒の明かぬ、コレぐつ共すつとも言はれぬ與市兵衛の印形、證文が物言ふ、今日から金で買切つた體、一日逃へばれ宛違ふ、どうで個様せさ濟むまいと、手を取つて引立てる、マア、待つてと取付く母親、突退け勿退け、無體に駕籠へ

押込、昇上げる門の口、鐵砲に裝笠打ちかけ、戻り係つて見る勘平、つかくと内に入り、詞「駕籠の内なは女房共、こりやマアどこへ、オ、勘平殿よい所へよう戻つて下さつたと、母の悦其意を得ず、詞「どうでも深い譯がある、母者人女房共、様子聞かうとお家の真中、どツかと座れば文字の亭主、詞「フツ扱はこなたが奉公人の御亭じやの、譬夫でも何でも、號の夫など、脇より違亂妨げ申す者無之候と、親仁の印形有るからは、此方には構はぬ、早う奉公人を受取らう、オ、聲殿合點が行くまい、兼てこなたに金の入る様子、娘の咄で聞いた故、どうぞ調へて進せたいと、言つた計で一錢の宛もなし、詞「そこで親父殿の言はしやるには、ひよつと此方の氣に、女房賣つて金調やうと、よもや思つては有るまいけれど、若し兩親の手前を遠慮して居やしやるまい物でもない、いつそ此與市兵衛が、聲殿に知らさず娘を賣らう、まさかの時は切取するも侍の慣ひ、女房賣つても恥にはならぬ、御主の益に立てる金、調へておましたら、まんざら腹も立つまいと、昨日から祇園町へ折極めに往て、今に戻らしやれぬ故、親子案じて居る中へ、親方殿が見えて、昨夜親仁殿に半金渡し、跡金の五拾兩と引替に、娘を連れて往なうというてなれど、親仁殿に逢うての上と、譯をいうても聞入れず、今連れて往なしやる所、どうせうぞ勘平殿、是は是は先以て舅殿の心遣ひ忝い、したがこちにもちつと能い事があれども夫は追つて、親父殿も戻られぬに、女房共は渡されまい、とはなせに、ハテ謂はゞ親なり判が、尤も昨夜半金の五拾兩渡されたでも有らうけれど、イヤこれ京大阪を股に懸け、女護島程奉公人を抱へる一文字屋、渡さぬ金を渡したと言つて濟む物かいの、また其上にたしかかな事が有るてや、是の親仁が彼五拾兩といふ金を、手拭にぐるぐると巻いて懐に入れらるゝ、そりや危い是に入れて首に懸けさッしやれと、おれが着て居る此單物の

縞の裂で拵へた金財布貸したれば、やんがて首にかけて戻られう、ヤア何と、此方が着て居る此縞の裂の金財布か、オ、てや、あの此縞でや、何と慥な證據で有らうが、聞くよりはッと勘平が、肝先にひしと應へ、傍邊に目を配り、袂の財布見合せば、寸分違はぬ糸入縞、南無三寶、扱は昨夜鐵砲で、打殺したは男で有つたか、ハアはッと我胸板を二ツ玉で、打貫かる、より切なき思、とはしらすして女房「コレこちの人、そは〜せずと、遣るものかやらぬ物か、分別して下さんせ、オ、成程、ハテ最うあの様に慥に言はるゝからは、行きやらすば成るまいか、アノとつ様に逢はいでもかへ、イヤ〜親父殿にも今朝一寸逢うたが、戻りは知れまい、フウそんなりや親父様に逢うてかへ、夫ならさうと言ひもせで、母様にもわしにも、案じさしてはッかりと、言ふに文字も圖に乗つて「七度尋ねて人疑へじや、親仁の有所の知れたので、そつちもこつちも心が宜い、また此上にも四の五の有れば、否共にでんど沙汰、マア〜さらりと濟んでめでたい、お袋も御亭も六條参りして些寄らしやれ、サア〜駕籠に早う乗りや、アイ〜これ勘平殿最う今彼地へ行くぞへ、年寄つた二人の親達、どうでこな様の皆な世話、取分けて親父様は強い持病、氣を付けて下さんせと、親の死期を隠しらす、頼む不便さいちらしさ、いつぞ打明け有の儘、咄さんにも他人有りと、心を痛め堪へ居る「オ、智殿、夫婦のわかれ暇乞がしたかるけれど、そなたに未練な氣も出よかと、思うての事であろ、イエ〜なんぼ別れても、主の爲に身を賣れば、悲しうも何ともない、わしや勇んで行く母様、したが父様に逢はずに行くのが、オ、夫も戻らしやつたら、遂逢ひに往かしやろぞいの、煩はぬ様に灸するて、息災な顔見せに來たても、鼻紙扇もなけりや不自由な、何にもよいか、とばついで怪我仕やんなと、駕籠に乗るまで心を付け、さらばや、さらば、何の因果で人並な娘を持ち、此悲しいめを

見る事じやと、齒を切り泣きければ、娘は駕籠にしがみ付き、泣くをしらすさじ聞さじと、聲をも立てず咽せかへる、情なくも駕籠昇上げ、道を逸めて急ぎ行く、母は跡を見送り〜、ア、由ない事言うて娘もさぞ悲しかろ「オ、こな人わいの、親の身でさへ思切が宜いに、女房の事ぐ〜思うて、煩うて下さんな、此親父殿はまだ戻らしやれぬ事かいのう、こなた逢うたと云はしやつたの、ア、成程、そりやマアどこらで逢はしやつて、何處へ別れて往かしやつた、されば別れた其所は、鳥羽か伏見か淀竹田と、口から出次第滅法彌八、種が島の六狸の角兵衛、所の狩人三人連、親父の死骸に襲打被せて戸板に乗せ、どやどやと内に入り「夜山仕舞うて戻りがけ、これの親父が殺されて居られた故、狩人仲間が連れて來たと、聞くよりはッと驚く母、何者の所爲、コレ智殿、殺した奴は何者じや、敵を取つて下されのう「コレ親父殿〜と、呼べど叫べど其効も、泣くより外の事ぞなき、狩人共口々に「オ、お袋悲しかる、代官所へ願うて、詮議して貰はしやれ、笑止〜と打連れて、皆々我家へ立歸る、母は涙の隙よりも、勘平が傍へ指寄つて「コレ智殿、よもや〜、よもや〜とは思へ共合點がいかぬ、なんぼ以前が武士じやと、男の死目見やしやつたら、悔りも仕やる筈、こなた道で逢うた時、金受取はさッしやれぬか、親父殿が何と言はれた、サア言はつしやれ、サア何と、どうも返事は有るまいかの、無い證據はコレ、爰にと勘平が懐へ手を指入れて引出すは、先刻にちらりと見て置いた此財布「コレ血の付いて有るからは、此方が親父を殺したの、イヤ夫は、夫はとは、エ、我御料はなう、隠しても隠されぬ天道様が明かな、親父殿を殺して取つた、其金にや誰に遣る金じや、ムウ聞えた、身貧な男、娘を賣つた其金を、中で半分くすねて置いて、皆遣るまいかと思つて、コリヤ殺して取つたのじやな、今といふ今迄も、律義な人じやと思つて、欺されたが腹

が立つはいやい、エ、爰な人でなし、餘り呆れて涙さへ出ぬはいやい、嗚最愛や與市兵衛殿、畜生の様な聲とは知らず、どうぞ元の侍にして遣りたいと、年寄つて夜も寝ずに京三界を驅行き、珍財を擲つて、世話をしやつたも、却つてこなたの身の仇と成つたるか、飼かふ犬に手を噛ると、ようもく此様に酷たらしう殺された事じや迄、コリヤ爰な鬼よ蛇よ、父様を返せ、親父殿を生けて戻せやいと、遠慮會釋も荒男の、鬘を掴んで引寄せ、擲付け、寸段に切りさいなんだとて是で何の腹が癒よと、恨の數々口説き立て、かつぱと伏して泣居たる、身の映りに勘平も、五體に熱湯の汗を流し、疊に喰付き天罰と、思知つたる折こそあれ、深編笠の侍二人、早野勘平在宿を仕召さるか、原郷右衛門千崎彌五郎、御意得たしと音なへば、折悪しけれ共勘平は、腰ふさぎ脇挟んで出迎ひ、コレハ御兩所共に、見苦しき埴生へ御出忝しと、頭を下ぐれば郷右衛門、見れば家内に取込も有りさうな、イヤ最う瑣細な内證事、御構ひなくともいざ先あれ、然らば左様に致さんと、すつと通り座に着けば、二人が前に兩手をつき、此度殿の御大事にはづれたるは、拙者が重々の誤、申開かん詞もなし、何卒某が科御赦しを蒙り、亡君の御年忌、講家中諸共相勤むるやうに御兩所の御執成、偏に頼み奉ると、身を謙退り述べければ、郷右衛門取りあへず、先以て其方貯なき浪人の身として、多くの金子御石碑料に調進せられし段、由良之助殿甚だ感じ入れしが、石碑を營むは亡君の御菩提、殿に不忠不義をせし其方の金子を以つて、御石碑料に用ゐられんは、御尊靈の御心にも叶ふまじと有つて、金子は封の儘相戻さると、詞の中より彌五郎懐中より金取出し、勘平が前に指置けば、はつと計りに氣も轉倒、母は涙と諸共に、コリヤ爰な悪人づら、今といふ今親の罰思ひ知つたか、皆様も聞いて下され、親父殿が年寄つて後生の事は思はず、聲の爲

に娘を賣り、金調へて戻らしやるを待伏せして、あの様に殺して取つた金じやもの、天道様がなくば知らず、何で御用に立つ物ぞ、親殺しの生盗人に、罰を當て、下されぬは、神や佛も聞えぬ、あの不孝者、お前方の手に懸けて、なぶり殺しにして下され、わしや腹が立つはいのと、身を投げふして泣き居たる、聞くに驚き兩人刀押取り、弓手馬手に詰懸け、彌五郎聲をあらうげ、ヤイ勘平、非義非道の金取つて、身の科の詫せよとは言はぬぞよ、わが様な人非人、武士の道は耳に入るまい、親同然の舅を殺し、金を盗んだ重罪人は、大身鎗の田樂刺、拙者が手料理振舞はんと、はつたと睨めば郷右衛門、濁しても盗泉の水を飲まずとは義者の誠、舅を殺し取つたる金、亡君の御用金に成るべきか、生得汝が不忠不義の根性にて、調へたる金と推察有つて、突き戻されたる由良之助の眼力、天晴く、去ながら、ハア情なきは此事世上に流布有つて、鹽治判官の家來早野勘平、非義非道を行ひしと言はゞ、汝許が恥ならず、亡君の御恥辱と知らざるか虚心者、左程の事の辨なき汝にてはなかりしが、如何なる天魔が見入れしと、鋭き眼に涙を浮め、事を解け理を責むれば、耐り兼ねて勘平、諸肌押脱ぎ脇指を、抜くより早く腹にぐつと突立て、ア、孰れもの手前面目もなき仕合、拙者が望叶はぬ時は、切腹と兼ての覺悟、我舅を殺せし事、亡君の御恥辱とあれば、一通申開かん、兩人共に聞いて給べ、夜前彌五郎殿の御目に懸り、別れて歸る關紛れ、山越す猪に出合ひ、二ツ玉にて打留め、驅寄つて探見れば、猪にはあらで旅人、南無三寶過つたり、藥はなきかと懐中を捜し見れば、財布に入れたる此金、道ならぬ事なれども天より我に與ふる金と、直に馳行き彌五郎殿に彼金を渡し、立歸つて様子を聞けば、打留めたるは我舅、金は女房を賣つた金、斯程までする事なす事、鴟の嘴ほど違ふといふも、武運に盡きたる勘平が、身の成行推量

有れと、血走る眼に無念の涙、子細を聞くより彌五郎すんど立上り、死骸を引上げ打返し、ムウ〜と疵口改め 詞 郷右衛門これ見られよ、鐵砲疵に似たれ共、是は刀で抉つた疵、エ、勘平早まりしと、いふに手負も見て恠り、母も驚く許りなり、郷右衛門心付き 詞 イヤコレ千崎殿、ア、是にて思ひ當つたり、御自分も見られし通、是へ来る道端に鐵砲受けたる旅人の死骸、立寄り見れば斧定九郎、強欲な親九太夫さへ、見限りて勘當したる悪黨者、身のイなき故に、山賊すると聞きたるが、疑もなく勘平が、男を討つたは奴が業、エ、そんなりや、あの親父殿を殺したは、外の者でござりますかへ、ハアはツと、母は手負に縋り 詞 コレ手を合して拜みます、年寄の愚痴な心から恨いふたも皆誤り、堪へて下され勘平殿、必ず死んで下さるなと、泣詫ふれば顔ふり上げ 詞 只今母の疑も、我悪名も晴れたれば、是を冥途の思出し、跡より追付男殿、死出三途を伴はんと、突込む刀引廻せば、ア、暫く〜 詞 思はずも其方が男の敵討つたるは、いまだ武運に盡さざる所、弓矢神の御恵にて、一功立てたる勘平、息のある中郷右衛門が、密に見する物有り、懐中より一卷を取出し、さら〜と押披き 詞 此度亡君の敵、高師直を討取らんと神文を取交し、一味徒黨の連判此の如しと、讀みも終らず苦痛の勘平、其姓名は誰々成るぞや 詞 オ、徒黨の人数は四十五人、汝が心底見届けたれば、其方を指加へ、一味の義士四十六人、是を冥途の土産にせよと、懐中の矢立取出し姓名を書記し 詞 勘平血判、心得たりと腹十文字に掻切り、臟腑を搦んでしツかと押し 詞 サア血判仕つた、ア、忝なや有りがたや、我望達じたり、母人歎いて下さるな、男の最期も、女房の奉公も、反古にはならぬ此金、一味徒黨の御用金と、いふに母も涙ながら、財布と俱に二包、二人が前に指出し 詞 勘平殿の魂の入つた此財布、舞殿じやと思つて、敵討の御供に連

れてござつて下さりませ 詞 オ、成程尤なりと郷右衛門金取納め、思へば〜此の金は綿の財布の紫摩黄金、佛果を得よと言ひければ 詞 ア、佛果とは穢はし、死なぬ〜、魂魄此土に留まつて、敵討の御供すると、言ふ聲も早四苦八苦、母は涙に掻昏れながら、ナツ勘平殿、此事を娘にしらし、せめて死目に逢はしてやりたい 詞 イヤ〜親の最期は格別、勘平が死んだ事必ず知らして下さるな、お主の爲に買つたる女房、此事聞いて不奉公せば、お主に不忠するも同然、只其儘に指置かれよ、サア思置く事なしと、刀の鋒咽にぐツと指貫き、カッぱと伏して息絶えたり 詞 ヤア最う舞殿は死なしやつたか、扱も〜世の中に、おれが様な因果な者が又と一人有らうか、親父殿は死なしやる、頼みに思ふ舞を先立て、最愛かはいの娘には生別れ、年寄つた此母が一人残つて是がマア、何と生きて居られうぞ 詞 コレ親父殿與市兵衛殿、おれも一緒に連れて往て下されと、取付いては泣叫び、又立上つてコレ舞殿、母も俱にと縋付いては伏沈み、あちらでは泣き、こちらでは泣き、わつと許にどうと伏し、聲をばかりに歎きしは、目も當てられぬ次第なり、郷右衛門突立ち上り 詞 ヤアこれ〜老母、歎かる、は、理なれ共、勘平が最期の様子、大星殿に委しく語り、入用金手渡しせば満足あらん、首に掛けたる此金は、舞と男の七七、四十九日や五十兩、合せて百兩百ケ口の追善供養、跡懇に用はれよ、さらば〜おさらばと、見送る涙見返る涙、涙の浪の立返る人も果敢なき 三重 詞 はかなき。

第七 茶屋

花に遊ば、祇園邊の色揃へ、東方南方北方西方、彌陀の淨土かぬりに塗立て、びつかりびか〜、光り耀

くはくや藝子にいかぬ粹奴も、現ぬかして、愚鈍どろつくどろつくや、ワイワイノワイトサ「誰頼まう、亭主は居ぬか、亭主」、是はいそがしいは、何奴様じや、何方様じや、正斧九太様、御案内とはけうといく、イヤ初めてのお方を同道申した、きつう取込みさうに見えるが、一ツ上げます座敷が有るか、御座りますとも、今晚は彼由良大盡の御趣向で、名有る色達を掴込み、下座敷は塞がつてござりますれど、亭座敷が明いてござります、夫りや又蜘蛛の巣だらけで有らう、又悪口を、イヤサよい年をして、女郎の蜘蛛の巣に懸らまい用心、コリヤきつい、下に置かれぬ二階座敷、ソレ燈を點せ仲居ども、お盃お煙草盆と、高い調子に枷かけて、奥は騒ぎの太鼓三味「ナント件内殿、由良之助が體御覽じたか、九大夫殿、ありやいつそ氣狂でござる、段々貴様より御内通有つても、あれ程に有らうとは、主人師直も存せず、拙者に罷り登つて見届け、心得ぬ事あらば、早速に知らせよと申付けましたが、扱々我もへんしも折れましてござる、悴力彌めは何と致したな、此奴も折節此所へ参り俱に放埒、指合くらぬが不思議の一ツ、今晚は底の底を捜見んと、心工を致して参つた、密々にお咄し申さう、いざ二階へ、先々、然らば斯うお出で「賈は心に思ひはせいで、あだな惚れた」の口先はいかい、つやでは有るはいな「彌五郎殿、喜多八殿、是が由良之助殿の遊び茶屋、一カと申すのでござる、コレサ平右衛門、よい時分に呼出さう、勝手に控へてお居やれ、畏りました、宜しう頼上げます、誰ぞ一寸頼みたい、アイくどな様じやへ、イヤ我々は由良之助殿に用事有つて参つた、奥へ往て言はふには、矢間十太郎、千崎彌五郎、竹森喜多八でござる、此間より節々迎ひの人を遣はしますれ共、お歸りのない故、三人連で参りました、ちと御相談申さねばならぬ儀がござる程に、お逢ひなされて下されと急度申して呉れ、夫は何共氣の毒でござんす、由良様は三日以來の欲

續け、お逢ひなされてからたわいは有るまい、本性はないぞへ、ハテ扱まあさう言うてお呉りやれ、アイア、彌五郎殿お聞きなされたか、承つて驚入りました、初の程は敵へ聞する計略と存じましたが、いかう遊に賈が入過ぎまして、合點が参らぬ、何と此喜多八が申した通、魂が入代つてござらうがの、いつそ一間へ踏込み、イヤく篤と面談致した上、成程、然らば是に待ちませう、手の鳴る方へく、捕まよ、捕まよ、由良鬼やまたい、捕まへて酒吞まそ、コリヤとらまへたは、サア酒々、銚子持て銚子持て、イヤコレ由良之助殿、矢間十太郎でござる、こりや何と成さる、南無三寶仕舞うた、オ、氣の毒何と榮さん、ふしくれた様なお侍様方、お連様かいな、さあれば、お三人共怖い顔して、イヤコレ女郎達、我々は天星殿へ用事有つて参つた、暫く座を立つて貰ひたい、其様な事でも有りそな物、由良様奥へ行くぞへ、お前も早うお出、皆様是にへ、由良之助殿、矢間十太郎でござる、竹森喜多八でござる、千崎彌五郎御意得に参つた、お目覺されませう、是は打揃うてようお出なされた、何と思つて、鎌倉へ打立つ時候はいつ比でござるな、さればこそ、大事の事をお尋ねなれ、丹波與作が歌に、江戸三界へいかんして「ハ、ハ、ハ、御免候へたはいく、ヤア酒の酔本性たがはず、性根が付かずば三人が、酒の酔を醒させませうかな、ヤレ聊爾なされませるな、俣ながら平右衛門めが、一言申上げた儀がござります、暫くお控へ下されませう、由良之助様、寺岡平右衛門めでござります、御機嫌の體を拜しまして、いか許大悦に存じ奉ります、フウ寺岡平右衛門とは、エ、何でえすか、前かど北國へお飛脚に往かれた、足のかるい足輕殿か、左様でござります、殿様の御切腹を北國にて承りまして、南無三寶と宙を飛んで、歸ります道にて、御家も召上げられ、一家中離散と、承つた時の無念さ、奉公こそ足輕なれ、御恩は替らぬお主の仇、

師直めを一討と鎌倉へ立越え、三ヶ月が間非人と成つて、附狙ひましたれ共、敵は用心厳しく、近寄る事も叶ひませず、所詮腹掻割かんと存じましたが、國許の親の事を思出しまして、すごとく歸りました。所に、天道様のお知らせにや、孰も様方の一味連判の様子承りますると、ヤレ嬉しや有りがたやと、取る物も取敢ず、あなた方の旅宿を尋ね、一向お頼み申上げましたれば、出かした愛奴じや、お頭へ願うてやろとお詞に纏り、是迄推参仕りました、師直屋敷の、アこれ〜、ア其許は足輕では無うて、大きな口がるじやの、何と牽頭持なされぬか、尤もたくしも、蚤の頭を斧で割つた程無念なとも存じて、四五十人一味を拵へて見たが、アあぢな事の、よう思うて見れば、仕損じたら此方の首が轉り、仕課せたら跡で切腹、何方でも死なねばならぬ、といふは人參飲んで首縊る様な物、殊に其許は、五兩に三人扶持の足輕、お腹は立てられな、はつち坊主の報謝米程取つて居て、命を捨て、敵討せうとは、そりや青海苔貰うた禮に、太々神樂を打つ様な物、我等知行千五百石、貴様と比べると、敵の首を斗升で量る程取つても釣合ぬ〜、所で止めた、ナ聞えたか、兎角浮世は斯した物じや、つ、てん〜、何ぞと弾きかけた所は堪らぬ〜、是は由良之助様のお詞とも覺えませぬ、僅三人扶持取る拙者めでも、千五百石の御自分様でも、繋ぎました命は一つ、御恩に高下はござりませぬ、押すに押されぬは御家の筋目、殿の御名代もなされませぬ、歴々様方の中へ、見る影もない私めが、指加へてとお願ひ申すは、俾とも慮外とも、實の猿が人真似、お草履を掴んでなりとも、お荷物を擔いでなり共參じませう、お供に召連れられて、ナ、申し、コレ、申し、是はしたり腰てござるさうな、コレサ平右衛門、可借口風ひかすまい、由良之助は死人も同然、矢間殿、千崎殿、モウ本心は見えましたすが、申合せた通計ひませうか、いか様、一味連判

の者共への見せしめ、いざ何れもと立寄るを、ヤレ暫くと平右衛門、押寄め傍に寄り、一つく〜思ひ廻しますれば、主君にお別れなされてより、怨を報はんと種々の艱難、木にも茅にも心を置き、人の讒無念をば、確と耐へてござるからは、酒でも無理に參らずば、是迄命も續きますまい、醒めての上の御分別と、無理に押へて三人を、伴ふ一間は善悪の、燈を照す障子の内影を隠すや、三重の月の入る山科よりは一里半、息を切つたる嫡子力彌、内を透して正體なき父が寝姿、起すも人の耳近しと、枕下に立寄つて、櫛に代る刀の鏗音、鯉口ちやんと打鳴らせば、むつくと起きてヤア力彌か、一こひ口の音響かせしは、急用有つてか密に〜、只今御聖かほよ様より、急のお飛脚密事の御狀、外に御口上はなかつたか、敵高師直歸國の願叶ひ、近々本國へ罷歸る、委細の儀は御文との御口上、よし〜、其方は宿へ歸り、夜の内に迎ひの駕、往け〜、はつと猶豫ふ隙もなく、山科指して引返す、先づ様子氣遣と、狀の封じを切る所へ、一、大星殿、由良殿、斧九大夫でござる、御意得ませうと聲懸けられ、一是は久しや〜、一年も逢はぬ内、寄つたぞや寄つたぞや、額に其皺のばしにお出か、アノ爰な筵破りめが、イヤ由良殿、大功は細瑾を願ひすと申すが、人の讒も構はず遊里の遊、大功を立つる基、適の大丈夫末頼もしう存する、ホオ、是は堅いは〜、石火矢と出掛けた、去とては措かれい、イヤ由良之助殿とほけまい、まこと貴殿の放埒は、敵を討つ術と見えるか、おんでもない事、忝ない、四十に餘つて色狂ひ、馬鹿者よ、狂氣よと、笑はれうかと思ふたに、敵を討つ術とは九大夫殿、ホ、ウ嬉しい〜、スリヤ其許は、主人鹽治の怨を報する所存はないか、けもない事〜、家國を渡す折から、城を枕に討死といふたのは、御臺様への追従、時に貴様が、上へ對して朝敵同然と、其場をついと立つた、我等は跡にと、しやちばつて居た、いかい

白痴の、所で仕舞は付かず、御幕へ参つて切腹と、裏門からこそ〜。今此安樂な樂するも貴殿のお
 庇、昔の好は忘れぬ〜、堅みを止めて碎けをれ〜、いか様此九大夫も、昔思へば信太の狐、妖顯は
 して一献酌まうか、サア由良殿、久敷ぶりだお盃、又頂戴と會所めくのか、指しをれ吞むは、吞みをれ指
 すは、てうど受けをれ吞むはと、傍に有合ふ銷肴、挟んですつと指し出せば、詞「手を出して、足を戴
 く銷肴、忝いと戴いて喰はんとする、手をじつと捉へ〜」詞「コレ由良之助殿、明日は主君鹽治判官の御
 命日、取分速夜が大切と申すが、見事其肴貴殿は喰ふか、喰る〜。但し主君鹽治殿が、銷に成られたと
 云ふ便宜が有つたか、エ愚痴な人では有る、こなたやおれが浪人したは、判官殿が無分別から、スリヤ恨
 こそ有れ、精進する氣微塵もごあらぬ、お志の肴賞既致すと、何氣もなく、只一口に味ふ風情、邪
 智深き九大夫も、呆れて詞もなかりける。〜」詞「扱此肴では吞めぬ〜、鶏しめさせ鍋焼させん、其許も奥
 へお出、女郎共誦へ〜と、足元もしどろもどろの浮拍子、テレンク〜。ツ、テン〜。おのれ末社ど
 も、めれんになさで置くべきかと、驛にまぎれ入りにける、始終を見届け驚坂伴内、二階より降立ち。〜」詞「九
 大夫殿、子細とツと見届け申した、主の命日に、精進さへせぬ根性で、敵討存じも寄らず、此通り主
 人師直へ申聞け、用心の門を開かせませう、成程最早御用心に及ばぬ事、コレサまた爰に、刀を忘れて置
 きました、ほんに誠に大馬鹿者の證據、嗜の魂見まじよ、扱錆びたりな赤鯛、ハ、ハ、ハ、ハ、彌本心顯
 はれ御安堵〜、ソレ九大夫が家來迎の駕籠、はつと答へて持出る。〜」詞「サア伴内殿お召なされ、先づ御自分
 は老體平に〜。然らば御免と乗移る。〜」詞「イヤ九大夫、承れば此所に、勘平が女房が勤めて居ると聞き
 ました、貴殿には御存じないか、九大夫殿、九大夫殿といへど答へず、コハ不思議と、駕籠の簾を引明く

れば、内には手ごろの庭の飛石。〜」詞「コリヤどうじや、九大夫は松浦さよ姫をやられたと、見廻すこなたの縁
 の下より。〜」詞「コレ〜」詞「伴内殿、九大夫が駕籠脱の計略は、最前力彌が持参せし書翰が心元なし、様子見届
 け跡より知らさん、矢張我等が歸る體にて、貴殿は其駕籠に引添うて、合點〜と點頭合ひ、駕籠には人の
 有る體に、見せて徐々立歸る、折に二階へ、勘平が妻のおかるは酔醒し、はや里馴れて吹く風に、憂さを晴
 して居る所へ。〜」詞「ちよと往て来る、由良之助とも有らう侍が、大事の刀を忘れて置いた、遂取つて来る
 其間に、掛物もかけ直し、爐の炭もついで置きや、ア、それ〜、こちらの三味線踏折るまいぞ、是は
 したり、九太は往なれたさうな。〜」詞「父よ母よと泣く聲聞けば、妻に鸚鵡の、うつせし言の葉、エ、何じや
 いな、措かしやんせ、傍見廻し、由良之助、釣燈籠の灯を照し、讀む長文は御臺より敵の様子細々と、
 女の文の跡や先、〜」詞「で抄どらす、餘所の戀よと美しく、おかるは上より見おろせど、夜眼遠眼なり宇
 性もおぼろ、思付いたる延鏡、出して寫して讀取る文章、下家よりは九大夫が、繰りおろす文月影に、
 透し讀むとは、神ならずほどけか、りしおかるが玉笄、ばつたり落つれば、下にははつと見上げて後へ隠す
 文、縁の下には猶ゑつば、上には鏡の影隠し。〜」詞「由良さんか、おかるか、そもじは其處に何してぞ、わた
 しやおまへに盛潰され、餘りつらさに酔さまし、風に吹かれて居るわいな、ムウ、ハテなう、よう風にふ
 かれてじやの、イヤかる、ちと咄したい事がある、屋根越の天の川で、爰からは言はれぬ、一寸おりて給も
 らぬか、咄したいとは頼みたい事かへ、まあそんな物、廻つて來やんしよ、いや〜、段梯子へおりたら
 ば、仲居が見付けて酒にせう、ア、どうせうな、ア、コレ〜。幸爰に九ツ梯子、是を踏へておりても
 と、小屋根に掛ければ。〜」詞「此梯子は勝手が違うて、オ、怖どうやら是は危い物、大事ない〜、危い怖いは

昔の事、三間づ、跨ぎても、赤齋も入らぬ年ばい、阿房いはんすな、舟に乗つた様で怖いわいな、道理で船玉様が見える、オ、覗かんすいな、洞庭の秋の月様を拜み奉るじや、イヤモウそんなら下りやせぬぞ、下りざおろしてやる、アレ又悪い事を、喧しい、生娘かなんぞの様に、逆縁ながらと後より、じつと抱締め抱きおろし、調「なんとそもじは御覽じたか、アイい、え、見たであろく、アイなんじややら、面白さうな文、あの上から皆讀んだか、オ、くど、ア身の上の大事とこそは成りにけり、何の事じやぞいな、何の事とはおかる、古いが惚れた、女房に成つてたもらぬか、掛かんせ虚言じや、サ虚言から出た眞でなければ根が逃げぬ、おうと言や、イヤ言ふまい、なせ、お前のは嘘から出た眞じやない、實から出た嘘じや、おかる受出さう、エ、うそでない證據に、今宵の内に身受せう、ムウいやわしには、間夫が有るなら添はしてやる、そりやマア眞かへ、侍冥利、三日なり共圍ふたら、夫からは勝手次第、ハア、嬉しうござんすと、いはして置いて笑をでの、いや直に亭主に金渡し、今の間に埒さう、氣遣せず待つて居や、そんなら必ず待つて居るぞへ、金渡しして来る間、何地へも往きやるな、女房じやぞ、夫もたツた三日、それ合點、忝うござんす、調「世にも因果な者ならわしが身じや、可愛男に、いぐせの思、エ、なんじやいな措かしやんせ、忍音に鳴く小夜千鳥、奥で語ふも身の上と、おかるは思案取々の、折に出合ふ平右衛門、調「妹でないか、ヤア兄様か、恥しい所で逢ひましたと顔を隠せば、調「苦しうない、關東より戻りがけ、母人に逢うて委しく聞いた、夫の爲お主の爲、よく買られた出かしたく、さう思つて下さんすりやわしや嬉しい、調「したがああ悦んで下さんせ、思ひがけなう、今宵受出さる、答、夫は重疊何人のお世話で、お前も御存じの大星由良之助様のお世話で、何じや由良之助殿に受出される、夫は下地からの馴染か、

何のいな、此中より二三度酒の相手、夫が有らば添はしてやる、隙が欲しくば隙やろと、結構過ぎた身請、扱は其方を、早野勘平が女房と、イエしらすじやぞへ、親夫の恥なれば、明して何の言ひませう、ムウすりや本心放埒者、お主の怨を報する所存はないに極つたな、イエくこれ兄様、有るぞへ、高うは言はれぬ、コレ斯様く耳語けば、調「ムウすりや其文を儘に見たな、残らず讀んだ跡で、互に見合す顔と顔、それからじやらつき出して遂身請の相談、アノ其文残らず讀んだ跡で、アイナ、ムウそれで聞えた、妹とても遅れぬ命、身共に呉れよと抜打に、はッしと切れば、調「ちやつと飛退き、コレ兄様、わしには何誤り、勘平といふ夫も有り、急度二親有るからは、こな様の儘にも成るまい、請出されて親夫に、逢ふと思ふがわしや樂、どんな事でも認らう、赦して下んせ赦してと、手を合すれば、平右衛門、抜刀を捨て、どうと伏し、悲歎の涙にくれけるが、調「可愛や妹何にも知らぬな、親與市兵衛殿は六月二十九日の夜、人に切られてお果なされた、ヤアそれはまあ、コリヤまだ悔りすな、請出され添はうと思ふ勘平も、腹切つて死んだはやい、ヤアく、それはまあ眞かいの、コレなうくと取付いて、わつと計りに泣沈む、調「オ、道理、様子咄せば長い事、お痛はしいは母者人、言出しては泣き、思出しては泣き、娘かるに聞かしたら泣死にするであろ、必ず言うてくれなとの頼み、言ふまいと思へども、逆も遅れぬそちが命、其譯は、忠義一途に凝固まつた由良之助殿、勘平が女房と知らねば請出す義理もなし、元來色には猶耽らず、見られた状が一大事、請出し差殺す、思案の底と儘に見えた、よしさうなうても壁に耳、外より洩れても其方が科、密書を覗見たるが誤り、殺さにやならぬ、人手に懸きよより我手に掛け、大事を知つたる女、妹とて救されずと、夫を功に連判の敷に入つてお供に立たん、小身者の悲しさは人に勝れ

た心底を、見せねば敷にも入れられぬ、聞分けて命をくれ、死んでくれ妹と、事を分けたる兄の詞、おかるは始終咳上げく、便のないは身の代を、役に立ての旅立か、暇乞にも見えなものと、恨んでばかり居りました、勿體ないが父様は、非業の死でもお年の上、勘平殿は三十に成るやならず死ぬるのは、嗚呼悲しかる口惜しかる、逢ひたかつたで有らうのに、なせ逢せては下さんせぬ、親夫の精進さへ、しらぬはわたしが身の因果、何の生きて居りませう、お手にかゝらば母様が、お前をお恨みなされましよ、自害した其跡で、首なりと屍骸なりと

詞 功に立つなら功にさんせ、さらばござる兄様と、言ひつ、刀取上ぐる

詞 やれましてはしと、止むる人は由良之助、はつと驚く平右衛門、おかるは放して殺してと、あせるを押へて

詞 ホッ兄弟共見上げた疑はれた、兄は東の供を許す、妹は存在で、未來への追善、サア其追善は冥途の供と、もぎ取る刀をしつかと持添へ

詞 夫勘平連判には加へしかど、敵一人も討ちとらず、未來で主君に言譯有るまじ、其言譯はコリヤ爰にと、ぐつと突込む壘の間、下には九太夫肩先縫はれて七頭八倒

詞 それ引出せの、下知より早く縁先飛びおり平右衛門、朱に染んだ體をば、無二無三に引摺り出し、ヒヤア九太夫め、ハテよい氣味と引立て、目通へ投付ければ、起立たせもせず由良之助、毬を掴んでぐつと引寄せ

詞 獅子身中の蟲とは汝が事、我君より高知を戴き、莫大の御恩を被ながら、敵師直が犬と成つて、有る事ない事よう内通ひろいだな、四十餘人の者共は、親に別れ子に離れ、一生連添ふ女房を、君傾城の勤をさするも、亡君の怨を報じたさ、寢覺にも現にも、御切腹の折柄を、思ひ出して無念の涙、五臟六腑を絞りしぞや

詞 取分け今宵は殿の迷夜、口に諸々の不淨を言うても、愼に愼を重ねる由良之助に、よう魚肉を突付けたなア、否と言はれず應といはれぬ胸の苦しさ、三代相恩のお主の迷夜に、咽

を通した其時の心、どの様に有らうと思ふ、五體も一度に慟亂し、四十四の骨々も砕くる様に有つたはやい、エ、獄卒め魔王めと、土に摺付け捻付けて、無念涙に昏れけるが

詞 コリヤ平右衛門、最前錯刀を忘れ置いたは、こいつをば斃殺しといふしらせ、命取らずと苦痛させよ、畏つたと抜くより早く、踵上り飛上り、切れども僅二三寸、明所もなしに疵だらけ、紆打廻つて

詞 平右殿、おかる殿、詫してたべと手を合せ、以前は足輕づれなりと、目にも掛けざる寺岡に、三拜するぞ見苦しき

詞 此場で殺さば言譯むつかし、喰酔ふた體にして、館へ連れよと羽織打被せ疵の口、隠れ聞いたる矢間、千崎、竹森が、障子ぐわらりと引開け

詞 由良之助殿、段々誤り入りましたござります、それ平右衛門、喰酔ふた其客に、加茂川で水糝を喰せい、ハアツ、往け。

第八 道行旅路嫁入

浮世とは、誰が言初めて、飛鳥川、ふちも知行も瀬と變り、赤邊も浪の下人に、結ぶ鹽治の誤は、戀の枷杭加古川の、娘小浪が言號、結納もとらず其儘に、振捨てられし物思、母の思は山科の、舞の力彌をちからにて、住家へ押し嫁入も、世に有りなしの義理遠慮、姉つれず乗物も、廢めて親子の二人連、都の空に心ざす、雪の肌も寒空は、寒紅梅の色添ひて、手先覺えず凍え坂、薩埵峠に、さしか、り見返れば、不二の煙の空に消え、行方もしれぬ思をば、晴す嫁入の門火ぞと、いはうて三保の松原に、つゞく並松街道を、狭しと打つたる行列は、誰としらねど浦山し、ア、世が世ならあのごとく、一度の晴と花がざり、伊達をするがの府中過ぎ、城下、過ぐれば氣散じに、母の心もいそくと、二世の盃濟んで後、閨の睦

言私語、親知らず子しらすと、葛の細道縫合ひ、嬉しからうと手を引けば、アノ母様の差合を、脇へこかして鞠子川、うつ山の邊の現にも、殿御初の新枕、せとの染飯強いやら、恥かしいやら嬉しいやら、案じて胸も大井川、水の流と人心、若や心は替らぬか、日陰に花は咲かぬかと、いうて島田の愛晴し、我身の上を斯とだに、人しらすかの橋越えて、行けば吉田や赤坂の、招く女の聲揃へ、縁を結ばず、清水寺へ参らんせ、音羽の瀧にざんぶりざ、毎日さういうて拜まんせ、さうじやいな、し、きがんかうがかいれいにうきう、神樂太鼓に、ヨイコノエイ、こちの晝寝を覺された、都殿御に逢うてつらさが語りたや、ソウトモく、若も女夫とか、様ならば、伊勢さんの引合、副俗歌も身に取りて、好い吉左右になる海湯、熱田の社あれかとよ、七里の渡し帆を上げて、艦拍子揃へてヤツシツシ、機取る音は鈴虫か、や、蟋蟀、鳴くや霜夜と詠みたるは、小夜更けてこそくれ迄と、限有る船急がんと、母が走れば娘も走り、空の霞に笠覆ひ、船路の友の跡や先、庄野龜山せきとむる、伊勢と吾妻の別れ道、驛路の鈴の鈴鹿越え、間の土山雨が降る、水口の葉に、言囃す、石部石場で大石や、小石拾うて我夫と、撫でつ擦りつ手に据ゑて、頓て大津や三井寺の、麓を越えて山科へ、程なき、里へ、三重「急ぎ行く」。

第九

風雅でもなく、洒落でもなく、しやうことなしの山科に、由良之助が住居、祇園の茶屋に昨日から、雪の夜明し朝辰り、牽頭仲居に送られて、酒がほたへる雪轉し、雪はこけいで雪こかさされ、仁體捨てし遊なり「旦那申し旦那、お座敷の景好うござります、お庭の敷に雪持つてトなつた所、とんと繪に畫いた通り、

けうといじやないかなうお品、サア此景を見て、外へは何地へも往きたうはござりますまいがな、ヘッ朝夕に見ればこそ有れ住吉の、岸の向の淡路島山、といふ事知らぬか、自慢の庭でも、内の酒は呑めぬ、エ、通らぬやつ、サア、奥へ、奥はどこにぞお客が有ると、先に立つて飛石の、詞もしどろ足取も、しどろに見ゆる酒機嫌、お戻りさうなと女房の、お石が軽う汲んで出る、茶屋の茶よりも氣の端香、お寒からうと格氣せぬ、詞の鹽茶煮ひ醒し、一口呑んで跡打明け「エ、奥、無粋なぞや、折角面白う酔うた酒醒せとは、ア、ア、降つたる雪かな「いかに餘所の和郎達か、嗚嗚氣とや見給ふらん、それ雪は、打綿に似て飛んで中入となり「奥はか、様といへば、とつと世帯染むといへり、加賀の二布へお見舞の「遅いは御用捨、伊勢海老と盃、穴の稻荷の玉垣は、朱うなければ信がさめると云ふ様な物かい、オイこれ、こぶら反りじや足の指折つた、おつとよし、次手にかうじやと足先で「ア、これほたへさしやんすな、嗜ましやんせ、酒が過ぎるとたわいが無い、ほんに世話でござらうのと、物おかに待遇ふ、力彌心得奥より立出で「申し、母人、親父様は御寝なつたか、是上げられいと指出す、親子が所作を塗分けても、下地は同じ桐枕、オ、オ、應は夢現「イヤ最う皆往にやれ、ハイ、ハイ、そんならば旦那へ宜しう、若旦那些御出を目遣ひで、往に際悪う歸りける、聲聞えぬ迄行過ぎさせ、由良之助枕を上げ「ヤア力彌、遊興に事寄せ丸めた此雪、所存有つての事じやが、何と心得たぞ、ハツ雪と申す物は、降る時には少しの風にも散り、軽い身でござりませうとも、彼の如く一致して丸まつた時は、嶺の雪吹に岩をも砕く大石同然、重いは忠義、其重い忠義を思ひ丸めた雪も、餘り日敷を延過してはと思召しての、イヤ、由良之助親子、原郷右衛門など四十七人連判の人数はナ、皆主なしの日陰者、

日陰にさへ置けば解けぬ雪、せく事は無いと云ふ事、爰は日常り奥の小庭へ入れて置け、益を集め雪を積むも、學者の心長き例、女共、切戸内から明けてやりやれ、堺への状認めん 詞「飛脚が来たれば知らせよ、アイ／＼間の切戸の内、雪轉し込み戸を開つる、襖引立て入りにける、人の心の奥深き山科の隠家を、尋ねて爰に来る人は、加古川本蔵行國が女房となせ、道の案内の乗物を傍に待たせ只一人、刀脇指さすがげに、行儀亂さす庵の戸口 詞「頼みませう、頼みませうといふ聲に、襷はづして飛んで出る、昔の奏者今のりん、どうれと言ふもつかうどなる 詞「ハア大星由良之助様お宅は是かな、左様ならば、加古川本蔵が女房となせでござります、誠に其後は打絶えました、些お目に掛りたい用事に付遙々参りましたと、傳へられて下されと、言入れさせて表の方、乗物はへと昇寄せさせ、娘爰へと呼出せば、谷の戸明けて鶯の梅見付けたる微笑顔、目深に被たる帽子の内 詞「アノ力彌様のお屋敷は最う爰かへ、わしや恥しいと媚かし、取散す物片付けて、先お通りなされませと、下女が傳へる口上に 詞「祝籠の者皆歸れ、御案内頼みますといふもいそ／＼娘の小浪、母に付添ひ座に直れば、お石しとやかに出向ひ 詞「是は／＼、お二方共ようぞや御出、疾よりお目に掛る筈、お聞及びの今の身の上、お尋ねに預りお恥しい 詞「あの改まつたお詞、お目に掛るは今日初なれど、先達て御子息力彌殿に、娘小浪を言致したからは、お前なりわたしなり、姫同士御遠慮に及ばぬ事 詞「是は／＼、痛入る御挨拶、殊に御用繁い本蔵様の奥方、寒空といひ思ひがけない御上京、となせ様は兎もあれ小浪御察、嘸都珍らしからう、祇園清水知恩院、大佛様御覽じたか、金剛寺拜見あらば好い傳が有るぞへと、心置なき挨拶に、只あい／＼も口の内、帽子まばゆき風情なり、となせは行儀改めて 詞「今日参る事餘の儀にあらず、是なる娘小浪言致いたして後、

御主人鹽治殿不慮の儀に付き、由良之助様、力彌殿、御在所も定ならず、移り換るは世の慣習、替らぬは親心兎や角と聞合せ 詞「此山科にごさる山承りました故、此方にも時分の娘早うお渡し申したさ、近比押付がましいが、夫も参る筈なれど、出仕に暇のない身の上、此一腰は夫が魂、是を指せば則ち夫本蔵が名代と、わたしが役の二人前、由良之助様にも御意得まし、祝言させて落付きたい、幸今日は日柄もよし、御用意成され下さりませと相述ぶる 詞「是は思ひも寄らぬ仰、折悪う夫由良之助は他行、去ながら若し宿に居りましてお目に掛り申さうならば、御深切の段千萬、忝う存じます、言致した時は、故殿様の御恩に預り、御知行頂戴致し罷在る故、本蔵様の娘御を貰ひませう、然らば呉れうと云約束は申したれども、只今は浪人、人遣とてもござらぬ内へ、如何に約束なればとて、大身な加古川殿の御息女、世話に申す挑灯に釣鐘、釣合はぬは不縁の基、ハテ結納を遣はしたと申すではなし、どれへなりと外々へ、御遠慮なう遣はされませと申さる、でござりませうと、聞いてはッとは思ひながら 詞「アノまあお石様のおつしやる事、いかに卑下なされうとて、本蔵と由良之助様、身上が釣合はぬとな、そんならば申しませう、手前の主人は小身故、家老を勤むる本蔵は五百石、鹽治殿は大名、御家老の由良之助様は千五百石、すりや本蔵が知行とは、千石違ふを合點で言致はなされぬか、只今は御浪人、本蔵が知行とは皆違うてから五百石、イヤ其お詞違ひます、五百石は扱置き、一萬石違うても、心と心が釣合へば、大身の娘でも嫁に取るまい物でもない、ム、こりや間所お石様、心と心が釣合はぬとおつしやるは、どの心じやサア聞かう、主人鹽治判官様の御生害、御短慮とは云ひながら、正直を元とする御心より發りし事、それに引替へ師直に金銀を以て媚諂ふ、追従武士の祿を取る本蔵殿と、二君に仕へぬ由良之助が

大事の子に、釣合はぬ女房は持たされぬと、聞きも敢へず膝立直し「詔ひ武士とは誰が事、様子に依ては聞捨てられぬ、そこを赦すが娘の可愛さ、夫に負けるは女房の常、祝言有らうが有るまいが、言號有るからは、天下晴れての力彌が女房」ム、面白、女房ならば夫が去る、力彌に代つて此母が、去つた〜と言放し、心隔の唐紙を、はたと引閉て入りける、娘はわツと泣出し、折角思ひ思はれて、言號した力彌様に、逢はせて遣るとのお詞を、便に思うて来た物を、姑御のどう欲に「去られる覺はわたしやない、母様どうぞ詫言して、祝言させて下さりませと、縋り掛けば母親は、娘の顔をつく〜と、打眺め〜、親の欲目かしらねども、ほんに其方の美容なら、十人並にも勝つた娘、好い聲をがなと詮議して、言號した力彌殿、尋ねて来た甲斐もなう、聲にしらす去つたとは、義理にも言はれぬお石殿、姑去は心得ぬ」ム、〜扱は浪人の身の縁邊なう、筋目を言立て、有徳な町人の聲に成つて、義理も、法も忘れたな、ナウ小浪、今言ふ通りの男の性根、去つたといふを面當、欲しがる所は山々、外へ嫁入する氣はないか、コレ大事の所、泣かすとも確りと返事仕や、コレどうじゃ、どうじゃと、尋ぬる親の氣は張弓、アノ母様の胸欲な事おつしやります、國を出る折父様のおつしやつたは、浪人しても大星力彌、行儀といひ器量といひ、仕合な聲を取つた、貞女兩夫に見えず、譬へ夫に別れても又の夫を設けなよ、主有る女の不義同然、必ず〜寢覺にも、殿御大事を忘る、な、由良之助夫婦の衆へ孝行盡し、夫婦中睦まじい逆あじやらにも、格氣はして去らるゝな、案せうかとして隠さすと、懐妊に成つたら早速に、知らせて呉れとおつしやつたを、わたしや能う覺えて居る、去られて往んで爺様に、苦に苦を懸けてどう言うて、どう言譯が有らうとも、力彌様より外に餘の殿御、わしやいや〜と一筋に、戀を立てぬく心根を、

聞くに堪兼ね母親の、涙一途に突詰めし、覺悟の刀抜放せば、母様は何事と、押留められて顔を上げ「何事とは曲がない、今もそなたが言ふ通り、一時も早く祝言させ、初孫の顔見たいと、娘に甘いは爺の習、悦んでござる中へ、まだ祝言もせぬ先に、去られて戻りました逆、どう連れて往なれうぞ、というて先に合點せにや、仕様、もやうもないはいの、殊にそなたは先妻の子、わしとはななぬ中じや故、およそにしたかと思はれては、どうも生きては居られぬ義理、此通を死だ跡で、爺御へ言譯してたもや」アノ勿體ない事おつしやります、殿御に嫌はれわたしこそ死すべき筈、生きてお世話に成る上に、苦を見せまする不孝者、母様の手にかけて、わたしを殺して下さいませ、去られても殿御の内、爰で死ぬれば本望じや、早う殺して下さいませ」オッオオよう言やつた出かしやつた、そなた計り殺しはせぬ、此母も三途の伴、そなたをおれが手に懸けて、母も追付跡から行く、覺悟は宜いかと立派にも、涙留めて立掛り「コレ小浪、アレあれを聞きや、表に虚無僧の尺八、鶴の巢籠、鳥類でさへ子を思ふに、科もない子を手に懸けるは、因果と因果の寄合と、思へば足も立ちかねて、震ふ拳を漸に、振上ぐる刃の下、尋常に座を占め手を合せ「南無阿彌陀佛と、唱ふる中より御無用と、聲懸けられて思はずも、緩みし拳尺八も、俱にひとつと静まりしが「オ、さうじや、今御無用と止めたは、虚無僧の尺八よな、助けたいが山々で、無用といふに氣おくれし、未練なと笑はれな、娘覺悟はよいかやと、又振上ぐる又吹出す、とたんの拍子に又御無用」ム、又御無用と止めたは、修行者の手の内か、振上げた手の中か、イヤお刀の手中御無用、お力彌に祝言させう、エ、さういふ聲はお石様、そりや眞實か誠かと、尋ぬる棟の内よりも「あひに相生の、松こそ目出度かりけれど、祝儀の小謠白木の小四方、目八分に携へ出で「義理ある中の一人娘、

殺さうと迄思詰めたとなせ様の心底、小浪殿の貞女、志が最愛しさ、爲せにくい祝言さす其代り、世の常ならぬ嫁の盃、請取るは此三方、御用意あらばと指置けば、少しは心休まりて、抜きたる刀鞘に納め
 詞「世の常ならぬ盃とは、引出物の御所望ならん、此二腰は夫が重代、刀は正宗、指添は浪の平行安、家にも身にも替へぬ重寶、是を引出と皆まで言はさす」
 詞「浪人と侮つて價の高い二腰、まさかの時に寶拂へと、言はぬ計りの御引出、御所望申すはこれではない、ム、そんなら何が御所望ぞ、此三方へは加古川本藏殿の、お首を載せて貰ひたい、エ、そりや又何故な、御主人鹽治判官様、高師直にお恨有つて、鎌倉殿で一刀に切懸け給ふ、其時こなたの夫加古川本藏、其座に有つて抱留め、殿を支へたはッかりに、御本望も遂げられず、敵は漸薄手計り、殿はやみく御切腹、口へこそ出し給はね、其時の御無念は、本藏殿に借しみが懸るまいか、有るまいか、家來の身として其加古川が娘、あんかんと女房に持つやうな力彌とやと、思うての祝言ならば、此三方へ本藏殿の白髪首、否とあればどなたでも、首を並べる尉と姫、それ見た上で盃させう、サ、サア否か、應かの返答をと、尖き詞の理窟詰め、親子ははッと指俯向き、途方に昏れし折柄に
 詞「加古川本藏が首進上申す、お受取なされよと、表に控へし虚無僧の、笠脱捨て、徐々と内へ這入るは
 詞「ヤアお前は爺様、本藏様、爰へは何うして此形は、合點がいかにぬ是りや何うじやと咎むる女房
 詞「ヤアざわく」と見苦しい、始終の子細皆聞いた、そち達に知らさず爰へ来た様子は追つて、先づ黙れ、其許が由良の助殿御内證お石殿よな、今日の時宜斯あらんと思ひ、妻子にも知らせず、様子を窺、加古川本藏、案に違はず拙者が首、御引出に欲しいとな、ハ、ハ、ハ、ハ、否はやそりや侍のいふ事、主人の怨を報はんといふ所存もなく、遊興に耽り、大酒に性根を亂し、放埒なる身持、日本一の阿房

の鏡、蛙の子は蛙に成る、親に劣らぬ力彌めが大白痴、狼狽武士のなまくら銅、此本藏が首は切れぬ、馬鹿盡すなと踏碎く、破三方のふち放れ、此方から聲に取らぬ、ちよこさいな女めと、言はせも果てず
 詞「ヤア過言なぞ本藏殿、浪人の錯刀、切れるか切れぬか鹽梅見せう、不祥ながら由良の助が女房、望む相手じやサア勝負、勝負くと据引上げ、長押に懸けたる鍵追取り、突つか、らんす其氣色、是は短氣なマア待つてと、止め隔つる女房娘
 詞「邪魔ひろぐなとあらけなく、右と左へ引退くる、間も有らせず突つかくる、鍵のしほ首引掛み、振つて拂へば身を背け、諸足縫はんと閃かす、乃棟を蹴つて蹴上ぐれば、拳放れて取落す、鍵奪はれじと走寄る、腰際帯際引掛み、どうど打付け動かせず、膝に引敷く強氣の本藏、敷かれてお石が無念の切齒、親子ははあく危む中へ、驅出る大星力彌、捨てたる鍵を取る手も見せず、本藏が馬手の肋、弓手へ通れと突通す、うんと計りにカッばと伏す、コハ情なやと母娘、取付き歎くに目も懸けず、止刺さんと取直す
 詞「ヤア待て力彌早まるなと、鍵引留めて由良之助、手負に向ひ
 詞「一別以來珍らし、本藏殿、御計略の念願届き、聲力彌が手に係つて、嘸本望でござらうのと、星を指いたる大星が、詞に本藏目を見開き
 詞「主人の憐愍を晴さんと此程の心遣、遊所の出合に氣を緩ませ、徒黨の人数は揃ひつらん、思へば貴殿の身の上は、本藏が身に有るべき筈、當春鶴が岡造營の砌、主人桃井若狭助、高師直に恥しめられ、以ての外憤り、某を密に召され、まつかうくの物語、明日御殿にて出喰せ、一刀に討留めると、思詰めたる御顔色、留めても留らぬ若氣の短慮、小身故に師直に、賄賂遊きを根に持つて、恥しめたと知つたる故、主人に知らせず不相應の、金銀衣服蓋の物、師直へ持参して、心に染まぬ諂ひも、主人を大事と存するから、賄賂課せ彼方から、過つて出た故に、切るに切られぬ拍

子抜け、主人が恨もさらりと晴れ、相手代つて鹽治殿の、難儀と成つたは則ち其日 詞「相手死なすば切腹にも及ぶまじと、抱留めたは思ひ過した本蔵が、一生の誤は、娘が難儀としらかの此首、聲殿に進せたまさ 詞「女房娘を先へ登し、媚語ひしを身の科に、お暇を願うてな、道を替へてそち達より二日前に京着、若い折の遊藝が益に立つた四日の内、こなたの所存を見抜いた本蔵、手に懸れば恨を晴れ、約束の通り此娘、力彌に添はせて下さらば、未來永劫御恩は忘れぬ 詞「エレ手を合して頼入る、忠義にならでは捨てぬ命、子故に捨つる親心、推量有れ由良殿、といふも涙に咽返れば、妻や娘は有るにもあられず、實に斯とは露しらす、死におくれたはッかりに、お命捨つるはあんまりな、冥加の程が恐ろしい、赦して下され父上と、かッばと伏して泣叫ぶ、親子が心想ひやり、大星親子三人も、俱に萎れて居たりしが、ヤア〜本蔵殿 詞「君子は其罪を悪んで此人を悪ますといへば、縁は縁恨は恨と、格別の沙汰も有るべきにと、無根に思はれんが、所詮此世を去る人、底意を明けて見せ申さんと、未前を察して奥庭の、障子さらりと引明ければ、雪を束ねて石塔の、五輪の形を二ツまで、造立てしては大星が、成行く果を願はせり、となせは賢しく 詞「ム、御主人の怨を討つて後、二君に仕へず消ゆるといふお心の雪、力彌殿も其心で、娘を去つたの胸欲は、御不便餘つてお石様、恨んだがわしや悲しい、となせ様のおつしやる事、玉椿の八千代まで共祝はれず、後家に成る嫁取つた、此様な目出度悲しい事はない 詞「斯云ふ事がいやさに、酷う難面いふたのが、無憎かつたでござんしよなう、イ、エイナ、わたしこそ腹立つま、町人の聲に成つて、義理も法も忘れたかといふたのが、恥しいやら悲しいやら、どうも顔が上げられぬお石様、氏も器量も勝れた子、何として此様に、果報拙い生れやと、聲も涙に咳上ぐる、本蔵熱き涙を押へ、ハッア

ア嬉しや本望や 詞「吳王を諫めて誅せられ、辱を笑ひし吳子背が忠義は取るに足らず、忠臣の鑑とは唐土の豫讓、日本の大星、昔より今に至る迄、唐と日本にたつた二人、其一人を親に持つ、力彌の妻に成つたるは、女御更衣に供はるより、百倍勝つてそちが身は、武士の娘の手柄者、手柄な娘が聲殿へ、お引の目録進上と懐中より取出すを、力彌取つて押戴き、披見ればコハいかに、目録ならぬ師直が屋敷の案内一々に、玄關長屋侍部屋、水門物置柴部屋まで、繪圖に委しく書付けたり、由良之助はッと押戴き 詞「ヘッエ有難しく、徒黨の人数は揃へども、敵地の案内知れざる故、發足も延引せり、此繪圖こそは孫吳が秘書、我爲の六韜三略、兼て夜討と定めたれば、織梯子にて塀を越し、忍入るには縁側の、兩戶外せば直に居間、爰を仕切つて斯攻めてと、親子が悦、手負ながらもぬからぬ本蔵 詞「イヤ〜夫は僻言ならん、用心厳しき高師直、障子襖は皆尻さし、兩戸に合栓合櫃、扶じては外れず大槌にて、毀たば音して用意せんかそれいかゞ、オ、夫にこそ術あれ 詞「凝つては思案に能はずと、遊所よりの歸るさ、思ひ寄たる前栽の雪持竹、兩戸をはづす我工夫、仕様を爰にて見せ申さんと、庭に折しも雪深く、さしにも強き大竹も雪の重さに、ひいはりとしわりし竹を、引廻して鴨居に嵌め、雪に拂むは弓同然 詞「此如く弓を拵へ弦を張り、鴨居と敷居に嵌置きて、一度に切つて放つ時は、まつ此様にと積つたる枝打拂へば雪散つて、伸びるは直なる竹の力、鴨居撓んで溝はづれ、障子残らずばた〜、本蔵苦しさ打忘れ、ハ、アしたりし 詞「計略といひ義心と云ひ、個程の家來を持ちながら、了簡も有るべきに、淺きたくみの鹽治殿、口惜しき行跡やと、悔を聞くに御主人の御短慮なる御仕業、今の忠義を戦場のお馬先にて盡さばと、思へば無念に閉塞がる、胸は七重の門の戸を、洩るゝは涙計りなり、力彌は徐々下立つて、父が前に手をつかへ

一本蔵殿の寸志により、敵地の案内知れたる上は、泉州堺の天河屋義平方へも通達し、荷物の工面仕らんと、聞きも敢へず何さく、山科に有る事隠れなき由良之助、人数集めは人目有り、一先堺へ下つて後、あれから直に發足せん、其方は母嫁となせ殿諸共に、跡の片付諸事萬事何も彼も、心残りのなき様に、ナ、ナ、コリヤ、あすの夜舟に下るべし、我は幸ひ本蔵殿の忍姿を我姿と、嬰婆打掛けて編笠に、恩を戴く報謝がへし、未來の迷晴さん爲、今宵一夜は嫁御寮へ、舅が情の戀慕流し、歌口濕して立出れば、兼て覺悟のお石が歎、御本望をと計りにて、名残惜しさの山々を、言はぬ心のいちらしさ、手負は今を知死期時、爺様申しと、様と、呼べど答へぬだんまつま、親子の縁も玉の緒も切れて一世の愛き別、わつと泣く母泣く娘、俱に死骸にむかひちの、回向念佛は戀無常、出行く足も立留り、六字の御名を笛の音に、南無阿彌陀佛、なむあみだ、是や尺八煩惱の、枕並ぶる追善供養、聞の契は一よぎり、心残して三重立出る。

第十

津の國と、和泉河内を引受けて、餘所の國まで舟寄せる、三國一の大湊、堺というて人の氣も、賢しき町に疵もなき、天河屋義平方とて、金から金を儲溜め、見かけは軽く内證は、重い暮しに重荷をば、手づから見世で縮括り、大船の船頭、是で丁度七棹、請取りましたと指擔ひ、行くも黄昏亭主はほつと、日和もよし好い出船と、言ひつ、煙草烟管筒、吸付けにこそ入りにけれ、家の世繼は今年四つ、傳は十九の九額、親方よりも我遊、サア始まりじやく、面白い事、泣辨慶の信太妻、東西、爰に哀を、止めし

は、此よし松に止めたり、元來其身は父計、母は去られて、往なれたで、泣辨慶と申すなり、コリヤ伊五よ、最う人形廻しいやく、喚さんと呼んでくれいやい、ソレ其様に無理言はしやると、旦那さんというて此方はんも追出さすぞ、跡の月からお釜が割れて、手代は手代で鼠の子か何ぞの様に、目が明かぬというて追出し、飯椀は大きな欠したというて暇遣り、今ではこなはんと、わしと旦那はんとはツかり、どうで此内を脱走するのかして、ちよこ、舟へ荷物が行く、驅落するなら人形箱持つて往かうぞや、イヤ人形廻しよりおりや最う寝たい、アレ最うおれ迄を喰す程にの、宜ござるはおれが抱いて寝てやる、いやじや、何故に、われには乳がない物おりやいやじや、アレ又無理言はしやる、こなたが女の子なら、乳よりよい物が有るけれど、何をいうても相違同士、これも涙の種ぞかし、折節表へ侍二人、誰ぞ頼まう義平殿はお宿にかと、云ふも潜めく内からつこと、旦那様は内に、我等、人形廻して闘しい、用があらば這入つた、イヤ案内致さぬも無禮、原郷右衛門、大星力彌、密に御意得たいと申しておくりやれ、何じや腹へり右衛門大飯吸彌、こりや堪らぬ、アレ旦那様大きなけ見えましてと、叫ぶよし松引連れて奥へ入れば、亭主義平、又阿房めがしやなり聲と、言ひつ、出て、エ、郷右衛門様力彌様、サアまあ是へ、御免有れと座を占めて郷右衛門、一段々貴公のお世話故萬事相調ひ、由良之助もお禮に參る筈なれ共、鎌倉へ出立も今明日、何かと取込み、悴力彌を名代として失禮のお断り、是は、御念の入つた儀、急に御發足とござりますれば、何かとお取込でござりませうに、成程郷右衛門殿の仰の通り、明早早出立の取込、自由ながら私に參りお禮も申し、又お頼み申した跡荷物も、彌、今晚で積み仕舞か、お尋ね申せと申渡しましてござります、成程お誂の彼道具一まき、段々大廻しで遣はし、小手脇當小道具の類

は、長持に仕込み以上七棒、今晚出船を幸ひ船頭へ渡し、残るは竊挑燈鉢巻、是は陸荷で跡より遣はす積でござります、郷右衛門様お聞きなされましたか、大いお世話でござります、いか様主人鹽治公の御恩を受けた町人も多くござれ共、天河屋の義平は、武士も及ばぬ男氣な者と、山良殿が見込み、大事を頼み申されたも尤、併し鍵長刀は格別、鎖袷の織梯子のと申す物は常ならぬ道具、お買ひなされる、に不思議は立ちませなんだかな、イヤ其儀は、細工人へ手前の所は申さず、手附を渡し金と引替に仕る故、何處の誰と先様には存じませぬ、成程尤、次手に力彌めもお尋ね申しましよ、内へ道具を取込み、荷物の拵へ、御家來中に見る目はどうしてお忍びなされましたな、ホウ夫も御尤のお尋、此儀を頼まれますると、女房は親里へ歸し、召使は垂邪を付けて、段々に暇遣はし、残るはあはうと四ツになる物、洩れる筋はござりませぬ、扱々驚入りましてござります、其旨を親共へも申聞かして安堵させませう、郷右衛門殿お立ちなされませぬか、いか様出立に心急ぎます、義平殿お暇申しませう、然らば由良之助様へも、宜しう申聞かませう、おさらば、さらばと引別れ、二人は旅宿へ立歸る、表閉めんとする所へ、此家の舅太田了竹 調「オットしめまい宿にかと、すつと通つてきよろ〜眼 調「是は親仁様ようこそお出で、扱此間女房そのを養生がてら遣はし置き、嗚お世話お薬でも給へまするかな、ア、薬も呑みます、食も喰ひます、夫は重疊、イヤ重疊でござらぬ、手前も國許に居た時は、斧九太夫殿から扶持も貰ひ相應の身代、今は一僕さへ召使はぬ所へ、さしてもない病氣を養生さしてくれよと指越されたは、子細こそあらん、ガ夫はとも有れ、生若い女、不埒が有つては貴殿も立たず、身共も鐵腹でも切らねばならぬ、所で一ツの相談、先づ世間は暇やり分、暇の状をおこして置いて、ハテ何時でも爰の勝手に、

呼戻す迄の事、たつた一筆つひ書いて下されと、輕う云ふのも物工、一物有りとなりながら、否といはゞ女房を直に戻さん戻りては、頼まれた人々へ詞も立たすと、取つ置いつ思案する程 調「否かどうじや、不得心なら此方にも、片時置かれ戻すからは此了竹も調込み、へたばつて俱に厄介、否か應かの返答と、込付けられて道の義平、工に乗るが口惜しやと、思へどこちらの一大事見出されてはと懸視、取つて引寄せさら〜と、書認め 調「是やるからは了竹殿、親でなし子でなし、重ねて足踏お仕やんな、底工ある暇の状、弱身を喰うてやるが残念、持つて行きやれと投付ければ、手早く取つて懐中し 調「オ、よい推量、聞けば此間より浪人共が入込み、ひそめくより、そのめに問へども知らぬとぬかす、何仕出さうも知れぬ聲、娘を添はして置くが氣遣、幸ひ左る歴々から貰掛ければ、去状取ると直に嫁入さする相談、一杯参つて重疊〜、ホウ醫へ去状なきとて、子までなしたる夫を捨て、外へ嫁入する性根なら、心は残らぬ勝手〜、オ、勝手にするは親のこうけ、今宵の内に嫁らす、ヤア細言吐かすと早歸れと、肩先掴んで門口より、外へ蹴出して跡びつしやり、遣々起きて 調「コリヤ義平、なんぼ掴んで擲出しても、嫁らす先から仕拵へ金、温まつて蹴られたりや、どうやら痴氣が直つたと、口は達者に足腰を撫でつ擦りつ逃げばえに、咳き〜立歸る、月の曇に影隠す隣家も寝入る亥の刻過、此家を目懸けて捕手の人数、十手早細腰挑燈、灯影を隠して窺ひ〜、犬と思しき家來を招き、耳打すればさし心得、門の戸劇しく叩く、誰じや〜も及び腰 調「イヤ背に來た大船の船頭でござる、船賃の算用が遑うた、一寸明けて下され、ハテ仰山な、僅な事である明日來た〜、イヤ今夜受ける舟、仕切つて貰はにや出されませぬと、いふも聲高近所の間と、義平は立出で何心なく門の戸を、明るると其儘捕つた〜、動くな上意と追取巻く、コハ何

故と四方八方、眼を配れば捕手の兩人 詞「ヤア何故とは横道者、併鹽治判官が家來大星由良之助に頼まれ、武器馬具を買調へ、大廻しにて鎌倉へ遣はす條、急ぎ召捕り拷問せよとの御上意、遅れぬ所じや腕廻せ、是は思ひも寄らぬお咎、左様の覺聊かなし、定めて夫は人違へと、いはせも立てず 詞「ヤアぬかすまい、争はれぬ證據有り、ソレ家來共、はつと心得持ち來るは、宵に積んだる莖筵荷の長持、見るより義平は心も空、ソレ動かすなと四方の十手、其間に荷物を切解き、長持明けんとする所を、飛懸つて下部を蹴退け、蓋の上にとツかと座り 詞「ヤア俺忽千萬、此長持の内に入置いたは、去る大名の奥方より、お誂のお手道具、お具足櫃の笑ひ木、笑ひ道具の注文迄、其名を記置いたれば、明けさしては歴々のお家のお名の出る事、御覽有つてはいづれもの、お身の上にも懸りませうぞ、ヤア彌胡亂者、中々大抵では白狀致すまい、ソレ申合せた通り、合點でござると一問へ驅入り、一子よし松を引立出で 詞「サア義平、長持の内は兎も有れ、鹽治浪人一統に固まり、師直を討つ密事の段々儂能く知りつらん、有りやうに言へばよし、言はぬと忽ち忤が身の上、コリヤ是を見よと抜刀、稚き喉に指付けられ、はつとは思へど色も變せず 詞「ハ、ハ、ハ、女童を責める様に、人質取つての御詮議、天河屋の義平は男でござるぞ、子に羈され存せぬ事を、存じたとは得申さぬ、曾て何にも存せぬ、知らぬ、知らぬといふから金輪ならく、憎しと思はゞ其忤、我見る前で殺したく、テモ胴性骨の太い奴、管鑿鉄炮鎖袷、四十六本の印まで 詞へ遣つたる儂が、知らぬというて言はして置かうか、白狀せぬと一寸試、一分刻に刻むが何と、オ、面白刻まれう、武器は勿論、公家武家の冠烏帽子、下女小者が藁沓まで、買調へて賣るが商人、それ不思議とて御詮議あらば、日本に人種は有るまい、一寸試も三寸細も、商賣故に取らる、命、惜しいと思はぬサア殺

せ、忤も目の前突け、一寸試は腕から切るか胸から裂くか、肩骨脊骨も望次第と、指付け突付け我子をもぎ取り、子に羈されぬ性根を見よと、絞殺すべき其血相 詞「ヤレ聊爾せまい義平殿、暫しと長持より、大星由良之助良金、立出る様見て恠り、捕手の人々一時に、十手捕細打捨て、遙下つて座を占むる、威儀を正して由良之助、義平に向ひ手をつかへ 詞「扱々驚入つたる御心底、泥中の蓮、砂の中の金とは貴公の御事、さもあらん左もさうづと、見込んで頼んだ一大事、此由良之助は微塵聊、お疑ひ申さね共 詞「馴染近付でなき此人々、四十人餘の中にも、天河屋の義平は生ながらの町人、今にも捕へられ詮議に逢はば、如何あらん、何とか言はん、殊に寵愛の子も有れば、子に迷ふは親心と評議區々、案じに胸も休まらず、所詮一心の定めし所を見せ、古傍輩の者共へ安堵させん爲、爲まじき事とは存じながら右の仕合、俺忽の段は眞平 詞「花は櫻木、人は武士と申せども、いつかな 詞「武士も及ばぬ御所存、百萬騎の強敵は防共、左程に性根は居らぬ物、貴公の一心を借受け我々が手本とし、敵師直を討つならば、譬へ巖石の中に籠り、鐵洞の内に隠る、ども、やはか仕損じ申すべき 詞「一人有る中にも人なしと申せ共、町家の中にもあれば有る物、一味徒黨の者共の爲には、産土とも、氏神とも尊み奉らすんば、御恩の冥加に盡果てませう 詞「静謐の代には賢者も顯はれず、エ、惜しいかな悔しいかな、亡君御存生の折ならば、一方の旗大将、一國の政道お預け申したとて、惜しからぬ御器量、是に並ぶ大徳文吾、矢間十太郎を始め、小寺、高松、堀尾、板倉、片山等、潰れし眼を開かする、妙薬名醫の心魂、有りがたし有りがたしと逡巡つて三拜人々も、無骨の段眞平と、巖に頭を摺付くる 詞「ヤレ夫は御迷惑、お手上げられて下さりませ、惣驍人と馬には、乗つて見よ添うて見よと申せば、お馴染ない御方々は、氣遣に思召すも

尤、私元は軽い者、お國の御用承つてより、經上つた此身代、判官様の様子承つて俱に無念、何卒此恥辱雪ぎやうはないかと、力んで見ても秦龜のじだんだ、及ばぬ事と存じた所へ、由良之助様のお頼こそ、心得たと向見す、俱にお力付ける計り、情ないは町人の身の上、手一合でも御扶持を戴きましたらば、此度の思し立、袖褌に取付いてなりともお供申し、いづれも様へ息つぎの、茶水でも汲みませうに 詞「夫も叶はぬは、よく〜町人は淺ましいもの、是を思へばお主の御恩、刀の威光は有りがたい物、それ故にこそお命捨てるる、御羨ましよう存じまする、猶も冥途で御奉公、お序に義平めが、志もお執成と、厚き詞に人々も、思はず涙催して、奥歯嚙割る計りなり、山良之助取敢へす 詞「今晚鎌倉へ出立、本望遂ぐるも百日とは過すまじ、承れば御内證迄、省き給ふ由重々のお志、追付夫も呼返させ申さん、御不自由も今暫く、早お暇と立上る、ヤレ申さば目出度い旅立、何れも様へも御酒一ツ 詞「否夫は、ハテ扱祝うて手打の蕎麥切、ヤ手打とは吉相、然らば大鶯矢間御兩人は跡に残り、先手組の人々は、郷右衛門力彌を誘ひ、佐田の森迄お先へ、いざ此方へと亭主が案内、お辭宜は無禮と由良之助、二人を伴ひ入る月と、又出る月と二ツ輪の、親と夫の中に立つ、おそのは一人小挑燈、暗き思も子故の闇、あやなき門を叩き 詞「伊五よ〜と呼ぶ聲が、寐耳にふツと阿房は驅出で 詞「おれ呼んだは誰じゃ、化生の者か迷の者か、イヤそのじゃ、爰明けてくれ、さういっても氣味が悪い、必ずばあといふまいぞと、言ひつ、門の戸押開き 詞「エ、おゑさんかようござんしたの、一人歩行をするとナ、病犬が嚙むぞへ、オ、犬になりとも嚙れて死んだら、今の思は有るまいに、おりや去られたはいや、どんな事に成らんしたなア、且那殿は寐てか、イ、エ、留主か、イ、エ、何の事じゃぞや、何の事やらわしも知らぬが、宵の口に猫が

鼠を取つたかして、捕つた〜と大勢来たが、ちやつとおれは蒲團被つたればつひ寐入つた、今其和郎達と奥で酒盛、さゝんざやつてござんす、ハテ合點のいかぬ、さうしてばんは寐たか、アイ是はよう寐てでござんす、且那殿と寐たか、イ、エ、われと寐たか、イ、エ、つひ一人ころりと、なせ仰して寐さしてくれぬ、夫でもわしにも且那樣にも、乳がないというて泣いてはツかり、ヘエ、可愛やさうである〜、夫ればツかりが實の事と、わツと泣出す門の口、空に知られぬ雨の足、乾く袂もなかりける 詞「ヤイ〜伊五めどこに居ると、呼立て出る主の義平、アイ〜爰にと驅入る跡、尻目に懸けて白痴めが 詞「奥へ往て給仕ひろげと、呵り追遣り門の戸を、さすを押へて 詞「コレ且那殿、言ふ事がある爰明けて、イヤ聞く事もなし言ふ事も、ないしよう一ツの畜生め、穢はしい其處退かう 詞「イヤ親と一所でない證據、それ見て疑晴れてたべと、戸の隙よりも投込む一通、拾取る間に附込む女房、夫は書物一目見て 詞「コリヤ最前遣つた暇の狀、是戻してどうするのじゃ、どうするとは聞えませぬ、親子竹の悪工は、常からよう知つての事、譬へどの様な事有るとて、何故暇狀を下んした、持つて戻ると嫁らすと、思ひも寄ぬ拵へ、嬉しい顔で油断させ涕紙袋の去狀を、盗んでわしは逃げて來ました、お前はよし松可愛ないか、去つてあの子を繼母に、掛ける氣かいの胸欲など、繼り歎けば 詞「ヤア其恨は逆捻、此内を往なす折、言合めたを何と聞いた、様子有つて其方に暇遣るでなし、暫の内親里へ歸つて居よ、舅了竹は、元九太夫が扶持人、心解けねば子細は言はぬ、病氣の躰にもてなし、起臥も自由にすな、櫛も取るなど言付け遣つたをなせ忘れた 詞「散亂髪で居る者を、嫁に娶るとは言はぬはやい、何のおのれがよし松が可愛かる 詞「晝は一日あはうめが、歎し賺せど夜になると、嗚〜と尋ね居る、か、は追付取う爰へと、だまして寐させど能う寐入らず、

呵つて寐さそと擲付け、怖い顔すりや聲上げず、「しくく泣いて居るを見ては、筋節が碎けて堪へらる、物じやない、是を思へば親の恩、子を持つて知るといふ、不孝の罰と我身をば、悔んで夜と俱泣明す
 「昨夜も三度抱上げて、最う連れて往こ、抱いて往こと、門口迄出たれども、一夜でたんうするでもなし、五十日暇取るやら、百日隔で、置かうやら、知れぬ事に馴染しては、跡の難儀と五町三町、震振行いて擲付け、寐さしては徐と轉し、我が肌付くれば現にも、乳を探してしがみつぎ、僅な間の別でさへ、戀焦るゝもの一生を、引分けうとは思はね共、「是非に及ばず暇の状、了竹へ渡せしを、内證にて受取つては、親の許さぬ不義の科、快からず持つて歸れ、是迄の縁、約束事、死んだと思へば事済むと、斷離よき男氣は、常を知る程なほ悲しく、「此家に居るとお前が立たず、内へ去ぬると嫁入にやならず、悲しい者はわたし一人、「是が別に成らうも知れぬ、よし松を起してちよつと逢して下さんせ、「イヤそれならぬ、今逢うて今別るゝ其身、跡の思がなほ不便な、分けて今宵はお客も有り、くどく言はずと早くお行きやれ、それでも一寸よし松に、「ハテ扱未練な、跡の難儀を思はずやと、無理に引立て去状も、俱に渡して門先へ、心強くも突出し、「子が可愛くば了竹へ詫言立て春迄も、圍籠ひ貫は、思案もあらん、それ叶はずは是限りと、門の戸閉めて内に入る、ナウ夫が叶ふ程なれば、此思はござんせぬ、難面いぞや我夫、「科もない身を去るのみか、我子に迄逢さぬは、あんまり酷い胸欲な、顔見るまでは何ほでも、去なぬ去なぬと門打叩き、「情じや慈悲じや、爰明けて、寐顔なりとも見せて給へ、コレ手を合せ拜みます、むごいはいのだとどうど伏し、前後不覺に泣きけるが、ハア恨むまい歎くまい、「なまなかに顔見たら、母様かと取付いて、離しませまいし離れも成るまい、今宵去ぬれば今宵の嫁入、翌日まで待たれぬわしが命、さ

らはでござるさらばやと、言うては戸口へ耳を寄せ、若や我子が聲するか、顔でも見せて呉れるかと、窺ひ聞けど音もせず、ハア、是非もなや是迄と、思切つて驅出す向へ、目計出した大男、道を塞いで引捉へ、是はといふ間も情なや、すらりと抜いて島田搦、根よりふつつと切取つて、懷までを引渡へ、何方ともなく逃行きし、無法無息ぞ是非もなき、ナウ憎くや腹立や、何者か酷たらしう髪切つて、替いた物まで取つて往んだ、櫛笄の盗人なら、いつぞ殺してくと泣叫ぶ、聲に驚き義平は思はず驅出でしが、ハア爰が男の魂の、亂口よと切齒り、躊躇ふ中に奥よりも、「御亭主く、義平殿と立出る由良之助、「一段々御深切の御馳走、お禮は鎌倉より申越さん、猶跡荷物の儀、早飛脚を以てお頼み申す、夜の明けぬ内早お暇、いか様、今暫しとも申されぬ刻限、道中御堅勝で、御吉左右を相待ちまする、着致さは早速、書翰を以てお知らせ申さう、返すくも此度のお世話、詞でお禮は言盡されませぬ、ソレ矢間大驚、御亭主へ置土産、はつと文吾十太郎、扇を時の白臺と、載せて出でたる一包、「是は貴公へ是は又、御内室おその殿へ、些少ながらと指出す、義平はむつと顔色變り、「詞で言はれぬ禮と有れば、イヤコレ禮物受けうと存じ、命がけのお世話は申さぬ、町人と見侮り、小判の耳で面張るのか、イヤ我々は娑婆の暇、貴殿は殘る此世の宿縁、御臺かほよ御前の儀もお頼み申さん爲、寸志計と言殘し、表へ出れば猶むつと、「性根魂を見逃へたか、踏付けた仕方あた忌々し、穢はしと包みし進物蹴飛ばせば、包ほどけて内よりばらり、女房驅寄り、「コレ是はわしが櫛笄切られた髪、ヤアくく此一包は去状、ホイ扱は最前切つたのは、ホウ此由良之助が、大驚文吾を裏道より廻らせ、根よりふつつと切らした心は、いかな親でも尼法師を、嫁らさうとも言ふまいし、嫁に取る者は猶有るまい、其髪の延びる間も凡そ百日、我々本望遂げるも百日は

過ぎ、討課せられた後目出度祝言、其時には櫛笄、其切髪を添に入れ、笄鬘の三國一、先づ夫までは尼の乳母、一季半季の奉公人、其肝煎は大鷲文吾、同、矢間十太郎、此兩人が連中へ大事は洩れぬといふ請判、由良之助は冥途から、仲人致さん義平殿、「ハア、重々のお志、お禮申せ女房、わたしが爲には命の親、イヤお禮に及ばず、返禮と申すも九牛が一毛、義平殿にも町人ならずば、俱に出立のお望幸かな、兼て夜討と存すれば、敵中へ入込む時、貴殿の家名の天河屋を、直に夜討の合詞、天と懸けなば河と答へ、四十人餘の者共が、天よ河よと申すなら、貴公も夜討にお出も同然、義平の字は義臣の義の字、平はたひらか、輒く本望、早やお暇と立出る、末世に天を山といふ、由良之助が孫吳の術、忠臣蔵とも言ひはやす、娑婆の言葉の定なき、わかれば別れて、三重、いでてゆく。

第十一

柔能く剛を制し、弱能く強を制するとは、張良に石公が傳へし秘法なり、鹽治判官高定の家臣、大星由良之助是を守つて、既に一味の勇士四十餘騎、獵船に取乗つて、苦深々と稻村が崎の油断を頼にて、岸の岩根に漕寄せて、先一番に打上るは、大星由良之助良金、二番目は原郷右衛門、第三番目は大星力彌、跡に續いて竹森喜多八片山源太、先手跡舟段々に、列を亂さず立出る、奥山孫七須田五郎、着たる羽織の合印、いろはにはへとと立並ぶ、勝田早見遠の森、音に聞えし片山源五、大鷲文吾かけやの大槌引提げ、「吉田岡崎ちりぬるを、わか手は小寺立川甚兵衛、不破前原深川彌次郎、得たる半弓手拵んで、上るは川瀬忠太夫、空に耀く、大星瀬平、よたれそつねならむうゐの、奥村岡野小寺が嫡子、中村矢島牧平賀、や

まけふこえて、あさぎりの、立並びたる丹野や若野、千葉に村松村橋傳治、鹽田赤根は長刀構へ、中にも磯川十文字、遠松杉野三村の次郎、木村は用意の織梯子、千崎彌五郎堀井の彌惣、同、彌九郎遊所の酒にゑひもせぬ、由良之助が智略にて、八尺許の大竹に、弦を懸けてぞ持ちたりける、後陣は矢間十太郎、遙跡より身を卑下し、出るは寺岡平右衛門、假名實名袖印、其數四十六人なり、鎧袴に黒羽織、忠義の胸當打揃ふ、實に忠臣のかな手本、義心の手本義平が家名、天と河との合詞、忘るな兼ての言合、矢間千崎小寺の面々、悴力彌を始とし表門より入れ、郷右衛門と某は裏門より入つて、相圖の笛を吹くならば、時分はよしと乗込めよ、取るべき首は只一ツと、由良之助に下知せられ、怒の眼一時に、館を遙に睨付け裏と表へ、三重、別れ行く、斯とはしらす、高武藏守師直は、由良之助が放埒に心も緩む油断酒、藝子遊女に舞謡はせ、樂師寺を上客にて身の程しらす大騒、果は雜混寝の不行儀に、前後もしらぬ寢入ばな、非常を守る番人の柝のみぞ残りけり、表裏一度に手筈を極め、矢間千崎不敵の二人、表門に忍寄り内の様子を窺へば、夜廻と思しき柝、遠音をさせば能き折と、例の嗜む織梯子、高扉へ打懸け、雲井までもと蜘蛛の、登り課せた扉の屋根、早柝の近付く音、ひらりと下りるを見付けし番人、スハ何者と驅寄るを取て引伏せ高小手、能い案内と息を留め、細先腰に引懸けて、柝、奪ひかつちかち、役所くを打廻り、覗ひ廻るぞ不敵なる、早裏門に呼子の笛、時分は好しと兩人は、柝、合せて天河と、貫の木外して大門をぐわらりと開けば力彌を始め、杉野木村三村の一黨、我もくと込入つて、見れば一面雨戸の固め、父が教へし雪折は、爰ぞと下知して丸竹に、弦を懸けたる雨戸の鴨居、敷居に挟んで一時に、一二三ツの拍子にて、懸けたる弦を丁と切れば、鴨居は昂り敷居は降り、雨戸外れてはたくば

呵つて寐さそと擲付け、怖い顔すりや聲上げず、「しくく泣いて居るを見ては、筋節が碎けて堪へらるゝ物じやない、是を思へば親の恩、子を持つて知るといふ、不孝の罰と我身をば、悔んで夜と俱泣明す
 「昨夜も三度抱上げて、最う連れて往こ、抱いて往こと、門口迄出たれども、一夜でたんうするでもなし、五十日暇取るやら、百日隔で、置かうやら、知れぬ事に馴染しては、跡の難儀と五町三町、震振行いて擲付け、寐さしては徐と轉し、我が肌付くれば現にも、乳を探してしがみつぎ、僅な間の別でさへ、戀焦るゝもの一生を、引分けうとは思はね共、「是非に及ばず暇の状、了竹へ渡せしを、内證にて受取つては、親の許さぬ不義の科、快からず持つて歸れ、是迄の縁、約束事、死んだと思へば事済むと、断離よき男氣は、常を知る程なほ悲しく、「此家に居るとお前が立たず、内へ去ぬると嫁入にやならず、悲しい者はわたし一人、「是が別に成らうも知れぬ、よし松を起してちよつと逢して下さんせ、「イヤをねならぬ、今逢うて今別るゝ其身、跡の思がなほ不便な、分けて今宵はお客も有り、くどく言はずと早くお行きやれ、それでも一寸よし松に、「ハテ扱未練な、跡の難儀を思はずやと、無理に引立て去状も、俱に渡して門先へ、心強くも突出し、「子が可愛くば了竹へ詫言立て春迄も、囚籠ひ貫はゞ思案もあらん、それ叶はずは是限りと、門の戸閉めて内に入る、ナウ夫が叶ふ程なれば、此思はござんせぬ、難面いぞや我夫、「科もない身を去るのみか、我子に迄逢さぬは、あんまり酷い胸欲な、顔見るまでは何ぼでも、去なぬ去なぬと門打叩き、「情じや慈悲じや、爰明けて、寐顔なりとも見せて給べ、コレ手を合せ拜みます、むごいはいのだうど伏し、前後不覺に泣きけるが、ハア恨むまい歎くまい、「なまなかに顔見たら、母様かと取付いて、離しもせまいし離れも成るまい、今宵去ぬれば今宵の嫁入、翌日まで待たれぬわしが命、さ

らばでござるさらばやと、言うては戸口へ身を寄せ、若や我子が聲するか、顔でも見せて呉れるかと、窺ひ聞けど音もせず、ハア、是非もなや是迄と、思切つて驅出す向へ、目計出した大男、道を塞いで引捉へ、是はといふ間も情なや、すらりと抜いて島田番、根よりふつと切取つて、懷までを引渡へ、何方ともなく逃行きし、無法無息を是非もなき、ナウ情くや腹立や、何者が酷たらしう髪切つて、書いた物まで取つて往んだ、櫛笄の盗人なら、いつぞ殺してくと泣叫ぶ、聲に驚き義平は思はず驅出でしが、ハア爰が男の魂の、亂口よと切齒り、躊躇ふ中に奥より、「御亭主、義平殿と立出る由良之助、「段々御深切の御馳走、お禮は鎌倉より申越さん、猶跡荷物の儀、早飛脚を以てお頼み申す、夜の明けぬ内早お暇、いか様、今暫しとも申されぬ刻限、道中御堅勝で、御吉左右を相待ちまする、着致さは早速、書翰を以てお知らせ申さう、返すくも此度のお世話、詞でお禮は言盡されませぬ、ソレ矢間大驚、御亭主へ置土産、はつと文吾十太郎、扇を時の白臺と、載せて出でたる一包、「是は貴公へ是は又、御内室おその殿へ、些少ながらと指出す、義平はむつと顔色變り、「詞で言はれぬ禮と有れば、イヤコレ禮物受けうと存じ、命がけのお世話は申さぬ、町人と見侮り、小判の耳で面張るのか、イヤ我々は娑婆の暇、貴殿は殘る此世の宿縁、御臺かほよ御前の儀もお頼み申さん爲、寸志計と言殘し、表へ出れば猶むつと、「性根魂を見違へたか、踏付けた仕方あた思々し、穢はしと包みし進物蹴飛ばせば、包ほどけて内よりばらり、女房驅寄り、「コレ是はわしが櫛笄、切られた髪、ヤア、コレ一包は去状、ホイ扱は最前切つたのは、ホウ此由良之助が、大驚文吾を裏道より廻らせ、根よりふつと切らした心は、いかな親でも尼法師を、嫁らさうとも言ふまいし、嫁に取る者は猶有るまい、其髪の延びる間も凡そ百日、我々本望遂げるも百日は

過ぎ、討課せた後目出度祝言、其時には、櫛笄、其切髪を添に入れ、笄鬘の三國一、先づ夫までは尼の乳母、「一季半季の奉公人、其肝煎は大鷲文吾、同、矢間十太郎、此兩人が連中へ大事は洩れぬといふ請判、由良之助は冥途から、仲人致さん義平殿、「ハア、重々のお志、お禮申せ女房、わたしが爲には命の親、「イヤお禮に及ばず、返禮と申すも九牛が一毛、義平殿にも町人ならずば、俱に出立とお望幸かな、兼て夜討と存すれば、敵中へ入込む時、貴殿の家名の天河屋を、直に夜討の合詞、天と懸けなば河と答へ、四十人餘の者共が、天よ河よと申すなら、「貴公も夜討にお出も同然、義平の字は義臣の義の字、平はたひらか、輒く本望、早やお暇と立出る、末世に天を山といふ、由良之助が孫吳の術、忠臣蔵とも言ひはやす、娑婆の言葉の定なき、わかれば別れて、「三重」いでてゆく。

第十一

柔能く剛を制し、弱能く強を制するとは、張良に石公が傳へし秘法なり、鹽治判官高定の家臣、大星由良之助是を守つて、既に一味の勇士四十餘騎、獵船に取乗つて、苦深々と稻村が崎の油断を頼にて、岸の岩根に漕寄せて、先一番に打上るは、大星由良之助良金、二番目は原郷右衛門、第三番目は大星力彌、跡に續いて竹森喜多八片山源太、先手跡舟段々に、列を亂さず立出る、奥山孫七須田五郎、着たる羽織の合印、いろはにはへとと立並ぶ、勝田早見遠の森、音に聞えし片山源五、大鷲文吾かけやの大槌引提げ、「吉田岡崎ちりぬるを、わか手は小寺立川甚兵衛、不破前原深川彌次郎、得たる半弓手拵んで、上るは川瀬忠太夫、空に耀く、大星瀬平、よたれそつねならむうの、奥村岡野小寺が嫡子、中村矢島牧平賀、や

まけふこえて、あさぎりの、立並ぶたる芦野や菅野、「千葉に村松村橋傳治、鹽田赤根は長刀構へ、中にも磯川十文字、遠松杉野三村の次郎、木村は用意の織梯子、千崎彌五郎堀井の彌惣、同、彌九郎遊所の酒にゑひもせぬ、由良之助が智略にて、八尺許の大竹に、弦を懸けてぞ持ちたりける、後陣は矢間十太郎、遙跡より身を卑下し、出るは寺岡平右衛門、假名實名袖印、其數四十六人なり、鎧袴に黒羽織、忠義の胸當打揃ふ、實に忠臣のかな手本、義心の手本義平が家名、「天と河との合詞、忘るな兼ての言合、矢間千崎小寺の面々、悴力彌を始とし表門より入れ、「郷右衛門と某は裏門より込入つて、相圖の笛を吹くならば、時分はよしと乗込めよ、取るべき首は只一ツと、由良之助に下知せられ、怒の眼一時に、船を遙に睨付け裏と表へ、「別れ行く、斯とはしらす、高武藏守師直は、由良之助が放埒に心も緩む油断酒、藝子遊女に舞謡はせ、樂師寺を上客にて身の程しらぬ大騾、果は雜混寝の不行儀に、前後もしらぬ寝入ばな、非常を守る番人の、柝のみぞ残りけり、表裏一度に手筈を極め、矢間千崎不敵の二人、表門に忍寄り内の様子を窺へば、夜廻と思しき、柝遠音をさせば能き折と、例の嗜む織梯子、高堀へ打懸け、「雲井までもと蜘蛛の、登り課せた扉の屋根、早柝の近付く音、ひらりと下りるを見付けし番人、スハ何者と驅寄るを取て引伏せ高小手、能い案内と息を留め、細先腰に引懸けて、柝奪ひかツちかち、役所へを打廻り、視ひ廻るぞ不敵なる、早裏門に呼子の笛、時分は好しと兩人は、柝合せて天河と、貫の木外して大門をぐわらりと開けば力彌を始め、杉野木村三村の一黨、我もくと込入つて、見れば一面雨戸の固め、父が教へし雪折は、爰ぞと下知して丸竹に、弦を懸けたる雨戸の鳴居、敷居に挟んで一時に、「一二三ツの拍子にて、懸けたる弦を丁と切れば、鳴居は昂り敷居は降り、雨戸外れてはた「ば

た、そりや乗込めと天河の、聲響かして亂入る、スハ夜討ぞと松明挑燈、裏門よりも込入つて、一方は郷右衛門、一方は由良之助、床几に掛つて下知をなす、小勢なれ共寄手は今宵、必死の勇者、秘術を盡せば、由良之助、餘の者に目な懸け、只師直を討取れと、郷右衛門諸共に入方に下知すれば、はやりをの若者共、揉立て、三重「切結ぶ、北隣は仁木播磨守、南隣は石堂右馬之丞、兩隣より何事かと家の棟に武者を上げ、挑燈星のごとくにて、」ヤア、御屋敷騒動の聲、太刀音矢叫び事騒がしく、狼藉者か盜賊か、但し非常の沙汰なるか、承り届けよと、主人申付けられしと高らかに呼はつたり、由良之助取敢ず、是は鹽冶判官が家來の者共、主君の怨を報はん爲、四十餘人の者共が、千變萬化の戦、斯申すは大星由良之助原郷右衛門、尊氏御兄弟へお恨なし、元來兩隣、仁木石堂殿へ、何の遺恨も候はねば、卒爾致さん様もなし、火の用心は堅く申付けられたれば、是以て御用心に及ばぬ事、只穩便に捨置かれよ、夫とも隣家の事聞捨ならず加勢あらば、力なく一矢仕らんと、高聲に答へたり、兩家の人々聞届け、御神妙く、我人、主人持つたる身は尤斯こそ有るべけれ、御用あらば承らん、挑燈引けと一時に、辭り返つて控へける、一ト時許の戦に寄手は僅二三三人、薄手を負うたる計にて、敵の手負は敷しれず、され共大將師直と覺しき者もなき所に、足輕寺岡平右衛門、館の内を飛廻り、部屋は勿論、上は天井下は簀子、井の内迄鍵を入れて捜せども、師直が行方知れず、寢間と覺しき所を見れば、夜着薄團の温まり、此寒夜に冷めざるは逃げて間なしと覺えたり、表の方が氣づかはしと驅行くを、ヤレ平右衛門待て待と、矢間十太郎重行、師直を宙に引立て、コレ、何れも、柴部屋に隠れしを見付出して生捕りしと、聞くより大勢花に露、いき、勇んで由良之助、ヤレ出来された手柄、去ながら迂濶に殺す

な、假にも天下の執事職、殺すにも禮儀有り、請取つて上座に居る、我々陪臣の身として、御館へ踏込み狼藉仕るも、主君の怨を報じたさ、慮外の程御赦し下され、御尋常に御首を給はるべしと相述べれば、師直も道のゑせ者、わろびれもせず、オ、尤々、覺悟は兼てサア首取れと、油断さして抜打にはツしと切る、引外して腕捻上げ、ハア、しほらしき御手向、サアいづれも、日頃の鬱憤此時と、由良之助が初太刀にて、四十餘人が聲々に、浮木に遇へる旨龜は是、三千年の優曇華の花を見たりや嬉れしやと、踊上り飛上り、遺物の刀で首掻落し、悦び勇んで舞ふも有り、妻を捨て子に別れ、老いたる親を失ひしも、此首一ツ見ん爲よ、今日はいか成る吉日ぞと、首を擲いつ喰付きつ、一同にワツと嬉し泣、理過ぎて哀れなり、由良之助は懐中より亡君の位牌を出し、床の間の卓に載せ奉り、師直が首血汐を清め手向申し、兜に入れし香を炷き、逡巡つて三拜九拜し、恐ながら亡君尊靈、逆性院見利大居士へ申上げ奉る、去る御切腹の其折から、跡吊へと下されし九寸五分にて、師直が首掻落し、御位牌に手向け奉る、草葉の蔭にて御請取下さるべしと、涙と共に禮拜し、いさ、お一人づ、御焼香、先づ惣大將なれば御自分様より、イヤ拙者より先さきへ、矢間十太郎殿御焼香なされ、イヤ、夫は存じも寄らず、孰れも手前と申し御眞眞は却つて迷惑、イヤ眞眞でござらぬ、四十人餘の衆中が、師直が首取らんと一身を抛つ中に、貴殿一人、柴部屋より見付け出し、生捕になされたは、能々主君鹽冶尊靈の、お心に叶ひし矢間殿、お美ましよう存する、何といづれも、御尤に存じます、夫は何とも、ハテ捌刻限が延びます、然らば御免と一の焼香、二番目は由良殿、いさ御立と勸むれば、イヤまだ外に焼香の致人有り、そりや何者誰人と、問へば大星懐中より、若輩綿の財布取出し、是が忠臣二番目の焼香、早野勘平がなれの果、其身は

四十七石忠箭計 (忠臣蔵十二時)

河竹 黙阿彌

序幕

卯明ヶ六ツ時 高輪八山下の場
辰朝五ツ時 禪覺寺會合の場

本舞臺向ふ二段に浪手摺遠見の前へ黒幕を釣込み、上手八ツ山榭の心にて石垣の上に高き草土手の張物、此陰より出道入り、下手腹背にて囷ひし出茶屋、總て八ツ山下夜の道具、爰に夜をば賣荷をおろし、裾かさ二人明羽を置き、そばを喰つて居る、此見え浪の音にて幕明く。

「そばやさんがうきに鹽がからいせ」
「ちツと羨詰つたと見えます」
「さうぢやア有めへおめへの水ッ鼻が入るので大方鹽が辛いのだらう」
「成程此雪空に風を引て居りますから随分水ッ鼻もは入りませう」
「其替り勝節が高いから出しはるくに遣ふめへ」
「何し熱くしてモウいつべいくんなせへ」
「お氣の毒でござりますがモウ山に成りました」
「何だモウ仕舞か」
「夫ぢやア湯でもくんなせへ」
「どうで明けて仕舞ふ湯だからたんとおあがりなさいまし、ト裾屋二人湯を貰つて呑ながら」
「そばやさんに時を聞のは昔から極つて居るがモウ何時だらうの」
「さやうさ今しがた七ツ半を廻りましたからモウ直に夜が

明ませう 乙「今時分そばやさんに出ツくはせるのは珍らしいが、お前は今迄歩行ていたのかへ」
「引ケ過を當に四ツ過から出まして、いつも八ツ時分には仕舞ひますが、夕はどうしてかしつかり残りまして、とうとう夜明しを仕ました」
甲「何でも家業程つらい物はねへ、己達も七ツ蹄りの客をのせて赤羽根迄いつて来たが、此雪空の風に吹かれてからだがひりくするやうだ」
乙「けふは師走の十四日だと言に、高のしれた錢を取て草鞋の五足づゝも切つて仕舞のだから、よけいに寒からうぢやねへか」
甲「然し腹に身が入つたのでやうやう少し暖に成つた、ト此内裾屋かます煙草入より錢を出しそばやへ渡して」
乙「夫、是で二人の分があるせ」
「有難うござります、トやはり波の音になり、上手より女郎や若い者湊と印ある司張挑灯を持ち出れり」
若い者「モシくちツと聞きたい事が有が、おめへ方はさつきから爰に居なすつたか」
「ハイモウ少しさつきから居ました、ト裾屋若い者の顔をすかし見て」
甲「モシおめへは湊やの喜助さんぢやアござりませんか」
若い者「オ、こなた衆は新宿のかごやさんだ」
乙「何を尋物でもござりますか」
「外でもねへ、内の抱のお浪さんが今しがた逃出して、内中が亂騒ぎ、夫から直に手分をして、出口くへ追手を懸けたが、因果と夕はおれがねず番、旦那にした、か小言をいはれて、此寒いのにさがしに出たが、どうしても見當らねへ、コウおめへ方、お浪さんを爰らで見かけはしんだか」
甲「私共は今赤羽根迄仕事にいつて来たが、そんな者は見かけませぬ」
喜助「ハテナ、一筋道の高輪で逢はないと言からは、御殿山から裏手を廻つたか」
若い者「夫とも鮫洲の方へ逃たかしらぬ」
若い者「女の足だからまだ遠く行く氣遣ひはねへ」
乙「さうして相手でもありませんか」
喜助「どうで女郎衆が逃るのだからたれか差金を遣ふやつが有るだらう、夕はさういふ筋の客も上らねへから別にかんの付やうがねへのよ」
そば「何にしる雲をつかむやうな尋者でござりま

すな 喜助「目黒から麻布の方へは別に人が出てゐるから是から本芝の方を尋ねやう 若い者「何でも氣の付ねへ所に隠れて居るに違ひはねへ 若い者「此寒いのにはかくしいめに逢ふものだ 喜助「モシお前方も見當つたら夫だけの禮をするから一寸しらせてくんませへ 甲「承知でござりますすモシ見懸ましたら直に見世迄知らせませう 乙「とかく欠落者には祝かきがつても引合に出るやつさ 喜助「夫ぢやアしつかり頼んだよ、ドレト廻りさがしてこやうか、ト喜助先に若い者二人附て下手へは入る 乙「ドレわつちも早く歸つて一ト寐入りやらかませう、左様なら大きに有難うござります、トそばや荷をかつぎ下手へは入る 甲「コレ棒組濠やの内でお浪が逃ちやア氣をもむはず、あすこの内で一番の客取だ 乙「いつも本所迄かついで行く源四郎さんの相方も、慥あのお浪で有つたナ 甲「さうよ、あの女にあつくなつて足を近くお出なさるが、色と言ふ様子でもねへからあの人の所へ逃て行きもしめへ 乙「大方外に色男でも有るだらう 甲「夫はさうと折角をば喰つてあつたまつた所を、飛んだ事に懸り合つてすつかり冷めてしまつた 乙「早く内へ歸つて焚火でもして當らうかの 甲「逃へねへサア早く 兩人「歸らう、ト兩人明き駕籠をかつぎ行懸る、波の音早き合方バタ／＼になり、上手よりお浪編物の仕懸を羽折り、手拭を冠り、上草履をはき走り出で来り、下の方へ行くを兩人すかし見て叫び合、引留め 甲「モシ／＼おまへはお浪さんぢやアねへか 乙「今時分どこへ行なさるのだ、トお浪兩人をすかし見て 乙「おまへ方は新宿の駕籠さん、爰で逢たは丁度仕合、どうぞ私の行先迄かごにのせて下さんせへ 甲「とんだ事を言ひなせへ、今濠やから若い衆の追手の懸つたお浪さん、欠落者と知りながらどうしてのせて行かれるものか 乙「夫よりは是から直にお前を見世へ連れて行けば、うまい酒の呑める仕事、サアおれ達と一所にあゆびなせへ、ト兩人立懸る 乙「ア、モシ待て下

さんせ、成程私は欠落者でござんすが、是には色々様子が有つて、今宵の内去所へ行かねばならぬと言譯は、頼みに思ふた夫の心が、サア心一ツに納め兼ね、命にもかへられぬ悲しい事が出来た故、うちを抜出し逃ては来たれど、速い夜道を女の足、殊に斯した姿故、見咎められては身の難儀、お前方も不慮から見ず知らずの人ではなし、私をどうぞ助けると思つて、見世へ知らせずに駕籠に乗せて、行さき迄送り届けて下さるやう、モシ私が一生の頼みぢやはいナア、ト是を聞き兩人思入有つて 甲「成程女郎衆は女郎衆だけ行届いた殺し文句、さう事を分けて頼むものを、満更無慈悲な事もされぬへ 乙「さうだ、駕籠が駕へ乗せるのは商賈だからこつちの勝手、しかし濠やから骨折賃を貰ふ所を貰はずにこつそり送り届けるにやア、並の駄賃ぢやアやり惜いが、そりやアお浪さん承知かへ 乙「其事ならようござんす、おまへ方を頼むからは四ツ星位は私も承知、ト言ながらお浪かけ守を取り、中より二兩出して紙に包み 乙「何れ跡でお禮はするがマア是を取つて置いておくれな、金を出す此時件のかけ守を落す、駕籠金を受取見て 甲「オイ虎や二兩の仕事だ、先一兩づゝの胸ぐらでやる所迄やらうかの 乙「さうよ濠やへ知らせた所が高が二人へ二分か三分、夫よりやアおなみさんの味方に付のが上分別だ 乙「そんならおまへ方急いで行て下さんすか 甲「さうしておまへどこ迄行のたへ 乙「サア行先は本所でござんす 乙「本所ならアノ源四郎さんの所かね 乙「イエ／＼源四郎さんは今夜も丁度宵から上つて私の所に遊んでなれど、アノ人も隠してちつと外に行所が有るはいナ 甲「何にしる本所迄一兩づゝなら割事だ 乙「跡でしぶと喰ばとて見た金は見のがせねへ 乙「そんならどうぞ少しも早く 甲「見咎められちやアむだ骨だ 乙「早く駕へ乗んなせへ、ト是にてお浪駕へ乗りたれをおろし、此間より仕懸の裾すこし出でゐる事、兩人捨せりふにて駕をかつ

ぎ下手へ行うとする、此時下手よりいせんの若い者三人出で「オイ其初一寸待て下せへ」甲「おめへは喜助さん」乙「なんで初を留なさるのだ」丙「何でもい、から待て下せへ、ト三人にて棒鼻をおさへ留る、是にて餘儀無初をおろし」甲「モシおめへ方はをかした事を言なさるが何も怪しい初ちやアねへ」乙「コリヤ朝歸りのお容さまだ」喜「お容さまならたれを上げて見せてくれ」甲「イ、ヤ見せる事はならねへ中は立派なお武家さまだ」乙「わるく留立しなるとおまへ方の首に懸りやすせ」喜「べら棒め立派なお武家の乗た初から仕懸の裾が出るものか」二人「こいつアお浪さんに違へ有るめへ」甲「夫知られたら百年目」乙「た、んで仕まへ、ト波の音になり兩人息杖にて打てかゝる、三人是をさへ一寸立廻りト、若い者兩人息杖をひつたくらうとする、初屋とられまいとする立廻り、此内喜助は初の所へ來りたれを上げて見て」喜「扱こそお浪さん」お浪「喜助さんどうぞ後生だから見のがして下さんせ」喜「エ、馬鹿な事をいひなせへトお浪を初から引出さうとする、此前方より源四郎好みのかつら袴大小下駄懸、身持悪き侍の拵へにて出て伺ひ居て、此時つかくと寄て喜助を突こかし、初のたれをばらりとおろし後へかこふ喜助起上り」喜「何をしやアがる、ト立懸るを源四郎ひちにて當る、是にて喜助タヂ〜となり、どうと成て悶絶なす、此内かごやは若い者兩人をさんく〜にうち兩人逃ては入る、初屋兩人源四郎を見て」甲「ヤアあなたはいつもおのせ申す」乙「割下水の旦那さま」源「コレ、ト初屋甲に囁く、甲は乙にさ、やく」源「二人共骨は盗まぬちツとも早く」兩人「合點でござり升、ト兩人初をかつき上げ」甲「そんなら旦那」乙「先へ行て待て居ります、ト初をかつき兩人一散に向ふへは入る、源四郎思入有つて」源「お浪が逃たと聞た故アノ湊やに居られもせず、眞暗闇を歸つて來たが、爰で彼奴が源四郎の手には入るとは不思議な仕合、是からいつて往生づくめ、口説てしつぱりつも

る思を、ト雪おろしかすめて日覆より雪ちら〜降る、源四郎襟の冷たきに心付き」源「少から催したがコリヤとう〜雪に成つた、ドレ小降の内に參らうか、ト源四郎行懸る、此時お浪が落せし以前の懸守につま付き取あげ見て」源「こいつは儘にお浪が守、そんならさつき落したのか、ト何心なく明て見て中より書物を出し」源「此書面は小汐田と取かはしたるたしかに起請、ト空にかざしても讀めぬ思入、此時ばたばたになり向ふより勘六半合羽判人の拵へにて一散に出で來り源四郎に突當りてどうとなる、源四郎は書物に氣をとられ居る」勘六「何だ往來ばたに立て居やアがつて人の來るのが見えねへか」源「いかにも暗くツて文字がよめぬ」勘「べら棒め直に夜が明らア、ト此時烏笛知らせなしに正面の黒幕切て落す、向ふ高輪沖夜明の遠見、是にてしらみし心にて源四郎書附を讀み」源「コリヤ起請と思ひの外又之丞がりえん狀」勘「さう言ふおこゑは、ト顔をのぞきこむ、源四郎も見て」源「オ、勘六か」勘「旦那かへ」源「丁度貴さまに逢たい所だ」勘「わつちも少し咄が有ります」源「何にしるい、所で出つくはせした早速ながら、ト勘六に囁き」源「ナかう言譯だ何分頼むぞ」勘「こいつアおもしろい仕事だがそんなら玉はお前さんが」源「たつた今引上げた是から先は貴さまの骨折」勘「そんならどうぞ前いはひに」源「又欲張るかこまる男だ、ト源四郎紙入を出し小判三枚かぞへる、此時六ツの鐘なる」勘「モシ旦那丁度明六ツ」源「ソレ金だ、ト出す勘六取て頂き」勘「イヤ有難い、トキニ旦那是から直に本所へ出帆と仕ませう」源「おれも跡から仕かけて行くが、夕からの持越して腹加減が悪いから湯へでもは入つて一盃やるが、貴さまも是から一所に行きやれナ」勘「夫は何より有難い直さまお供を致しませう」源「サア大降にならねへ内に出かけやうか、トこんな事を言ながら兩人並びて花道へ行く、浪の音烏笛浪の音のやうに雪おろしをかぶせる、兩人歩行ながら」勘「チラ〜やつて來た〜雪を

見ながら朝酒は格別味くのみませう 源「夫はい、が朝からやらかして肝腎の懸合に役に立つかへ」勤「それは大丈夫御案事なさるな乍俾二升や三升やらかしても」源「是サそんなに呑れてたまるものか、ト此せりふにて向ふへは入る、是と一所に此道具廻る。」

本舞臺一面平舞臺向ふ彫物欄間、廣大なる位牌の棚、鷹の羽の紋付し判官の位牌をかざる、此前に須彌壇打敷を掛け、禪家の佛具よろしく並べ、此左右扉を明け附たる裏を見せ、色則是空見性成佛と印したる旗を兩方へ建て、尤も旗竿入用の事、上下舞臺一面へ薄縁を敷詰め、道具替り一時に花道へもうすべりを敷き、揚幕へ杉戸を取付け、都て禪覺寺鹽治家位牌堂の模様上手に由良之助羽織袴大小にて住ひ、つゞいて小山田羽織大小にて住ひ、下手に矢間羽織大小、千崎同じ拵へにて住居、小寺磯貝其外三階窓出の義士思ひく浪人の拵へにて宜敷居並び、ズツと下手に住持了海和尚所化兩人控へ、銘々に茶を出し廣大なる體にまんぢうを盛上げ出して有る事、此模様さんの入りし合方にて道具留る。

住持「是は、大星氏をはじめ何れも早朝よりの御參詣御苦勞千萬に存じまする」由良「明日た亡君の御命日故歳末の拜禮仕らん爲、是なる方々と申合せ久々にて由良之助參詣仕つてござる」住持「厚き心の各々方此雪中にようこそ御入來、鹿葉ながら寒氣の節故あた、かに蒸たる品、さめぬ内おとり下され」由良「かならずお構ひ下さるな」小山田「イヤ何御老體の長老定めてお見忘れも有つらん、拙者事は殿御在世の砌御傍勤にて罷有し、小山田庄左衛門でござる」矢間「拙者御馬廻を相勤めたる矢間重太郎でござる」千崎「御近習役たる千崎彌五郎でござる」小寺「拙者事は小寺十内」磯貝「磯貝十作」間瀬「間瀬忠太夫」志馬「志馬三郎兵衛」角野「角野十平次」岡野「岡野新右衛門」木浦「木浦岡右衛門」星野「星野藤藏」奥田「奥田唯右衛門」三村「三村次郎」

小山田「河れも鹽治の祿を食み」矢間「殿の御恩を受けたる者共」千崎「是迄參詣」みな「いたしてござる」

住持「何さま御姓名を承はれば一々に存出す諸士の面々、鹽治家御退去の後はいかゞとお案事申せしに、何れも堅固の體祝着至極に存じます」由良「何は格別長老へ對し御詮の仕る事は、殿の御遺骸を納めたる當山へ日頃の御疎遠、尤も拙者事は赤穂離散の後都山科に住居致し、爰とかしこと隔たれば、夫故參詣も相ならず、其外諸士の面々も或は遠國他郷へ移り、まつた當地に住居致し、活計の爲に行ひを亂し、朝帯刀致せし者も夕には脱劔なし、止む事を得ず下賤の行狀、他見の見苦しき耻辱と存じ、されば後室葉泉院様まつた御舍弟縫之助様時々御機嫌も伺はず、まして御廟所へ參詣の儀も怠り勝、亡君尊靈の思し召も如何と存じ居つたる所、此度由良之助子細有つて出府致し、其餘の面々も折能當地に罷り合せ、過半人數も打揃へば、今日俄に申合せ是迄集會仕つた」矢間「去ながら亡君御在世の砌には、御先祖代々此御法會も鹽治家の格式にて、諸家中一同綺羅を飾り、御追福を濟みしが」小山田「今は昔に事替り、高貞公の御墓所へ一ツの花を備へんにも、心に任せぬ浮浪の我々」由良「あるに甲斐無き身の上を、長老御推察下されい

住持「何が扱其昔善美を盡せし大法會より、只今の御身分にて一滴の水をも御手向有らば、泉下にまします冷光院殿にも嘸かし御満悦、恐付も今日は法筵を開き、一山の僧侶を集め御經讀誦致すでござらう」由良「其儀は何分御頼み申す」住持「シテ御子息力彌殿には久々お目に懸らざりしが、今日は御參詣召れぬか」小山田「力彌殿にも御同道なれど、先刻由良之助殿の御差圖にて、亡君の御石碑の掃除齋端」矢間「郷右衛門殿諸共に其餘兩三人の者を召連れ、御廟所へお出でござる」住持「其儀なれば伴僧共に申付けんもの、雪中と申し御苦勞千萬、コリヤ其方共爰へ御伴ひ申したがよい」所化「畏りました、ト所化兩人立かゝる、此時向ふ揚幕

にて 力彌「アイヤお出に及ばぬ大星力彌只今これへ、ト合方になり向ふより、力彌羽織袴大小の拵へ郷右衛門羽織袴大小其他三人何れも義士の形、浪人の拵へにて出で、本舞臺下手へ来り 力彌「父上の御差圖により、是なる郷右衛門殿諸共に御廟所へ罷越し 一我々一同御石碑を掃き清め、拵を拂つて香花を備へ義士御焼香の用意萬端 三人「整ひましてござりまする 由良「夫はく、柝は兎もあれ、各々方寒氣の折から御苦勞千萬 矢間「サ、是へく 五人「然らば御免下されい、ト力彌由良之助の傍へ住ひ、みなく宜敷座に付て由良之助思入有つて 由良「彌五郎殿最前の品是へ 千崎「ハッ、ト立上り佛前へ行き、白木の臺に百兩包をのせたるを持来り、能所へおく、由良之助こなしあつて 由良「長老是へおす、み下されい 住持「ハッ、ト前へ出る 由良「扱改めて申入る、は、我々共昨年以來今日迄は主君に仕へず、かねく公邊へ願ひ置きし御舍弟縫之助様の御身の上いかゞと相待ち居たる所、御家再興の御沙汰も無く、御本家廣島公へ永の御預け、頼みの綱もされし故、思ひく、に當地を立退き、或は他家へ仕官いたし、又は武士の道を捨て町人百姓になり下り、他國へ越く者もござれば、猶更もつて此廟參の儀も心に任せず、尊嚴の御墓前に拜禮なすも今日限り、先差當り心にかゝるは來三月の御法會、我々當地に有合さずとも、何卒長老の計らひにて御經讀誦下さらば、諸士一同の大慶、夫に付些少ながら御法事料の金子寄附仕れば、是をもつて亡君御追福の營み、宜敷御周旋下さるやう此儀偏に頼み存する、ト右の包金を出す、住持思入有つて 住持「夫はく御名殘惜しき各々方、たとへ他郷へ赴かる、共、御法會の儀は當院にて取行ふが寺門の役目、必らず共に御案事有るな、まつた心をこめられし御法事料の儀は、お詢に任せ受納仕る、ト右の金を頂いて所化へ渡し 住持「去るにても今日限りと承れば、何は無く共心計り魚酒一献差上げたうご

ざれば、暫時お控へ下されい 由良「夫は千萬かたじけなうござる 矢間「いつに替らぬ長老の御芳志、此後の參詣覺束なければ、御禮申すも今日限り 小山田「夫に付ても水魚の交り致せしに 原「是より所々へ離散なし 小寺「廻り逢ふ日も知れざる身の上 力彌「暫し是にて朋友の名残ををしめば、長老にはお構ひ無くとも御退座下され 住持「左様御座れば各々方、いつ迄なりと御遠慮無く、是にて御休息なされませ、ト住持先に所化兩人件の金を持ち奥へは入る、由良之助思入有つて 由良「イヤナニ各々方、兼々申合せし如く今日參詣に事よせ、人數も過半着到致し先は大慶、種々申談する密事もござれば、ソレ、ト思入みなく心得、上下折廻しの杉戸を明て見通しになる、由良之助四邊を見廻し居直つて 由良「何れもお進み下されい、トみなく前へす、み思入 由良「扱各々只今此席にて改め申すに及ばねど、去年三月御主君御大事の御我人共に魂を失ひ、一身に治定の道を知らず、所存一決ならざる折柄、此良金が心腹をひそかにお明かし申せしより、まことに忠義の各々方、つひに拙者に御同意有つて、後日の大望を思ひ立ち、恥を忍んで城地を立去り、今日只今迄時節を待つ千辛萬苦、何をもつて是に比すべき、然るに漸々時來つて、但不戴天の志 成る成らざるは知れざれど、彌々今宵と定めたるは昨夜評定の席に於て逐一申述たる如く、此期に及んで各々方の本心動く可きに有らねど、千丈の堤も蟻蟻の一穴より崩る、習ひ、今大望の際となり、萬一變心などなす者あつて事の破れに及ぶ時は、則ち冷光院殿尊嚴の御恥辱と存する故、再應御所存の程を承る、如何に何れも今宵決定の一大事、よもや異變はござるまいかな、ト思入有つて言ふ 原「ハッ其儀は昨夜郷右衛門が連判狀に引合せ、一々本心開糺し、貴殿へ通達いたした通り 小山田「忠義の二字を膽に煎り付け 矢間「思ひ詰たる日頃の大望 千崎「時節到來の期に及び 小寺「我々異變は みなく「ござりませ

ぬ、ト是にて由良之助思入有つて 由良「ハテ亡君尊靈の御位牌の前において、一同の誓言頼母しく、此上は四十餘人が忠肝義膽の鋒先にて、鐵石の堅きをも砕かん事はいと安し、其御心底を承る上は、只今是にて良金が御目に懸る品こそあれ、ト手箱の内より師直が屋敷の繪圖を出し 由良「今宵の事件に各々一同知らで叶はぬ孫吳が秘書、何れもとくと御披見召されい みな「ハッ、ト小山田、矢間真中へ、右の繪圖面を開き皆々双方より見て みな「シテ此品は 由良「夫を則ちさいつ頃、中浦、齋の森御兩所より反問苦肉の奇計により、我手に入りし繪圖面にて、高野殿御邸宅、地理は元より御建物内外坪割まで、其儘寫す六韜三略、原「扱は敵地の みな「繪圖面とな、トきつぱりとした合方になり、皆々繪圖を取巻見て 力彌「ホ、ウ實や天の時は地の理にしかすと、開夜に燈火を得たるが如く、進退かけ引自由をなす敵地の案内の當り 矢間「先御屋敷は乾に向き、表御門に塗出しの桐の齋の御定紋 小山田「仁木殿は北隣、南隣に續きしは石堂殿の惣高堀 千崎「門内總て百間餘り、此玄關の正面より右へ廻れば遠侍 原「表座敷は廣書院、爰が竹の間、孔雀の間 小寺「庭は築山泉水の、橋を越ゆれば稻荷の社 諸士「馬場の左は植ごみにて、裏手は都て堅固の練堀 同「爰に土藏の棟を並べ、厩に續くは雜物藏 同「是より西の長屋造は、軒を並べし家中の住居 同「扱奥向は表より、鈴の廊下を辰巳へかけ 同「棟をへだて、一様に、建つらねたる座敷敷 同「間毎の間毎の中央に、居間とおぼしき揚疊 同「靱柱に孫庇、左右自在に通の細どの 力彌「縁煎つゞきの次の間は、正しく宿直の詰所ならん 小山田「もし近習小姓の者、主人の大事と驅集り 矢間「多人數揃つて我々に、乃向ひなして防ぐとも 千崎「又味方にも力を合せ、是なる襖を小だてにとり 力彌「此廣庭に切抜けて、人數をまとめて此方へ廻り 小山田「爰をしきつて 矢間「かう攻めて 千崎「寢所へふん込み みな「目ざす敵

を 由良「討うたざるは天運なれど、かく嚴重なる敵地の内へ、込入らん事たやすからず、此良金が思ふには、先御屋敷の四方を取巻き、繼階子にて一兩人、外構の堀を乗越え、内より竊に開門なし、大手は魚鱗堀手は、長蛇に備へて討入らん 矢間「シテ前後に別る、人數は 由良「先表御門は身不肖ながら此良金が隊長にて、同志の者共廿三人 小山田「シテ裏門へ向ふ者は 由良「那右衛門殿に力彌を添へ、其數合せて廿四人 千崎「シテ夜討のかけ引は 由良「山鹿流の太鼓を相圖に、或は進み、或は退き、右往左往の混雑に、敵と身方と分かざる時は、山と川との合詞 矢間「シテ我々持參の得物は 由良「太刀はかさねの厚きを帯し、着込は堅固にして輕きをえらみ、家の内なる劔に可は半弓、劔の柄はみじかき方を便利となす、しかし我々四十餘人目ざす敵は只一人、漫りに老人婦女子等へ疵付けぬやう心を付、逃る者は討て捨て、ひとへに日頃の本望を達せん事を心がけ、匹夫の勇に誇るべからず、誰にもあれかの御方の御座に近付奉らば、呼子をもつて味方を集め、一同御前に拜請なし、慎んで御首級を申請ん事こそ肝要なり、必ず共に禮を失ひ法を亂すのおこなひは、ト言かけ思入有つて 由良「コリヤ御銘々に御得心も有る可き事、今改めて良金が申迄もござらねど、事の序に演舌致す、何は扱置き今宵は何れも、抜群のお働を何卒拜見が致したい 矢間「何が扱、大星氏の采配ならねば今宵の勝利、心元無き我々共 小山田「只今の御差圖殘る方無き重慮の極意 千崎「一々發明、みな「いたしてござる 由良「數ならね共良金が、賢しげなる御差圖、各々御用ゐ下されば、拙者が大慶此上無し、夫は格別先差當り、大望の際に捨おかれぬは同志の面々、定めて永の浪々中、借財は申すに及ばず、諸式買懸り等も有るべき事、只今此席に洩れたる者もござれば、小山田氏には御苦勞ながら先刻御渡し申したる二百兩の金子を以て、銘々に聞合せ、借財の類返金の儀を、

宜敷御周旋下されい 小山田「心得ましてござりまする、ト由良之助矢間に向ひ 由良「まつた重太郎殿には是より織部氏の浪宅へござつて、今晚の一儀御通達下され、其上我々出陣の規式、かた計なる用意の儀、御計らひ下さるやう、此儀は貴殿へ御頼み申す 矢間「ハッ、其儀は兼々うけたまはる通り、則ち是より彌次兵衛殿の浪宅へ罷越し、出陣の器械を取調へ、門出の用意仕らん 小山田「拙者連も同志の面々、買掛りの借財を、ことごとく返金なし死後の恥辱にならざるやう、委細周旋仕るで御座らう、トバタ〜になり、向ふより所化走り出て下手へ来り 所化「大星氏申上ます 由良「何事でござる 所化「只今御廟所へ井桁玄蕃様御参詣に御座ります 山真「扱は昨日申入たる故、舍兄入來とあるからは、某も衣服を改め、御墓所にて面會なさん 所化「然らば御案内仕ります 山真「何れも暫時御用捨下されい、ト所化案内して由良之助奥へは入る 矢間「只今大星氏の御差圖なれば、是より織部氏の浪宅へ 小山田「庄左衛門も大事の役目、萬事の手つがひ仕らん 原「御兩所共に御苦勞千萬、小山田氏には取分過も無きやうにお心懸下されい 小山田「ナニ庄左衛門に過ちなきやう致せとは 原「郷右衛門が心配致すは別儀にあらず、忠義拔群の其元なれど、生れ付て酒を好み性根を亂すが一ツの疵、殿御在世の砌にも、大酒に前後忘却なし、度々の御勘氣蒙られしを、大星氏の取なしにてつひに異義無く相濟みしは、是偏に君の御慈愛、されば此度の一儀に付ても、由良之助殿御心配あつて嚴しき御異見、夫故貴殿も身を慎み、是まで禁酒と承りしが、最早我々が失望の成るならざるも只一日、此期に及び庄左衛門殿、必らず一身過つやうな、心得違ひ召さるゝな、ト思入有つて言ふ、小山田而目なき思入にて 小山田「ハ、ア郷右衛門殿のお心添、庄左衛門身にこたへ忘却は仕らぬ、必らず御案事下さるナ 原「其お詞を承り、拙者も安堵仕る 矢間「原氏の御教

論は庄左衛門殿ばかりで無く、我々一同へ能き御意見 千崎「かゝる大義を企つれば、我人共に身を慎しむ力綱「忠義の二字を肝要と、時節を待も最早一日 小山田「猶一心の臍を堅め、腕を磨いて今宵こそ、常々拙者が秘藏なす、二字國俊の刀の切味 矢間「某とても日頃手馴れし志津兼氏の、手錠を以て刃向ふ奴原みな殺し 小山田「二世の働き 兩人「お目にかけん、ト此時五ツの時計なる 矢間「益無事にさんじのひま入り、最早五ツの時計なれば 小山田「イザ御同伴仕らん 力綱「我々も是より直に御廟所へ罷越し、父諸共に何かの用意 小山田「左様ござれば各々方 矢間「御兩所にはお役目御苦勞 千崎「然らば是にて みな「おわかれ申す、ト矢間、小山田は向ふへは入り、舞臺は力綱先に、残らず奥へは入る、きんの音にてしらせなしに此道具廻る。

本舞臺三間中足の二重、石垣の蹴込み、真中石の階段、此上に臺石をすゑ廣大なる石牌、鷹の羽の紋付、判官の戒名宜敷此前に香爐しきびを備へ、此後石の玉垣、向ふ禪覺寺の山、樹木の間より海の見える書割、左右樹木の張物、上下へ雪持の松のたち木、日覆より同釣枝、都て一面に雪の積りし道具、舞臺花道共雪布を敷き、石牌の前庭の上へ薄べりを敷き、下手に井桁玄蕃、ふせん蝶の紋付熨斗目麻上下にて中ぬき草履をはき、雪の上に立身、傍に若黨中間、玄蕃の合羽傘下駄を持ちて控へ居る、此模様きんの音にて道具留る。

玄蕃「コリヤ宅内 若黨「ハッ 玄蕃「只今大星方へ申入たれば、頼て是へ参らるゝであらう、其方共は供待にて暫時休足致したがよい 兩人「ハッ、ト若黨中間下手へは入る、玄蕃石牌へ思入有つて薄べりの上へ上り、石牌に向ひ焼香なし、平伏して拜禮なす思入、此時向ふより由良之助麻上下に着替へ、中ぬき草履にて雪の

上をあるき出て来り、舞臺へきて玄蕃の様子を見て、下手に手を突き控へ居る、玄蕃拜禮を仕舞ひ、此方を向き山良之助を見て、
 玄蕃「是はく良金にはいつの間にやら是へ参られしな、山良「ハッ只今是へ罷越し御様子伺ひしに、御拜禮故き差控へましてござりまする、
 玄蕃「夫は嘸かし待久しく有つたであらう、サ、これへく、山良「然らば御めん下され、ト山良之助薄縁の下の方へ住居、扱御舎兄には久々拜顔も致さざりしに先以て御聖勝の體を拜し祝着至極に存まする、
 玄蕃「御身にも息才にて重疊く、昨日委細を承りしより、今日は主君へ願ひ御暇を給はりて、先刻是迄罷越し、まづ取あへず判官殿御廟所を拜し、しきりに懐舊の情を催し、思はず手間取り、存外なる失敬ゆるしめされ、
 山良「是は又恐れ人たる御挨拶、何はしかれ雪中の御厭ひなくようこそ御出、既に昨日文通を以て申入れたる如く、赤穂離散の砌より思ひ立たる拙者が大望、彼の御方を討奉る可き一大事、彌々今宵を過ぎす右の事件に及びますれば、是ぞ一世の御別れと存じ、是迄お招き申せしに、早速の御入來、良金身に取て此上の大慶はござりませぬ、
 玄蕃「某連も此度御國元より歳末の嘉儀として、鎌倉御屋敷へ出府なし、圖らず其元に而會致すは祝着至極、殊更以て日頃志願の一儀、いよく決定致されしとあれば、先差當り一ツの安堵、去ながら主君に離れし其日より、忠義の二字にこりかたまり、切差琢磨の御身が大望、其心勞はいか計り、某連も君へ仕へ、食祿をけがす身の上、モシ鹽治家に等しき凶變殿の御身に出來いたさば、其時の我々が無念の程は無かしと、己が心に引くらべ、御身が胸中、玄蕃深く推察致す、
 山良「仰の如く去年三月高貞公の御切腹、鹽治の名斷絶に臨みたるの我々は、手の舞足の踏所を覺えず、さながら魚の水を失ひ、鳥の寝ぐらを焼れし心地、主君御最期の其砌、數ならぬ良金へ恐れ多き御遺言、其時の御無念を五臟六腑にふり付て、不俱戴天の思

ひ立、今日の只今迄尺寸の間も忘却せず、一味加擔の者を語らひ、薪に伏し漆をそぎ、姿をかへて間者となり、忍びく敵地の様子最早ことごとく見定めれば、いよく今宵と決定致し、同志の輩四十餘人、かの御邸宅へ推參なし、日頃の宿意を果さん存念、しかし浪々の我々が、かくやんごと無き御方を敵とねらひ奉る事、かの蟠螂が斧を上げて、龍軍に向ふの譬へにひとしく、身にも應せぬ血氣の勇と、必ずすお笑ひ下さるな、
 玄蕃「何が扱血氣の勇といやしむ可き、大敵と見て恐れざるは武門の習ひ、誠や君々たれば臣々たりと、判官公の御家臣にかゝる誠忠の者有るは、則ち鹽治の譽れ、まつた我弟にかゝる義心の者有るは、玄蕃が面目是に過す、シテ力彌も同道召る、か、
 山良「いまだ若年にて物の用には立可きならねど、兼々同道致しくれよと彼が願ひ、夫故今宵召連る所存でござる、
 玄蕃「彼は僅十五歳と存せしが、扱扱天晴なる心底、其餘拙者が知る人なる、織部親子、不破氏杯も定めて一味の内でもござらうな、
 山良「彼等連も同道の約定、其外同盟四十餘人、各々粉骨碎身なし、身不肖なる良金の指揮を守り、義心金鐵の如き者共、斯迄荷擔致くれまするは、拙者仕合と申すもの、
 玄蕃「何さま抜群なる忠義の面々、左程迄合體なせば天地神明の加護により、本望遂げんな目前、しかし此玄蕃が申す迄にはあらざれど、戦場の駈引都て勝敗を争ふもの、運と不運の差別有るは、人力の及ばぬ所、萬一事を果さず、敵と目さす御方を討もらしなばいかゞ召る、ぞ、
 山良「宿望の破れに及び、運拙なくして討もらさば、其座を去らす切腹なし、泉下に至り亡君に申譯仕るの外、別に所存はござりませぬ、
 玄蕃「シテ又首尾能く勝利となり、彼の御首級を申受け、本望遂げし其時は、
 山良「仰迄も候はず、法は則ち天下の大法、忠は一人の忠義なれば、何れの道にも國土の罪人、公邊の御沙汰をまち、たとへ縛り首仰付らるとも、毛頭御恨みと存じませぬ、
 玄蕃「何さま武



士たる者は左程の覺期は有可き事、シテ又忠義御賞美有つて、助命の御沙汰に及びなば、其時は如何召る、ぞ 由良「寛大の御所置にそむくは恐れ多き事ながら、足利殿の御膝元に鮮血を流すの大罪、萬一助命の御沙汰有とも、何面目に存命なさん、餘人は知らず我々父子は、誓つて相果る所存でござる、トきつと言ふ、是にて玄蕃小膝を打ち 玄蕃「ハテ威じ入たる志、義を泰山の重きになぞらへ、命を鴻毛と輕んじて、采配握る今宵の事件、首尾能く敵を討ん事、必らず共に疑ひなし、若又やみく仕損じなば、御身が無念は我無念、其時こそは、ト玄蕃胸を打いて見せ、氣味合の思入有つて 玄蕃「ナ跡々へ心を殘し、必らずおくれを取るゝな、ト由良之助玄蕃の所存を悟りし思入 由良「ハテ頼母救御胸中、持つ可き者は骨肉同胞、其御所存を聞く上は、由良之助が心も勇み、最早仇たる御方の御首級を得たるの心地、トしは勇氣が備りました 玄蕃「勇ましく、是に付ても其昔、父玄蕃行正殿、大星頼母殿に懇望され、養子に送り給ふの時、御身を傍近く招き給ひ、武士たる者の心掛、さまざまとの御教訓、我かたはらにて見聞せし

が、今日只今思ひ當り、天晴見上げし其魂、夫には引かへ此玄蕃は、壁の上に安座して、なす事も無く月日を送り、井桁の家を繼ぎながら、他家相續の御身に及ばず、忠義の道をくらぶる時は、良金殿我よりはるかに兄でござるぞ 由良「こは勿體無き其仰せ、玄蕃殿こそ我爲に兄にして又親なりと、日頃お慕ひ申せしが、今日の期に及び御目に懸れば又一トしは、亡き父上の面ざしに瓜をニツの其御様子、今良金が冥途の旅に踏出さんす際に望み、父御在世の其昔を座に思ひ出されて、腸を断つと思ひあり、是限りなる對面に、由良之助が面をも能く御目に殘るやう、兄上御見届け下されい 玄蕃「何さま兄弟一世の別れ、生者必滅會者定離とかの佛經の教へは有れど、忍び難きは人間の愛情、互ひに初老を越る迄兄と呼び弟と呼び、因みも深き其許が、おもてを見るも今日限り 由良「餘儀無くお暇仕るも、瓦と成つて余からんより、玉と成て碎けよとの、其本文を思ふが故 玄蕃「只一朝の名を惜む忠義の爲に投うつ命 由良「實に是非無きは武士道と 玄蕃も初めて承知いたした、ト兩人顔をむけホロリと思ひ入、玄蕃氣をかへ 玄蕃「ア、我ながら不覺の愁傷、大望のさいさきに勇氣をくじくは不吉千萬、申さば今日は目出度出陣、此場で一盞を汲かはし、門出を祝して退散いたさう 由良「何さま某も一期の思ひ出、兄人の御盃は此方よりも願ふ所 玄蕃「しかし爰は御墓所と申し 由良「此場においての盃は 兩人「ハテ何をがな、ト兩人上下を見廻し、雪持松に目を付け、双方同心にうなづき、これにて相方に成り、扇を取て一時に立上り、玄蕃は上手の松、由良之助は下手の松へ來りて、互ひに扇をひらき雪を少しづつ、取て扇へのせ、元の座に直り 玄蕃「御身へすゝむる 盃は實に千歳の色かへぬ、松につもりし六ツの花、雪すゝぐの聲あれば是復傳の門出の儀別 由良「言あはせねど某も、十八公の操に習ひ、今會稽の雪盃 玄蕃「しからは良金 由良「イヤ兄人 玄蕃「目

出度一献 兩人「過し申さん、ト兩人扇の儘取交し、双方雪を頂いて吞み、互ひに扇を見て 支藩「時に扇の名にしおふ要は則ち忠義の要、骨は肉とくだくる共、名は末廣の末世に残らん 由良「世俗に申す天地金の、天地にひとしき御賜もの、取も直さず兄上の恩義を表す此扇面 支藩「此儘落手、由良「某とても、ト兩人扇をじつと見て 兩人「是がかたみと、ト思はず顔見合せて氣をかへ 支藩「又しても思はぬ落涙 由良「他人が居らば笑ふでござらう 支藩「扱々女々しき 由良「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ト双方笑にまぎらし、泪を隠す思入、バタ／＼になり上手より以前の方彌彌五郎先に、原小寺其外三階残らず袴も、立大小わらち懸、赤合羽を着し銘々竹の子笠を持ち出来り 千崎「由良之助殿様子は残らず承る 原「御兄弟の御別れ、我々共もさこそと推察 小寺「はからず落涙 皆々「いたしてござる 由良「夫は／＼近頃赤面何れもおゆるし下されい 支藩「扱は是なる方々は、かの同盟の面々なるか 千崎「仰の如く我々は天星氏に荷擔の者共 原「非栢氏にもお見知り下されい 支藩「是は／＼御挨拶、御存の上は名乗るに及ばず、お心せきの折柄推參致して、思はぬ失敬 力彌「アイヤ伯父上、私こそ最前より失敬御免下さります、ト支藩力彌を見て 支藩「オ、力彌で有つたか 力彌「御存知らる、今宵の儀、父諸共に一命捨てれば最早是が御暇乞 由良「ハテ千萬言ても名残は盡きぬぞ 力彌「然らば伯父上百年の後、冥途にて御面會 仕りませう 支藩「オ、冥途の對面とは面白い、其覺期なら身共も安心、今宵は花々敷手柄をいたしやれ 力彌「ハッ仰にや及ぶ可き、是より直さま敵地へ魁け 千崎「思ひまうけぬ此雪は、妾をかくすに最屈覚 原「何れも下部の赤合羽に下賤と見せて忍びより 小寺「高野の屋敷の弓手馬手、遠巻なして様子を探り 力彌「相圖を定めて 皆々「討入らん 支藩「ハテ天晴なる各々方、斯迄勇氣備れば本望遂げんなまた、く中、シテ由良之助には是よりいづれへ 由良「仇

討の前方に亡君の御後室、葉泉院様へ參上なし餘所ながら御暇乞 支藩「我も主家に用事あれば、名残は盡きねど歸國なし、夜討の吉左右相待申す、ト支藩立上り草履を穿き下の方へ来る、此時下手より以前の家來兩人出で 若黨「もはや御歸宅にござりまするか 支藩「いかにも、トかすめて雪おろし日覆より雪ちら／＼と降る、若黨空を見て傘をひらいて出す、支藩是をさし中間下駄を直すを、支藩御廟所故はかぬと言ふ思入、是にて下駄を片附る、由良之助思入有つて 由良「然らばます／＼御堅勝にて 支藩「御身も今宵は必らず本望千崎「イデ我々も 皆々「是より直に、ト立かゝる 由良「ア是他聞を厭へば竊に／＼ 皆々「ハッ／＼、ト控へる 支藩「ハテ勇ましい 由良「ソレ御見送り 力彌「ハッ、ト立懸る 支藩「アイヤ其儘 由良「しからは失敬、ト片手ついて會釋なすを木の頭 由良「御免下され、ト皆々引ばり宜敷、雪大分降る、力彌、千崎左右より由良之助へ竹笠を贈す、支藩は行かける思入、此模様雪おろしにてよろしく拍子幕。

二幕目

巳亥四ツ時
本庄野菜店の場
同所組屋敷の場

本舞臺堂面の平舞臺、上手折廻しの壹間の障子家體、真中暖簾口、上の方中敷居の押入、上の所佛壇惣體風壁、下手能所に青物の流し棚を取附け、是に前裁の色々並べ有る事、下手跡へ下げて貰おろしの下家、玉椿の生垣、何れも雪積り有るもやう、いつもの所に門口、爰に醫者雲齋羽織着流し一本差の拵へにて貰を吞居る、門口の所に下女おしづ風呂敷包の小重箱を持ち立懸り居る見え、都て本所割下水八百屋住居の體にて、稽古唄にて幕明く、ト兩人よろしく思入有りて、

「申し今日はこちらの御内はお留主でござりますかへ」
 「オ、誰かと思つたらお隣の内山さまのお召仕おしつ殿でござるか」
 「雲齋さまあなたがお留主ばんでござりまするか」
 「左様の譯でもないが、かの一條で参つて居るのでござるが、お前は何か御用があつてござつたのか」
 「一寸お使に参つたのでござりまする」
 「夫は御苦勞でござるが、元助殿は買出しに行かれて留主でござるが、弟御の郡三郎殿は今便所へ行かれたればこちらへ這入つて待つてござらつしやい」
 「郡三郎様がお内ならお待申して居りませう」
 「サア、つと這入らつしやれ、ト是にておしつ内へ這入り、能所へ住ふ雲齋思入あつて」
 「何時に何御用でござつたのぢや」
 「イエ別に用事と申すではござりませぬが、アノお嬢さまよりお言傳がござりますゆゑ」
 「何さま其苦の事、顔が見たさに一寸来てくれろであらうと、日頃から近邊の噂にも、此高田氏と内山の娘のお組どのを嫁合したら、よい夫婦であらうとの取沙汰、人の目は替らぬもの、親御にも其御舎で疾より愚老へ御縁談のお申しがあつて、橋渡しをお頼みゆゑ、嗚先方でも御直參の躰養子に望まるゝとは結構な事と思ひの外、よい返事をなされぬので、普婆扁鵲とも言はる、愚老も、此療治にはもてあましてをるが、又工風を致したら七加減のないでもござるまい、かならずお案事なさらぬがよいて」
 「そこ所はあなたのお取持故、お取結びにならぬと申す事もござりますまいが、お嬢様が明番思召の事のゆゑ、どうかお早く御縁に成るやう願ひます」
 「イヤそこに如才と小遣ひのない男でござるて、しかしあんまり古いかしらんでア、ハ、ハ、ハ、ト兩人宜敷ある合方きつぱりと成り、奥より郡三郎好みの着附着流しの形にて箕盆を持ち出來り」
 「是は、雲齋老近頃失敬を致してござる」
 「何の、御挨拶で痛み入ます、イヤ時に御隣家よりお使でござります、ト是にて郡三郎おしつを見て」
 「オ、是は内山どの、お

召仕でござるか、此寒いのに御苦勞でござる、シテお使は何御用でござりますな」
 「イエナニ用向と申すではござりませぬ、私共の旦那さまが此雪のお寒さ凌ぎと、鴨をお拵へなされたゆゑ、あなたへも差上げたいとおつしやつて、少々ながらお目に懸ますので御座ります、ト風呂敷をとき重箱を出す故郡三郎取て」
 「是は、お心に懸られまして、ト言ながら蓋をあけ」
 「オ、是は小松菜に鴨、見事なる品を澤山に下され、忝なう御座る、トこなしある雲齋見て」
 「ハア是は菜と鳥ぢや、なとりとは結構、是で一盃さしめせばどのやうな寒氣でも凌ぎまするて」
 「フム成程なとりとは侍の身に取つては耳よりの事、格別の品郡三郎忝なう受納いたすと仰せられて下されい」
 「イエもうつまらぬ品ながら御意に叶ひまして私もお嬉しう存じまする、夫に今日は雪故か世間も釋かゆゑ、ちとお咄しにお出遊しますやうお嬢さまからの御言傳でござりまする」
 「夫は早有難う存じまする、何れお禮ながら出まするで御座る、何とぞ皆さまへよろしく申上げて下され」
 「左やうならあなたお暇いたしまする」
 「おしつどの大きに御苦勞でござつた」
 「雲齋さまおゆるりとお出なされませ、ト右の合方にておしつ宜敷橋懸りへ這入る、跡に郡三郎思入ありて」
 「ア、何かに付け男暮しの不自由と、内山殿の心遣ひ、何共早氣の葦千萬、今日は兄貴もいつより早く出られたゆゑ寒うあらう、幸ひの寒氣凌ぎ、もどられたら是を煮て進ませせう」
 「オ、頼母しい兄弟思ひ、しかし元助殿もこなた様を大切にさつしやるが、揃ひもそろつて兄弟衆、其志を見込めたか此間より度々申入れる内山殿の御縁談、官左右衛門殿は御存じの通り、武藝は元より馬術も名譽、又文學においても博覧の聞えありて、日頃の行ひ仁愛深く、殊には此邊の組屋敷中の頭役をも勤められ、第一内福で飛鳥落る當時の勢ひ、又娘御のお組殿は器量も申さすとも御存じの通り、世間の人の

噂にも今楊貴妃の、小町のと評判をする美人、針持つわざは勿論の事、茶の湯香花詩歌連俳、絲竹の道に至るまでなんでも出来ない事はない、其上やさしく親孝行、家柄と言何一ツ不足無き御縁談と申すもの、失禮ながら恣様な所へ聲入なるは、御仕合と申すもの、夫を彼是御辭退なされるは、愚老において一圓合點が参りませぬが、ちとお心得違ひかと存するゆゑ、篤と御勘考なされたが能ござらうて、郡「此程より御深切、内山氏へ聲養子に参れと段々との御説得、實以て、忝なうござるが御覽の通り見る影も無き某、家柄と申し申中々もつて及びもない事とござる、郡「イヤ夫は其許さまが毎度仰られて卑下なされるお詞ぢやが、先方にては隣づからの御懇意を結ばれ御出入あること故、一をうつて萬を知るとやら、其許の御立振舞萬事に付け見所ある御器量と思ひ込れての御懇望、最早卑下成されての御辭退はおやめなされ、此雲齋悪い事は申さぬ、達てお進め申す程にお得心なされて下され、又兄御の元助殿へは愚老から委敷お断しを致しませう程に、善は急げと申す、郡「御得心成されて下され、夫共又舅御の有のがおいやか御縁女がお氣にでも入らぬか、しかしお氣に入らぬ御器量ではなし、只一通りのお断りではお片意地と申す者でござる、ア、餘りしやべつて口がすくになりました、御茶を頂戴、ト有合ふ土瓶を取て茶わんへつぎ呑む事、郡三郎思入ありて、郡「コリヤ成程御尤、子細を申さねば片意地のやうにも思召さうが、強ち左様の儀では御座らぬ、兼てより拙者心願ござつて是より三ヶ年の間御身で暮しますると言ふ内願を神佛へちかひ置きましたれば、夫故貴君の御媒介と申し、折角御懇望をもどきますは餘儀なき仕合、實もつて願うても無き御縁遊をうしなひまするは、天運を取はぐるやうなる心地にて、残念至極に存じまするが、是も拙者が薄命と思ひおさらめ居りますれば、此儀計りは御用捨下されい、郡「そりや早何か御内願があつて、御御身でお暮しとは

是非もなければ、又行末をお考へなさると御身では身の立たぬもの、今日に限る事でも御座らねば、篤と御勘考なされた上で御挨拶も承りませう、郡「イヤもう何かと御深切のお詞、忝う御座る、オ、夫はともあれ伺ひたいは、いつぞや拙者よりお願ひ申して御療治を受けましたる番場町に住ひ致す小汐田又之丞殿の御病氣はいかゞでござりますな、郡「イヤあの御病人は其許のお頼み故、愚老も一通りならず丹精致し、漸く配劑の効によつて瘡疾は治しましたが、又此程より脾胃兩腑の衰へにて鶏目の煩ひ、困つた者でござるが病人根性と申して、急に直したいと心せきの様子なれど、自然と腹中に積廻せし毒ゆゑ、容易の薬で急速に平癒はなさぬて、郡「ハテ其眼病の事は只今始めて承知致したが、嘸かし難儀致す御座らう、拙者も此頃は用事に取紛れ、見舞もおこたりましたるゆゑ存せず居りましたが、何んと急速治する御配劑はないもので御座りますか、郡「ソリヤ早速に治する妙薬がないでも御座らぬが、其お断しを致した所が容易に得難い品故益もない儀で御座るて、郡「たとへ得難い品なりとも、支那天竺は言に及ばず、蠻夷の産も居ながら自在に集まる吾邦、多くの金銀にかへたなら得難いと申す儀も御座るまい、郡「そこで御座るて、得難いと申して異國の品でもござらぬが、只人命にかゝはる事ゆゑ、郡「シテ人命にかゝはる品と申して如何なるものを用ひまするな、郡「さればで御座る、益ない儀を申し出しましたが、申さいでは何か愚老が虚言を申したやうで御座る故御断しを致すが、其妙薬と申すは七歳未滿にして酉の年月日時揃ひし女子の生血を用ひる時は、いか成る難症の鶏目たりとも立所に快氣する事また、く内、實に疑ひ無き良法なれども、なんと得難い品では御座らぬか、逆も及びもない事御座るて、郡「何さま空な尋物、しかし得難いと申しても廣い世界ゆる、ないとも限らぬ事ながら、病を救ふ良薬なればとて人命にかゝはれば是も不

仁の至りと申すもの、ハテ扱又之丞殿の病症困つたもので御座るな。イヤ夫は療治のお咄し、今日恐
 老が参つたは先差當る縁談の儀、とツくりと又一應も再應も考へて御覽じろ、決して悪敷は計らひませぬ、
 イヤ短日の折柄益ない咄しで遅刻致した、まだ兩三軒見舞ねばならぬ故お暇致しまする、ト立上る故郡三
 郎こなしありて、郡「毎度ながら何の風情も無く失敬のみ御免下され、イヤ其御挨拶は入らぬ事、くれぐ
 れも御縁邊の御挨拶は色よい返事が承りたいて、ハ、ハ、ハ、毎度ござうさに相なります、ト稽古歌にな
 り、雲齋宜敷向ふへ通入る、郡三郎門口迄送りて出て立戻りて思入あつて、郡「ア、人の心は人しらすとアノ
 雲齋老とした事が、我心中をしらすして縁邊進むる心の笑止さ、最早此身も今宵限りを生死の瀬戸、夫に
 付ても又之丞殿の眼病見舞うても、巳の刻迄には原氏へ打合せ置事がある故出むかねばならぬが、どうぞ
 早く兄じや人が戻つてござればよいが、しかしもう戻られるであらう程に、其内奥へ行て何かの用意致して
 置るか、ト是を唄になり郡三郎宜敷こなしありて奥へ通入る、此唄に向ふより元助難も、引わらち前裁賢好
 みの拵へにて兩懸の荷籠へ時の青物いろく入れ、片荷に蜜かん箱三ツ程をのせ、天秤棒にてかつぎ出で
 來り、花道能所へ息杖を立て空へ思入ありて、元「雪もやんだやうなれどお日さまが見えぬ故、何時である
 やらさつぱりわからぬ、今朝はいつより早う買出しにいつたつもりちやが、今内山様へ呼込れツイお断しが
 永いゆる大分遅くなつた、嗚かし弟が待兼て居やうに、ドレ早う内へ往てうり物の仕分して置るか、トこ
 んな事を言ながら、右の鳴物にて舞臺へ來り直に門口をあけ荷を内へ入れながら始終合方弾ながら、元「弟
 どのの奥にか今戻つたぞへ、ト是にて以前の郡三郎出で來り、郡「オ、兄者人今戻られましたか嗚かし寒うご
 ざつたであらう、元「何寒い連どら程の事があらう、今夜寝る時ト風呂遣入ると一日の寒さをちきりに取かへ

しまは、ト言ひながら青物を取分け、流し棚へ並べる事などある、郡「オ、あた、かに成るといへば最前御
 隣家より鴨をお貰ひ申したれば、あれを煮て進せたらあつたまるで御座りませう、元「ナニ鴨、そりやア結構
 な物をお貰ひ申したの、しかしあんまり前裁賢には食過るの、いつもくお貰ひ申す計で御氣の毒な事ぢ
 やのう、郡「何かお禮の致しやうもござらう、夫はさうとけさはいつより早う出られたに何故お手間が取れま
 したな、元「さればさ今日はこなたも用向で出ると言ふ事故、早く往つて戻らうと買出しは四ツ目計にして急
 いだのに、ちき近所へ來て大きな隙入を仕ました、郡「そりや近所でのやうな事で手間がとれました、ト合
 方きつぱりとなり、元「サア外でもないが御隣家の内山様の御門を通ると、日那さまが朝湯のお戻りがけ、そ
 ちに逢ひたくつて居た幸ひの事、マアく這入れと呼込れ、しやう事なしにお庭から御座敷へお招き成さ
 れ、日那さまが直々わしへのお頼み、此中から雲齋老をもつて常人へは内々申入れたれども、兄のそなた
 へ直々に頼みたいと思ふた折柄、そちに逢ふたは此縁談を結ぶの神の引合と言ふのちやとて、是非にそな
 たを舞にしたいたつてのお頼みなれど、此間からそなたが雲齋さまへお断りを言ふやうすを薄々しつて
 居る故、いろく言つてお断りを申したが、無理にも懇望せにやならぬと強てのお詞、何をいふにも爰の
 地面の地主さまなり、此本所で多くのお武家のお組頭をお勤め成さる、日那様が、我々風情へ手を下げて
 のお頼み、此前米の高時御扶持のお米を下すつた御恩、命の親の其お方の舞に成るといふは願うてもな
 い身の仕合、夫に又先の娘さまを女房にするとは有難い、殊に三娘と評判の美しいお嬢さんの舞に
 なるとは身の果報、馬鹿氣た事を言ふやうだが、此兄でさへ氣がわるい、殊に又家柄といひ身代といひ、爰
 一ツ點の打所のない縁談をなせ得心せぬのちやいの、トいろく思入あつていふ事、郡三郎こなしあつて

郡「未熟の此身を左程迄思し召下さる内山殿のお心差、又兄者人の御教訓、忝うはござれども、何を申すも此郡三郎は、亡君御存生の砌には人に勝れ御厚恩を蒙り、おなさけ受し拙者故、何程の出世致せば連他家へ養子に参り、榮花を極め二君に仕へる所存はござらぬゆゑ、兼ての願ひ最早拙者も今日限り武士道を捨て剃髪なして出家となり、亡君の御跡弔ふ追善に、諸國を廻り靈場へ納経致さん所存故、縁邊の儀はひらにお断りをなされて下さりませ」
 元「出家致すと言者が、なせ差料の刀を研せにやつたのちや、郡「エ、トぎつくりこなし」
 元「イヤ研やから持て来たを此間ちらりと見て置た、しかもきのふ寐た及合せたあの刀は、出家には用のないものちやが、アリヤ何の爲にするのちやぞ」
 郡「サアそれは」
 元「身の出世を好まぬと言は、命を捨てる心であらうかの」
 郡「何といはつしやります」
 元「オ、由良之助さまを初めとして、一家中にて心有る方々が徒黨を結び、敵討を成さるゝといふ事、疾から薄々聞て居る、他言はせまいと誓ひはあらうが、血肉を分けた兄弟は、跡にも先にもたつた二人、其兄を餘所にして、明して聞かして呉ぬのは水くさい心ぢやの、わしは其方に何様事でも隠しはせぬ、ア、なけなしの兄弟ぢやと思へばこそ、寒いに付暑いに付案じる兄の心も知らず、明して言たら他言をしやうかと私が心を疑ふとは、情ないコレ弟、トいろ／＼こなし有りて言ふ、郡三郎じつと聞居て」
 郡「ア、其お恨みはお道理なれど、是と言ふのも某一人の大家ならねば、たとへ親兄たり逆もうかつに底意を洩らさぬは、同志の者互ひの誓約、夫故にこそ是迄は我心中を申上ねど、斯く御存じ有る上は隠し包むは兄へ對して不信と言はれん、殊に切成るお心にはだされ、今一大事を明し申さんなれ共、必らず御他言はし下さるな」
 元「何の他言をする物を、我弟が御主君の敵を討つ、武士ならおれも助太刀でもせにやならねど、何を言ふにも其日稼の前裁賣、天秤棒はかたげて

も刀持すべししらず、しかしアしがなない身ながら立派な弟を持つたからは、心が武士ぢや案じぬがよい、決して他言はしませぬぞ」
 郡「とは言ふもの、壁に耳有る世の諺、ト元助へこなし、元助も心得返りへ思入有る、郡三郎は門の外を伺ひ戸をびつしやりぬる、是を合方きつぱりとなり、此方へ來り住ひ」
 郡「只今仰ある通り、噂のもれてお耳に入し事ならんが、亡君御死去有りし後由良之助殿を初めとして、一藩中の同志の面々、密に敵師直が首討取て、亡君の懣忿を晴さん物と、何れも流浪の身を苦め、其動搖を伺ふに、敵は要領堅固にして、殊には權家の事なれば容易に事を起しなば破れとならんも計られずと、由良之助殿が干辛萬苦の配慮も既に、天の時運を得たり逆同志の者へしめし合せ、今月今宵敵の屋敷へ深夜に討入る兼ての手つかい、殊に又此四ツ時には原氏とも申し談する儀もござれば、是非に他山の心構へ、わづか半時一時をたがへる時には日頃の辛苦も水の泡、かゝる大願有る身の上後業思ふ縁邊の儀は存じもよらぬ事、夫故達てお断り申すも今宵につゝまる拙者が一命、兄者人御賢察成されて下され、トよろしくこなしありて言ふ、元助思入有つて」
 元「始めて聞た其方の底意、あつばれ見上げた其膽玉、御恩に成つた殿様の其敵を餘所にするのは武士ではない、敵を討たうと思ふ心の健氣さ、日頃の氣質さうなうては成らぬ事、おれも疾から其心であらうとは思つて居たが、明して聞かしてくれはせず、今日になつて坊主になつて廻國に出ると、偽り言てもさうない事は研た刀でおれも氣取つて、ア、多人數の大家連、此兄に迄大事を明さぬ其心、まことに武士ぢやコレ弟、恨みを言たは私が誤り、どうぞ了簡してくれ、コレぢや、ト手を突て詫るこなし」
 郡「ア、コレ勿體ない事おつしやります、只願ひ成就す迄は何事も密々に」
 元「さうぢや共、此様な事いつ迄も言うて居て人に聞かれては一大事ぢや、したが今宵とては早急な事ぢや、

ア、是が兄弟の一世の別れ共ならうも知れぬ故、おれも一所に行たいが、オ、夫々今日はいつより荷も少く、たしまへに蜜柑を買って来た程に、幸ひ是を皆さまに息繼に持て往つて上るも、お味方する道理に當るぢやないかいの
 郡「何さま夫はようお氣が付れました、時に取ての甘露でござりまする」
 元「そんならばさう仕ませう」
 郡「拙者は他の朋友共へ申し残し置たい儀もござれば、此間に一筆致し置ませう」
 元「私にはから仕分して荷拵へをして置ませう、ト合方きつぱりとなり、郡三郎は有合ふ掛硯を持て来て狀を書きに懸る、元助は前裁物をかける思入あつて、前裁棚へのせる事杯あり、是迄の内能時分に橋懸りよりお組屋敷風振袖娘の拵へ好みの形り、おしづ以前の下女にて付添ひ出で来り、門口より一寸内を覗きて、おしづ紙を丸めて出しお組に是を投ると仕方する、お組恥かしさうに投る、件の紙元助に當る故是を見つければ
 元「又大きな雪が降つてさをつた、ト言ながら不思議さうに取りて見て」
 元「雪ぢやと思ふたらコリやなんぢや紙の丸めたのぢや、ト外の方を見る兩人居る故」
 元「ハ、ア今の雪を降らせた天人さまの正體を見付け、是はお隣のお嬢さまさこそはお寒うござりますから、マアお道入なされませ、ト言故おしづもどかしき思入有つて」
 元「サアあなた早くお道入成されませ、ト無理に連て這入り、郡三郎の側へ突やる、是にて郡三郎は書きしたる狀を手早く巻く懐中する事など、お組は間の悪きこなしよろしく有るべし、此内おしづは」
 元「申し元助さんわたしやお前にお頼み申す事がある故、一寸こちらへ来て下さりませ、ト元助を引つばつて」
 元「何やら小意味のわるい」
 元「サア早く来て下さりませ、ト引ばられながら元助捨せりふ宜敷あつて兩人奥へ這入る、跡にはお組耻しきこなしありて郡三郎の側へゆき」
 元「申しあなた今日は嘸お寒うお出遊ばしませうナア」
 元「何さま雪故が大分に寒氣も強うござるて」
 元「それにマア爰にはお火鉢もなうて尙

更ひえませうに」
 元「イヤ拙者はいまだ老屈致さねば、さして火も欲しうはござらぬ、ト無情くいふ故」
 元「ソリヤもうお若い内はお互ひに左程寒いとは存じませねば、ほんにもう私は顔があつうなりましたわいなア」
 元「夫は早御壯健な事でござる」
 元「エ、モウ其様に堅苦しい御挨拶をなさらいでも、ちつとはおやさしいお詞を、ト段々側へよる程郡三郎はかたく成つて」
 元「慳貪邪見かは存せねど、恠様御挨拶致すは拙者が生れ付の持前でござるで」
 元「サア其お堅いが御氣質でも、木竹に有らぬお身なれば、情と言事御存じでござりませうがな」
 元「イヤ情とやら申す事はどのやうな事やら剛毅朴訥の拙者故、更に辨へませぬ事でござる」
 元「テモマア難面い其御詞、ト是を一寸なまめいたる合方になり」
 元「此様な事申したなら嘸おさげすみもござりませうが、思ひ迫つて打附に申し出すも恥しながら、いつぞや此家へお出成された其時より、床しいお方と思ひ染め、父さまに迄人傳に、殿御持つならあのお方を是非御がねと申上げたら、父上にも又見所有るお方ぢや迎、兼てより其お心でお出で成れし折柄故、願うてもない幸ひ故、表向より言入てもお聞入はないとやら、夫も足らぬ此身故、おきらひなさるはお道理なれど、か程にこがれし身の因果、どうぞ不便と思し召、女夫になられぬものならばせめてお側に置いて成りと、お遣ひなされて下されませいなア、トいろ／＼こなしありていふ、郡三郎迷惑の思入ありて」
 元「是は御息女には何を仰せられるやら、見る影もなき流浪の拙者、殊にしがなき前裁渡世の其弟が、御直參たる内山氏のなんとして御養子になられませうや、世のたとへにも釣合ぬは不縁のもと、やら申すではござらぬか、コリヤ近頃お騷りものになさるのでござらうて」
 元「エ、モウ騷るのなんのとは餘所／＼しい事おつしやりまする、特へ世間に何の様なよい殿御があらうとも、あなたをのけて餘所外に、夫と定めるお方はないと心で心を定めたからは、迎も

添はれぬ事ならば死ぬる覚悟でござりますわいなア、トじつとなり泣く事。郡「ア、實もつて左程迄不肖の此身を思つて給はるお心差は忝い、拙者連も木石ならねば、其實情を感じてはすげなう申すは人情ならねど、子細あつて一生、女は持たぬ決心。組「ソリヤアあなたは一生女を持たぬ心とおつしやりますか。郡「いかにも。組「シテ何の様な子細にて持たぬと仰しやる譯を言て聞せて下さりませ。郡「我心底を打明てお聞せ申すも否事ながら、いはねば御決心が相成ますまい、益もない事ながら申すであらう、某事は主家没落致してより、斯浪々の身と成れど、其主恩の忘れず、二君に仕へる所存無く、只々主君が三年の其喪を越さば出家を遂げ、諸國の靈場順拜なし、三君の御菩提を弔ひ御恩送りのはしにもと、思ひ込んだる拙者の立願、夫故女子を持たぬと申すは、此義理お察し有つて思ひ止まつて下さりませ。組「スリヤいよくあなたには御出家成さる、お心故、女子は持たぬ御決心、夫が眞實の事ならば、私の願ひも叶はぬ道理、迎も添れぬ事ならば兼て覺期の此身故、せめてお側で、さうぢや、ト懐中より合口を出し自害しやうとする故、郡三郎あわて留め。郡「血迷ふたかコレ御息女。組「血迷ふたとはお情ない、放して死なして下さりませ。郡「イ、ヤ殺さぬ。組「どうぞ死なして、ト兩人宜敷争ふ此時、奥より以前の元助おしづ走り出で来り。元「コリヤマア嬢さまどうした物でござります、お前を爰で殺しては此元助が何と旦那様へ言譯が成りませう、エ、モとんだ事を成されますナア。しづ「急すと申しお嬢さま、お手をおはなしなされませ、ト元助おしづ兩人して懐剣をもぎとる、郡三郎は腕をくんでじつと思入れ、元助も思入あつて。元「始終の事は残らず奥で開て居りました、あなたも御尤ぢやが又弟も尤と言つて居ては埒口がない故、お互ひにかう突詰めては理も非も別らぬ物ぢやによつて、跡でとつくり言つて聞せ、悪いやうには仕ませぬ程に、此場は

さつぱりと私にお任せなされて下さりませ。しづ「本にさうでござんす、おまへが兄さんの高下で弟御にもよう御得心のゆくやうに、とつくりと御意見成されて、何卒早う女夫に仕て上て下さんせいナア。元「オ、呑込んで、私が急度呑込だ程に、先お宿へお歸り成されて、お氣を落付なされませ。しづ「サア兄さんが呑込しやんしたからは、あなたのお願ひも叶ひませう程に、ア、申し其様に泣てばかりお出遊ばしては、お父様が何事かとお案じ遊ばしますから、何氣なしに早うおかへり成されませ。組「夫ぢやというて、ト行きともながるゆゑ。しづ「アレマアお情の強い、サアお出成されませいなア、ト早い唄になり、行くまいとするを無理に連れて橋懸りへはいる。元助跡を見送り思入あつて。元「ヤレ、大風の吹た跡のやうぢやな、ト郡三郎はツとこなしあつて。郡「ア、迫るは女子の性質ながらハテ扱迷惑千萬ナ、兄者人。元「何ぢやぞいの。郡「殆んど當惑致してござる。元「困ると言ふは尤ぢや、おれも今のやうに呑込んではやつたもの、矢張困るて、女子供と言ふものはわからぬ者ぢやの、出家するによつて女は持たぬと譯を言ふに、死ぬと言ふのは先が無理と言ふものぢや、弟が忠義を立てやうと言ふ其邪魔に成る事ぢやもの、此上分別はない程に、ツイ一はしりいて旦那様にお目に懸り、きつぱり御断りを言ふ分の事ぢや。郡「しかし只今の様子では一ト通りの御断りでは得心も致すまい程に、御如才はござりますまいが一應も再應も、屹度お断り成されて下さりませ。元「案じぬがよい、いはば賣物買物ぢや、代物はこつちの物賣ぬと言ふを買はうといつても賣ぬ分の事ぢやて、一走り往て断つて来ませうよ。郡「何分にも宜しう願ひます。元「ヤレ、益と節季と一所に成つたやうぢやナア、ト唄に成り、元助宜敷向ふへ這入る、跡に郡三郎思入有つて。郡「大事の前の小事といへど、今降りかゝる妨げも積れば解る白雪と、ともに消行く命の際、是がいはいゆる寸善尺魔、爰に長居は、ト立

上り、膝の座を拂ふを道具替りの知らせ。一成らぬはへ、ト此仕組宜敷道具ふんまはす。
 本舞臺正而中足本線附三間の家體、上手附家體の所淺黄壁の丸窓障子建ある事、欄間角かうの替割、
 家體の向ふ上の方へ壹間の床の間軸懸て有り、真中塗り下げの瓦燈口太鼓ばり三尺の出道入口、此下手
 一間の所地袋棚、下の方落間跡へ下げて建仁寺垣、此前に柏の立木下座の所植込の張物にて見切り、
 いつもの所に風雅なる栞門、都て割下水組屏敷内山住居、庭内座敷の懸り眺への通ちに銚り付け、二
 重の上に内山官左衛門羽織袴壹木さし、少しふけたる好みの拵へにて蓑盆を控へ居る、縁の上に以前
 の元助かしまつて居る見得、稽古唄の合方へ張扇の音をあしらひたる鳴物にて道具納る、ト元助こな
 し有つて、

元「あなた様の折角の頼みと言ひ、殊には弟が出世の事願うでもない結構な御縁談と嬉しよろこび戻つ
 て弟へ其山を申し聞せましたれば、官「早速得心致したか、元「イエ得心は得心でござりますが、不得心でご
 ざります。官「ナニ弟が不得心ちやと申すか、元「へい御意にござります。官「不得心と申すからは此官左衛
 門が氣に入ぬか、娘がいやか、身代が不足な、何と申した、元「申々左様な譯では無く、お家柄と申し御
 身代と申し、舅御さまに取つては申分も無い御慈悲深い旦那様、殊に又御器量勝れたお嬢さまを女房
 にするは結構過ぎた身の果報、とは言ながら、八百屋風情の弟が内山様の御養子と成つては、御名跡を秘す
 やうなもの、御辭退致してひらにお断り申してくれいと弟が頼み、此事計りは兄の高下にも行ぬ故、よん
 所無くお断りに上りましてござります。官「イヤ、替へ其方が前救済でも、人は皆神の御末、高下を申
 すは開けぬのちや、貴賤を論せず正直にて器量有る者が誠の人間、そちが弟郡三郎は流浪致せど人柄と

いひ、立振舞中々ト器量有る者と見極めた故相續人に貰ひ受け、上へ願うて家督を譲らば、家名を起す
 共機す事無き侍と見拔しは此官左衛門が目水晶、殊に娘が懸想して二世の夫と思ひ込み、人を以つて
 親への頼み、おれも惚れたりや娘も惚れたと、そこが親子の恩愛で、早う貰うて悦ばせたさ、其媒介も雲
 齋老に頼みおけど、いまだになんの返事も無く、待遠故に此方を呼込み、直々頼むも心のせく儘、最前迎
 も此官左衛門が手を下げて頼むと言も能々の事、卑下も辭退も時によるもの、不足がないと言ふに断ると
 言ふは、コリヤ何か外で言かはしたる女子でも有るのか、元「イエ、弟に限り其やうないやらしい事のご
 ざりませぬは、此兄が誓言必ずないは知れて居ります。官「左すれば外に望が有らうが、其有るないは弟
 の事故知らぬ事は有るまい程に、その子細を申したがい、元「コリヤ成程ト通りの御断りではお聞入は
 ござりますまい、實の所は弟が望みの有ると申す事今日迄は存じませなんだが、御縁談の事を勧めました
 ら得心致さぬ故、私も不思議に思ひ、いろ／＼にせめましたら、弟が申しますにはお果成された御主人様
 の御家断絶、其後浪々致し居つても御恩の程が忘れぬ故、出家して御菩提を申ふがせめての忠義、夫故
 女房は持ぬと決心仕りました故、御断り申してくれいと事、私も悔り致し色々意見も致したれど、
 片意地な弟ゆゑに中々承知致しませぬ程に、断りに上りまして此事をどうも明らさまにも申し兼ね、
 一ト通りのお断りを申しましたる所、旦那さまのお理詰ゆる仕方がなさに此お断を致します。官「ム、
 スリヤ弟には出家致して亡君のなき跡申ふゆゑ、妻帯はならぬと申したのちやナ、元「左様さうにござり
 ます。官「何さま剃髮染衣の身とならんと懸期せしゆゑ、縁邊嫌ふはコリヤ尤と申したいが、餘人は知ら
 ず此官左衛門、此義一四吞こまぬて、元「そりや又なせでござります。官「オ、兼て見所あるものと、先頃

閑暇の折柄に詩作をせんと招きし時も、餘人を交すたゞ兩人、茶を煮て終日夜に入る迄、今昔和漢の雜談に事よせ、弟が器量を試さんと種々と心を引見るに、才智勝れて勇有り、義有り、名を擧る其器備り末頼母敷若者と見究め置たる天眼通、夫に何ぞや命惜しさと女々敷も、雲水抖擻の身となつて佛いちりをするやうな、柔弱懶惰の心ならねば、出家せんとは人を謀る誠の偽り、深き大望ある故に品能く申して縁邊を斷るは、底意に一物有りと見ぬいた官左衛門、其實正を其方がよも知らぬとは申されまい、元「イエモウ只今申上た通り、外になんにも私は存じませぬ事でごさりまする、其方が知らぬと計り言張つても、今申す通り一物有りと見抜いて置た上からは、隠すとも益ない事、必らず存じて居やう程に、其子細申せ、事の筋道理にあたらば、達ての斷り聞入れまいものでもない、夫ぢやによつて弟が腹臍の所サ、申せ〜」元「是は又旦那さまとした事が、存せぬ事を申せとは餘り御無體でごさりまする、」元「イヤ無體でない、存じ居る事を申せと言ふのぢや、なせ夫が無體ぢや、」元「夫ぢやと申して知らぬ事を、」元「左程に申張る上は此方逆も刀の手前、申出せしうへからは聞では置ぬサア申せ〜」元「何も申す事はござりませぬ、」元「テモ強情に申張るな、よし〜言はぬにおいては此座はたせぬ、覺期致して挨拶いたせ、トきつと言ひ、刀の柄に手を懸け、きつとなりおどす事、是には元助恟りして飛のき、」元「ア、桑原〜、マアマアお待成されて下さりませ、あなたが其様にお腹をお立成されておつしやる事、日頃御恩の日那様へ申上ぬも不人情、といつてあれ程弟に他言はせぬと誓つていつた一大事、とんだ所へ出合て跡へも先へも動かれぬ、ア、どうしたらよからうナア、」元「何と申す、他言はせぬと弟へ誓ひし詞の一大事故、申されぬと言のか、」元「左様でござりまする、」元「ム、成程、元より律義な其方なれば其義に當惑致すなら、此方逆も内

密の事承るには、他言はせまじき武士の金打、ト手早く差添の小刀、柄にて金打して見せ、元「まづ此通り、ト元助嬉敷こなしありて、」元「エ、有難うござりまする、御他言成されて下さらねば、弟が日頃の一大事、申上げてても大事な、もしもや洩れた其時は、弟はともあれ多人敷の方々が、心盡しも水の泡、どうぞ密々に成されて下さりませ、」元「急度承知致し居る程に、安堵致して申聞せ、ト是にて官左衛門の側へ寄り、」元「旦那様恠様な譯でござります、ト合方きつぱりとなり、聲をひそめる心有つて邊りを伺ひ思入ありて、」元「弟が日頃の心願は、けふが日迄も此兄の私にさへいひもせねば知りませぬを、御縁談の事よりして、御主人の菩提の爲、天窓を剃て回國する心故斷り言うてくれとの事、ハテ不思議な事も有るものぢや、出家すると覺悟したものが、此間刀を研にやつたのをちらりと見た故恐な私も氣が廻り、ゴリヤ只事では有るまいと心を付て居る内に今度の事、段々理窟で問詰たれば、とう〜本音を出しましての堅い口留め、其一大事と申して外の事でもござりませぬ、鹽治さまが不慮の御死去に御家の斷絶、御家來はちりちりばら〜、是と言ふのも皆師直さまの仕業ゆゑ、御主人も御切腹の時嘸御残念と御家老山良之助様を始めとして、忠心義心の人々が徒黨を結び敵を討んと艱難辛苦、しかも今宵と事極まり、一命捨て、の敵討、弟も人数の内なれば、夫故どうも御縁組は成らぬと言譯、どうぞ此事御他言成されて下さりまするな、トいろ〜こなしあつていふ、官左衛門思入あつて、」元「オ、さう有らう〜、流石は高田郡三郎、さうなうては叶はぬ事、心に願ひある事は此官左衛門が見抜きし眼力に相違あるまいがナ、ア、連れ忠義の心ざし、猶々床しく慕はし、モウ此上は手短に、直に參つて懇望致す、ト立上るを元助あわて、」元「ア、申しお出なされた迎いませぬ、ト留るを振切り、」元「イ、ヤ參るは〜、」元「成りませぬ〜、ト争ふ事あつて、

此時奥よりお組おしづ出で来り 組「ア、申し父上さま、様子は奥で聞きました しづ「マア〜おしづまり遊ばしませ、ト留る事よろしくあり、此時四ツの時計鳴る、是を開き元助恠り思入ありて 元「南無三、アリヤモウ四ツを打つ、弟が大事ぢや、さうぢや、ト一散に向ふへ這入る、官左衛門思入あつて 官「テモ狼狽たアノ元助、モウ此上は片時も早く隣家へ参り、是非を論せず強談なして、貰うて見せうは、それ腰を、ト是にておしづ刀懸の刀をとつて出しながら しづ「お出はよけれどお互ひさまに、詞つりてもしもの事があつたなら 官「イヤ案じまい、先はともあれ最早身共は耳順に近いは、ト行きかゝる故、お組思入有つて組「父さん必らず荒氣な事を、ト一寸袂をひかへるを 官「ア、コレ、トふり切るを道具替りのしらせ 官「氣遣ひ致すな、ト此仕組よろしく道具ぶん廻す。

本舞臺元の八百屋の道具、平舞臺に郡三郎以前のなりにて書きしの状を書て居る見得、相方にて納まる、トよろしく筆を留め思入有りて、

郡「兄者の蹄る迄と、書残せしを認めしまへど、未だに戻つてござらぬは、變つた事のなければよいが、ト此時四ツの鐘鳴る、是を開き 郡「アリヤ儘に入江町の四ツ、ア、コレ一寸参らねばならぬが、留主にしても出られまい、ハテ待久しい事ぢやなア、ト向ふはた〜になり、元助いつさんに走り出で来り、直に内へ這入り 元「大事ぢや〜、ア、苦しい〜息がきれる、ぢや、茶、くれ〜、ト是にて郡三郎有合ふ土瓶にて茶を汲んで出しながら 郡「ア、コレ兄者人、譯をいはず大事とは何事でござります 元「ア、やうやう口が開けて来た、サア大事とは内山さまが御自身に、今爰へござるはイヤイ 郡「ござつた連苦しうはござらぬ 元「所がおねはまことに苦しい譯ぢや、ツ、ツイ口が這つて今となつては仕様がな 郡「口が

すべつてとは、ソリヤ何を 元「ソレ彼の事をな 郡「ム、スリヤアノ一大事を、トきつさうして元助の胸倉を取り 郡「おつしやりましたか 元「オイヤイ 郡「此方さまはなア、ト急度こなし、元助濟まぬといふ思入にて 元「了簡してくれ〜、断り言うても聞入れず先さまは理を強く辯に任せて問ひ落され、言はねばならぬ仕儀と成り、ツイ言つて仕舞たはヤイ 郡「今更悔んで返らぬ事、とんだ事を成されましたナア 元「おれが悪い〜、エ、此口めが悪いのぢや、ト我手に口をつめる、郡三郎じつとこなし有つて 郡「エ、情ないお心ぢやナア 元「ア、勘忍してくれ〜、トふるへて居る、はた〜になり向ふより以前の官左衛門、袴羽織大小雪踏にて足早に出来り、門口にて 官「心せく故御免下され、トすつと内へ這入り、能所に住ひ 官「扱高田氏先寒暖の禮儀は差置き、急速の義故申さうは、ト合方きつぱりとなり 官「先刻兄御元助どのより其許の胸中委細 承り、通れなる御覺悟、元より左様の事あらん器量と兼て見極め置きしが、果して今事實を聞き、誠に忠勇義勝の程感激致し、猶々思の彌増して今日直々推参なし、是非共身共が聲がねに所望致さにや相成申さぬ 郡「是は〜内山様には、分に過ぎたる賞美のお詞、兄元助が御縁談のお断りに、何か跡かた無き偽りを申上げたやら、全く左様の義いさ、かもござりませぬ 官「ないと申す、女童なら偽りを聞ても濟さうが、正直律義の元助殿が何偽りを申さうや、殊に此程殿中にて且其噂なきにもあらず、其許人我懇望の聲となり、其列にもれる連敵の討れぬ事もあるまい、たとへ同志の盟を破り、洩れたる事は我又密に大星良金に對面なし、不義ならざるを申傳へん、某連もかく迄に信義を破らせ懇望なすも、何を隠さう娘お組は先代官左衛門か實の胤、我には義理有る中故に、先官左衛門死去の後入夫と成りし某故、義理有る娘がこがれる男、添はれぬ時は一命捨てんと覺悟の様子、若しもの事が有る

時には我胤ならねば知らぬ顔して置しと世のあざけりも有る習ひ、左有る時には組中へ、官左衛門が顔が出されぬ、今主人が仇討も其許登人の事ならば、何しに拙者が留めやうぞ、良金始め多人數と聞く上は、譬へ登人かけたり迎、仇討成就は知れたる事、夫ぢやによつて平に承引して下され、といろくこなしありて言ふ、郡三郎じつと聞いて 郡「其許さまの御胸中、委細に承知致して見れば御尤ではござれ共、何がと申すも同様ながら、此義計は何とぞ御用捨下されい 官「スリヤ加程迄耻をあらはし事を分け頼み入るのに、承引無くば是非に及ばぬ、是より直に登城なし、老若方の退出なき内、此段を申達なし、義黨の望みを失はうか 郡「サア夫は 官「但し承引召る、か 郡「サそれは 官「左なくば申達致さうか 郡「サア 官「サア 兩人「サア」 官「其許登人洩れた迎、障りにならう様はない 郡「ム、 官「オ、忠義に傾く其性根、最早何程申す迎承引はござるまい、此上彼是申すに及ばぬ、おいとま申す、ト立上り、行かうとする故元助とめて 元「ア、申し旦那様一寸待て下されませ、是々弟斯言ふせつばに成つた故、此せつない義理合を、大星さまへ申上げたたら、そなたの落度になりませまいに 官「オ、人我につられければ我又人につらしの諺、是非共申達致すの所存 郡「スリヤどう有つても、ト袖をとらへじつとなる 官「知れた事ぢやは、トふり切り行かうとするを郡三郎きつと思入あつて氣をかへ 郡「貴殿のお頼み承引いたした 官「阿と申す 郡「徒黨を洩れて貴殿の聲に相成ませう 官「スリヤ信實以つて 郡「今宵の仇討思ひ切つてござりまする 官「オ、よくこそ得心致された、此上相違はござるまいな 郡「何しに二言のござらうや 官「夫にて身共も安心致した 元「そんなら弟は得心してくりやつたか、どうなる事と思つたに漸々是で落付た、悲しむ有れば悦びと、扱御目出度成て来てこんな嬉しい事はない 官「オ、其方が嬉しいやおれも嬉しい、嘸娘も悦び居らう、何はと

もあれ差當る結納替り、此差添を進上申す、ト差添をとつて郡三郎へ渡し 官「中心はしかも備前長船、船も長く船底の、枕と祝ふ二世の縁、サ受納の一札認め下され 郡「即座の結納あまり性急 官「イヤ善は急げぢや片時も早う 郡「心得申した、ト有合ふ祝にて、手早く一札を書事有つて 官「オ、是ぞまことに幾久敷、今日より互ひに聲舅 元「是からわしも里親同前、ハテさまくな浮世ぢやナア、ト是迄の内能時分橋懸りよりお組おしづ出で来り、門口に伺ひ居る、此時兩人よろしくこなしあつて 官「旦那さま首尾能く事がと、のひまして、お嬢様も殊ない御機嫌、ト是にて官左衛門兩人を見遣り 官「兩人も爰へ来やつたか 官「ハイ案じたよりも産が安いと、こんなお目出たい事はござりませぬわいなア 官「こりや娘嬉しうあらう 官「父さんほんまでござんすか 官「本まちや程に悦べく 官「ほんに嬉しうござんすわいなア 官「サ時に取ての最上吉日、是より直に同道いたさん 郡「スリヤ直さま御同道とな 官「オ、延引致さば其内に、もしも故障の出来もやせん、殊に落付く夫迄は、窮屈ながら他出をとめ 郡「さりながら男子が一世の身祝ひ、支度と、のへお跡より 官「イヤ支度萬端此方にて、疾より用意致してござる 元「そんな事にお差支のなにお内 官「御遠慮なしにすこしも早う 官「そんなら是より内へ往て 官「暮れなば直に婚儀の式 官「雄雌の銚子のおさ、事 元「三三九度も弟が身の上 官「イヤ兎角いふのも心が急ぐ、イヤ連立つて、イヤ踏ると言ふは忌詞、サ開きませうか 郡「其ひらくとは優曇華の花 官「花簪どには直さま與人 郡「ア、未代不忠の 官「エ 郡「イヤ御同道、ト刀の提緒を捌くを木の頭 郡「いたすでござらう、ト刀を帯へ差込むをキザミ、官左衛門、お組は嬉敷こなし、元助は辭儀する事、おしづは門口外へはき物を直す事、此仕組よろしくはやい合方へ、雪おろしを冠せたる鳴物にて、よろしくひやうし慕。